

七三 大和騒動ニ付井伊家受持方面戦況

大和下市村より

五十町上手ニ

かばの木村と申処、一台場、二台場迄騎取、幕三ツ取申

候、とち原と申処ニて、京都へ御あげニ相成候、

(井伊直徳) 彦根様宿陣之処、かばの木村へ交るく騎取申候付、請

所ニ相成申候、

かばの木村へ案内之者相たつね申候処、浪人同服之よし

ニて、段々申聞候得共闖入不申手段偽と申候而昨夜村中

焼打ニいたし申候よし、郡山広橋村を焼、寺彦軒・家十

五六軒、

山道大木切たをし、村道へ横たへ、大岩・木石をちらし

切入出来不申処へ、井伊様御家来廿二玉之大筒ニて七人、

一番騎

矢島多門

藤野太左衛門

川上孫左衛門

島田万太郎

小村又助

小西吉左衛門

前川啓司

右ニて鉄鉋打立一番騎切之よし、今夕刻一番御注進申来

候、

泥川へハ

井伊様御家老

(筑後) 貫名様

一番騎被成候て、天の川御騎切之よし、左候てほとなく

叛逆人ハ落城之よし申来候、

此処迄認メ置て人便り申候処、今夕四ツ頃又々急飛着、

大和下市村

八百卅軒計

昨夜皆々焼キ乱妨いたし候よし、今夕明朝大合戦、一番

騎・弐番騎井伊侯御出陣、泥川より天の川井伊様御家老

貫名様と申御方御責口ニて敵敷よし、誠ニく昨日ハ井

伊様格別御手柄之よし、則 公も井伊様咄ニ比ニハ井伊様宜敷便承候て、大慶存と申上候、

九月十日

和右衛門

長谷さま

文書原寸 縦一六・三種 横一三四・二種

三言 京都加茂隠士ノ肉食及デウス礼拝禁止ノ

帳紙

諸君子之風諫を糞条々左ニ記

一 九月廿三日祇園の南門に張置有之といふ文の趣を察するに、是完全く

朝廷を輕蔑する幕吏等の手に出たるへし、長藩を辱しめて云条々ハ、左も有なん、然共其初に云、三条実美等の国事掛りの所置にて、近畿悉く 朝廷の御領に被成度候旨 関東江 伺出に相成り、然ル所、近畿若シ左様ニも相成り候ハ、近国の諸大名を何処江片付候哉、右様之無体の難題を被懸候は、甚深き隠謀有事に候云

々、已下 按するに 朝廷の御領ハ本より朝廷の御領にして、今更関東の私領を 朝廷の御領にするにハあらず、又諸大名を何所ニ成共片付くへきならハ 將軍家の私領三百万石を除てハ、六十余州の内、天領御領のある所何れ江なりとも片付けるに何の難題と申事かこれあらん、実ニ数百年來、將軍家より御領の支配政事ハ成されたれ共、天領といハ、御領といふ名ハ改らず、然ハ將軍家ハ吾妻の代官なる事明白なり、右之書末にいたりて又云、三条実美か関東の八百万石を凝望致し王政に復古致し度存意より云々、関東ハ八百万石の代官政務を任しさせられたるのミ、將軍家江八百万石を奪取られたるにハあらず、若シ奪取たるなれハ將軍家ハ大逆臣にして、無此上朝敵なり、いかんぞ將軍に任せしめ給ふへけん、依而今京都ニ而無恐憚公然として朝廷を輕蔑し、如此事を諸人面前に告知らすハ、君臣の間を弁へさるの弊なり、

一 近頃勇士と申者の内に、我ハ神道じや、大和たましゐ

じやといふ者有、其者共ハ殺生して報かある因果ハ不免などいふ事ハ、仏者の妄誕なり、そんな事を信する者ハ日本魂を取失ふたる者なり、なと云て人を殺すをも草木を切ことく思ひ、堂塔に放火なとして善事をなしたる如く思ふよしなり、神道といふものハ、如此無慚無道の事にハあらざるへし、今国政の暇隙を見込て仏法を毀廢せんとする者多し、是ハ国家危急の秋を愁へず、益累卵の如く危からん事を希者なり、世も静て後ハ廢仏ハ兎も角もあれ、今なすへき時にハあらず、殊ニ千有余年の事迹を見るに、仏法ハ 神慮に叶事と思へるゝなり、

一 近來武家等好て肉食する人多し、是ハ実ニ可忌事なり肉食ハ穀物の乏しき不毛の地に住夷族の風俗にて、禽獸にひとしきものなり、吾国ハ万国にすぐれて五穀成熟すれハ、穀物を食して身を養ふに余あり、すてに太田氏も誠め置くゝ事あり、魚を食して飽されハ鳥を食す、鳥を食して飽されハ獸を食す、獸を食して飽され

は人を食すへしと、人にして人を食すれハ、ゆハゆる鬼といふものなり、漢人ハ戰場にて人を食せし事あり、日本ハいまだ人の人を食せし事を聞かず、今又聞、近來日本船清国江漂着せしに、清人の云、日本ハ 神国なる故清潔を尊ふ、獸肉ハ食せざるへしと云て、魚鳥計りを饗応せしと、然ハ日本人是を食するハ慚かしき事にあらずや、扱又日本にても獸を食するハ大都会の地計りにて、辺国ハいまた其機に遷らず、鹿肉を食へハ穢るゝ故に四十日の間ハ神仏を拝する事ならぬなと云なり、又都会の地といへ共、町人か穢としてはを食せず、只武家或ハ相撲取・男だて等の様なる者計り是を食す、然ルに近頃御築地内江も密ニ取入候由ニ聞ゆ、朝廷にハ御存も無之に哉、右様之次第ニ而、禁中を奉穢ハ実ニ欺かハしき事なり、然共其党ハ云へし、神代皆肉食の事ありと、其ことく云族ハ、己か得手の方には古例を引て云なり、是ハ己か好む所故なり、神代ハいかゝ有しか知かたしといへとも、今思ふに、神代ハ

事いまた開けず、穀物乏しき時も有しに哉、今の世にハ不相応の事なり、今日に獸肉を好むハ全く夷族に見習なり、彼アメリカの小人などハ己か小便にて己か面を洗ひなと致由なり、其さまハ犬猫にも劣りたる穢しハしき事なり、其外交合する様や子を産時の様などハ論にもならざる穢ハしき事の由なり、夫等の者のする態を見習ふてよき事ニ思ふハいかなる心得違そや、又肉を食せざる者ハ氣力弱しなといふものあれとも、我等獸肉を食せざれとも身<sup>壯</sup>健なり、又肉を食ふ人といへとも、病氣もする力も肉を食せざる人に倍增する事なくて、其肉毒の強きシルシハ蝦夷人を見て知へし、蝦夷人ハ不毛の地に住て肉を食する事多き故に、疱瘡を病へハ十人の七八人は死といふ事なり、然ハ肉を好む輩ハ追々にハ人の肉をも喰ても、穢とも慚とも不思議になるへし、これ全く日本人にハあらず、外夷の部中なり、形計り日本風をして居ても、神や仏にハ疎せらるへし、依而夷族を嫌ふ事なれば、第一夷人に似た

る肉食を断へし、不然ハ魍魎等に誘はれて、血をすゝり肉を食するも常となりて、人面獸心を免かれず、依而仰冀ハ

官より被仰出て断然と肉食の事を御停止被成下度候、不然ハ町人迄も追追見習、日本ハ丸で夷国風に可相成何事も浅きより深きにいたり、卑より尊きにいたる、実ニ可哀歎事なり、

一伝へ聞、今関東におゐて異国掛りと言役人ハ、皆々内密にハ異国最眞にて、殊ニ彼のデイウスと云神を信じ密々に祭るといへとも、いまた切支丹宗を弘通せよといふ御触の、公より出さる故に、甚秘し居る由なり、是ハ己か利欲より悪しと知りながら、其道に入なり、若シ此仮にて月日も過れハ、追々江戸中其機を受、夫より武州一國其機になり、果ハ六十余州夫ニ成果、吾國に古より祭る所の神も仏も打捨に可相成、是をもかなしミ、是をも禦かずんバなんとカせん、

右申条ハ、上を恐れざるに似たれとも、国運の次第



実ハ姦吏共之心ニ否申上、何れも御安慮被遊候条、奉  
申上候、

右之条々 御叡慮之程奉伺申上候、以上、

九月

毛利宰相 (毛利定広)

松平長門守 (毛利定広)

吉川監物 (経幹)

毛利甲斐守

毛利讃岐守 (元魁)

薩州より言上之趣

前同断、然は昨年来 御名 を以周旋奉申上候始末、御  
一決之機会も不被為在候趣は、以

叡慮被仰付候乾御門御守衛之義、去ル夏(公知)姉小路殿異変之

砌、不時交代被 仰付、又は長藩江被仰付在之候堺町御

門御守衛之義も、去ル十八日之 御採之砌、引弘被仰付

候段、甚以不都合之義と奉存候、全姦吏之所業と奉存候、

然は此度上京可仕候得共、暫時大坂滞港仕居、

天機之程奉待上候、當時在京罷在候奸吏、肥後守・相模  
守・雅楽頭之逆候不申及、中川宮等ニ至迄、当方江罷越候

様奉願上候、何れも被為捨置候ハ、不意ニ押入候も難

計候間、乍恐不被為腦 (天)

叡慮候様、前以御断奉申上置候、何分

天氣奉伺上候、以上、

九月

御名

土州より言上之趣

前文同断、然は此度薩長より上書を以被申立候義、何れ

も同意之義ニ御座候、

叡慮之程奉伺上度、

勅答拜聞之上、一同上京可仕候、何れも両侯之意ニ随意

罷在候間、此段宜御沙汰奉伺上候、以上、

九月

土佐少将

同幾千代

山内惣左衛門

右書付追々探整仕候処、偽書ニ相違無御座候由、

冊子原寸 縦二六・八種 横一九・八種 三枚

三三 竹下清右衛門ヨリ幕府へノ出願

竹下清右衛門ヨリ大久保一藏へ 二通

製鉄所蒸気船譲受ノ件

七二六ノ一

写

先達而拝借被仰付候蒸気御船、此度修理大夫方江願請仕

度奉存候、尤代銀之儀は、当節少々上納仕残銀之儀は、

国産之品等を以追々納方仕度奉存候間、御差支之儀無御

座候ハ、御聞濟被下度此段奉願候、以上、

九月

薩州聞役

竹下清右衛門

(付箋) 一書面之趣承届候、委細之儀は掛り江可被談候、

文書原寸 縦一六・三種 付箋原寸 縦一六・二種

横五三・五種 横 四種

七二六ノ二

製鉄所より御借入相成候蒸気船願受之儀、宇宿彦右衛門

并野村宗七江被仰含越候趣承知仕候、別紙之通願書差出

申候処、御付札之通御免許相成申候、代金之儀は、未納

方不仕候間、当十二月迄ニ爰元御商法御益銀之内より可

成相減相納候様可仕候、且又船号之儀は、何分早日被仰

渡度奉存候、別紙相添此段御届申上候、以上、

但此節御借入ニ付御謝礼金ニは不及様取計申候間、

此段も申上候、

亥

十一月五日

長崎在勤

竹下清右衛門

大久保一藏殿

文書原寸 縦一四・三種 横九二・八種

三三 八月十八日政変ニ対スル御褒賞御沙汰書

(包紙ウツ書) 「上意振」

兼々國家之為尽力致し、去八月十八日被為復正議候節、

滯京之家来共不一方周施致し候段、兼而申付方行届候儀  
と満足致、依之道具遣之、(後欠)

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一二六号  
文書下同文ナリ)

文書原寸 縦二一・一糎 包紙原寸 縦二八・三糎  
横三八・五糎 横四〇・八糎

三三 八月十八日政変後ノ勅諭

横浜鎖港ノ御沙汰等

九月八日 藤堂侯より御届書之写

(高野)  
中山前侍從殿使者

(実行)  
渋谷伊与作

今般召捕候伊与作殿敷取調候処、今般誅罰之儀

勅命之由ニ候得共、鎮守府將軍之命被為蒙候有栖川宮江

鉄炮を打懸ケ、長州之忠士を 御所内江入込不申事、

皆会藩之所意ニ而、其儀之

勅命は真之 勅命ニあらず、其証ハ、去ル丑年以來恐多

も攘夷御決定之御事故、我等江は真之

勅命ニ候得は、今度追伐之儀は中山侍從江申込可有之所、

其儀無之旨申募り、不慮ニ被召捕候段、甚残念之旨申

立候ニ付、中山前侍從ハ当時庶人之身、尤偽 勅ニ相

違無之、速ニ追罰候様

勅命之上ハ、片時も難差置、殊ニ陣場江狼ニ立入候ニ付

召捕候儀、是以

叡慮之旨申聞候処、何分 勅命真偽之廉了解不仕、品々

申立候、右之次第ニ候得は、応接仕候者共勿論、一統

不堪憤怒候段申越候、此段御届申上候、如何可仕哉、

宜御差図可被成下候、以上、

亥九月八日

藤堂和泉守使者  
水田源内

九月十五日夜 伝奏より御達書之写

根来上総

上京之儀、去月廿九日

御沙汰之趣も有之候間、人数減少上着可有之候事、

亥九月

右被 仰出候得共、御取返しニ相成候、

長州より言上書之写

使者口上書

宰相父子於国元、去月十八日 輦轂之下騒擾之趣、尚  
堺町御門御警衛被相除候之辺奉承知候ニ付而は、

叡慮之程如何可有御座哉、深奉恐入候ニ付、不取敢家老  
之者差登せ、赤心之趣申上候心得ともニ御座候を、宰

相父子年来尊

王攘夷之心を尽し、殊ニ昨年蒙

天勅候已来、弥勉励日夜寢食を忘れ乍申、只

叡慮貫徹仕候様苦心仕、偏ニ

天威之難有を以、家来共鼓舞致し被

仰出候期限、外夷及掃攘候処、

叡慮も被為在、尚此度攘夷之儀、弥御依頼被為在候段、

蒙

天勅奉感拜候、然ル処、去月廿九日御達之趣有之候事ニ

付、家老之者滞坂仕、上京之儀相伺候処、家来減少罷

登候段、度々御内意をも奉承知、左候而屢被差留、就

而は宰相父子ニ御疑念被為在候御事ニも御座候哉、実

ニ宰相父子千辛万苦微忠を尽し候段、家来一同ニ於て

も深致勘弁候処、不計も自然一朝之讒を以存外之疑を

受候而ハ、家来共ニ於ても君辱之儀難忍至情も有之、

於私は深懸念仕候ニ付、何分之御様子御内々被為伺被

下候様奉頼候事、

同書翰之写

今般夷狄

御親征之儀、未其機会無之、

行幸暫御延引被 仰出、猶堺町御門御警衛被成御免候

段被 仰下、謹而奉畏候、然ル処私儀、多年尊

王攘夷之心を尽し、追々

叡慮も被為在、監察使をも被差下、奉感拜候、不計も此

度御警衛御用被差除候ニ付而は、

叡慮之程如何可有御座哉、何共降心不仕、深恐入候、早

速私上京赤心を以理解申上候筈ニ御座候得共、異船防禦方精々心得仕候ニ付、家来之者ニ申含差登候ニ付是迄之寸誠被 思召候而、御憐愍之程伏而奉歎願候、

此段可然様 御沙汰之処仰候、慶親、恐惶謹言、

九月廿七日

勸修寺石少弁殿

(長門)  
長門宰相慶親

長州屋敷より願書之写

一根来上総帰国ニ相成候様御願之事、

一江戸留守居役小幡彦七(高徳)と申者、近々帰国ニ付爰元同役

申談儀有之、京都立寄相成候様御願之事、

一国元并江戸より来ル飛脚之者之儀は、京都入込二三日

滞留被 仰出候様御願之事、

亥九月

長州留守居

乃美織部(直、備江)

九月十七日 御沙汰書写

去十八日一挙之儀ニ付、毛利讃岐守以下(元總)

御不審之次第も有之候間、早々取調御理申上候様被

思食候、左候は是迄宰相父子之忠精も顯然候条、厚致

勘弁、言上可有之候事、

九月

十月十六日 御沙汰書之写

今度被 尋仰度儀有之、大樹上洛被

仰出、留守中自然横浜鎖港談判相弛候而は不宜被 思

食候間、可然被致委任、鎖港之儀成功有之候様被

仰出候事、

亥七月十五日

過日横浜鎖港取掛り之旨言上ニ付、委曲被

聞食度之旨、一橋中納言可然登京被(慶應)

仰出有之候得共、猶又大樹ニ茂被 尋仰度 思食候ニ

付、引統早々上洛有之候様被遊度旨、御沙汰之事、

亥十月

最過日御沙汰之通、一橋中納言ニも可有上京事、

〔付紙〕  
十月十六日 伝奏衆を以被仰出候書付之写

此度於関東鎖港及談判候旨言上有之候間、攘夷之儀  
総而得幕府之指揮、輕拳暴発之輩無之様、諸藩家来  
末々ニ到迄可被示聞従事、

亥十月

冊子原寸 縦二四・三種 横一七・四種 五枚

○三三 薩藩償金問題ニ付日本貿易新聞記事

三三 久光公ヨリ 山内容堂公へノ答書草案  
松平春嶽公

上京ヲ促ス 二通一葉

七三〇一

九月朔之芳墨、辱拜読仕候、向寒之候、御闔門御揃、御

堅康被成御座奉恐賀候、然は先達英夷軍艦領海江渡来、

終ニ及戰爭始末達賢聽、御使被差越、尚委細御示教被成

下候御紙上之趣、逐一拜誦、且何寄之御品預御惠投、御

厚情別而辱奉存候、実以大ニ心痛仕候得共、先当分は無

異ニ相成候間、御安慮可被下候、愚生ニも御用ニ付、早

々上京仕候様致承知、先月十二日発途、海陸無恙、去ル

三日着 京仕候、然処兵庫着船之節、家臣高崎猪太郎

中川宮之御内命を受、貴国并宇和島江致渡海候段申出候

ニ付、愚生よりも口上申含差上候間、定而拜謁、細事申

上候筈と奉存候、就而貴兄ニも御国事御多端ニは可有之

候得共、

神州之御為何卒速ニ御登京、御尽力之処偏ニ奉渴望候、

於愚生も大ニ力を得可申と、一日千秋之如く奉存候、幾

重ニも御奮発御登京被成候様奉存候、左様無之候而は、

方今之

朝議ニ而は、如貴論転危成安之御処置ニは至り兼可申奉

存候、尚書余拜顔之上と省略仕候、先は右御請旁以乱毫

奉得貴意候、

孟冬初六

二伸、時季御保護專一奉存候、以上、

七三〇ノ二

然ハ先般ハ御重役向三輩遠国迄為御使被差遣、御定論之趣被仰聞、別而辱奉存候、貴答之義ハ御使江申

述候間、定而御聞取被下候義と奉存候、且其後ハ御

上京一条ニ付、修理大夫連名之芳墨旅中江相達、委

細致承知候、

一書進呈仕候、向寒之候御座候処、愈御清穆被為渡奉大

賀候、愚拙ニモ海陸無異、去ル三日着 京仕候間、乍憚

御安慮可被下候、然処尊兄御上 京一条

朝議聊御不平之御義有之由候得共、昨日御達之趣も有之

由候得ハ、此上ハ一日も早く御上 京被成度奉存候、於

愚拙も途中より少々風邪ニ被侵、未何方へも參殿不仕候

得ハ方今

朝廷之御模様未<sup>兩殿</sup>伺得不申候得共、正議被為立兼候趣ニ被

伺候間、何卒速ニ御登 京、御尽力之処奉渴望候、然時

ハ先般御約束之趣も御座候ニ付隨驥尾、周旋仕度所存ニ

御座候、一橋卿ニも御召之

勅諭御座候由故、不遠御登 京之答と奉存候、先ハ御上

京催促申上度、以乱毫奉得貴意候、

二白、時季御保護專一奉存候、方今之形勢、兎角公

平正大之議論を以、

朝議ヲ不奉助候而ハ、迎も

神州挽回之道も有之間敷と愚考仕、未一円獻言不仕

偏ニ 尊兄等之御上京奉侍候間、右意味深御汲受、

早々御発途之様、再三奉希望候、

文書原寸 縦一五・九糎 横四六・二糎（表裏一枚書）

三 久光公ヨリ伊達伊予守へノ返書草案

伊予守ノ上京ヲ促ス

〔編纂朱書〕  
「癸亥十月字和島江遣ス状」

先月廿八日之芳翰昨五日相達、拜読仕候、先以向寒之候、  
貴体御平靜奉恐賀候、愚拙ニも先月十二日弊邑発足、海  
陸無恙、去ル三日着 京仕候、乍憚御安慮可被下候、然  
は貴君 御上京之御旨趣、巨細被仰聞趣致承知候、容堂  
兄ニも中川宮より御猶予被 仰出候由、何等之子細有之  
候哉、愚意難弁御座候、然処愚拙兵庫着船之候、家臣高  
崎猪太郎(五) 宮之御内命ヲ受参り居、土州且貴藩江も致渡  
海、御両兄御上京御催促申上候段申出候ニ付、拙子ニも  
其筋御勧メ申上候趣、委細申含出船仕候ニ付、多分御両  
兄江拜謁、細事申上候筈と奉存候、就而は此上別ニ宮・  
陽明公等之御内慮奉伺ニ不及と奉存候間、一日も早く御  
登京被成候様奉存候、此地之形勢は高崎より申上候筈と  
文略仕候、先は着際大繁雜中以乱毫貴報如此御座候也、

十月六日

二伸、時季御保護專一奉存候、幾重ニも早々御上京  
被成度奉存候、乍恐 朝廷正議被為立兼候間、御両  
兄御登京之上は、御互ニ周旋いたし、

神州をして盤石之如くならしめんと奉存候間、是非  
速ニ御発途之処奉希望候、尚書余は奉期拜眉候也、

文書原寸 縦一五・九糎 横二二・二糎

三 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

小松帯刀ヲ近衛家ニ召スノ件

〔包紙ウツ書〕

島津三郎殿 内々 忠房

几下

十月八日夜

〔封紙ウツ書〕

島津三郎殿 内用 忠房

几下

乱書御推覧

緘

〔墨訂〕

尚以乱書御推覧可給候也、

寒冷ニ候、弥御勇健珍重、過日ハ先々御上京ニ而深く安  
心ノ事ニ候、併御不快御事如何之事と御案事申入候

扱尾張前大納言、明日巳刻頃被來候間、何卒小松帶刀巳刻前ニ愚亭へ入來候様御申付、御頼申入候、実へ前大納言事、帶刀ニ面会被致度旨ニ而、愚亭へ招候様頼ミニ候間、態々御頼申入候間、何卒巳刻前ニ入來候様御申付、御頼申入候、仍右要用而已、取紛乱書荒々如此候也、

十月八日戌刻

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一二三号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一八糎 包紙原寸 縦三〇・五糎  
横四九・五糎 横四二・八糎

近衛様

一橋様

貞君様江

右之通被進相成候間、拙者御使相動候処、厚御礼被仰上、御国許便宜を以申越候様承知仕候付、達

御聽候儀共宜可取計候、此旨申越候、以上、

十月八日

小松帶刀

大久保一藏殿

養田伝兵衛殿

文書原寸 縦一四・四糎 横八三・二糎

三三 小松帶刀ヨリ大久保一藏等へ

尹宮山階宮等へノ御贈物ニ付

一鮎 入箱一宛  
一海老 入箱一宛

一御菓子一箱宛

右

尹宮様

山階宮様

三三 將軍及一橋中納言上洛ノ召命

(端裏朱書)  
「癸亥十月十一日」

過日横浜鎖港取掛之旨言上ニ付、委曲被

聞食度之間、一橋中納言可有登京被

仰出有之候得共、猶亦大樹ニ茂被尋仰度

思食候ニ付、引統早々上洛有之候様被遊度旨、

御沙汰候事、

十月十一日

最過日 御沙汰之通一橋中納言ニ茂可有上京事、

文書原寸 縦一八・九種 横六二・六種

臺 松平春嶽公より島津三郎公へ

上京を報す

(包紙ウツ書)  
一島津三郎様 松平春嶽

親展

(愚) 十月十一日封発

貴札昨日相達、忙手披閱、如貴諭向寒之砌ニ候処、愈御清安、就中海上無恙、去ル三日御着

京之趣、并賀之至御座候、然は先般賤臣共貴国江指出候

ニ付、委纏御至念之御紙上、却而汗面之仕合ニ御座候、

其砌は何寄之御品々兩人江御惠贈忝致深謝候、越前守よ

りも御礼宜申述候様申越候、扱は貴慮之趣賤臣共より帰

船之上申達、都而御同論之義、大慶之至ニ御座候、扱又

小生今般

勅免相蒙り、

天恩深厚冥加至極難有仕合奉存候、殊ニ登

京之儀も被

仰出候ニ付、奉畏早々旅装相整、明後十三日発途、来ル

十八日着

京之日積ニ御座候間、此段御承知可被下候、何事も不日

拜眉之上ニ相譲り、委纏之御返答ニ不能候間、御諒察所

希ニ候、且又一橋殿・容堂・伊達予州も召命降り候趣、

大慶之至、別而心得ニも相成忝存候、先は右草々之貴答

如斯、書外期接晤之時候、恐々謹言、

十月十一日

松平春嶽

島津三郎様

親展

二白、御端文忝、尚又隨時御自愛專祈上、扱又火輪

船御用立候御挨拶、御入念之義ニ御さ候、不悉、

文書原寸 縦二〇・八種 包紙原寸 縦三一・一種

横一五三・五種

横四三・九種

三美 久光公ヨリ尹宮ヘノ建言

永世不朽ノ基本確立云々

(編纂朱書)  
「癸亥十月十五日尹宮江差出候書」

草稿

当今不容易 御時節、私式上京仕候様再三之

勅命奉承知、恐懼至極奉存候、上京之上猶又御当地  
之形勢四方之情態熟察仕候処、誠以重大之御場合と  
奉存候ニ付、聊愚存之趣奉言上候、

抑

皇国内外御危急之時節ニ当り、万民之困苦ヲ忍玉ハズ、  
忝モ未曾有之

御英断ヲ以、去年以来大政御変革官武一致之御事業被施  
行、殆御成就之時機ニ至り候処、何分當時之形行ニ而は  
叙意宇内ニ拡充、各国一致四民安堵之場ニ至り兼、既ニ  
八月十八日之一挙之如キ深ク被為惱

宸襟候御事共、小臣悲痛流涕之至ニ不奉堪、畢竟臣子之  
重罪不可遁義ニ御座候得共、乍恐

朝廷之御旧弊モ被為在候御事と奉存候間、伏願ハ以来奉  
始

至尊、左右輔弼之公卿方屹度天下之形勢人情事變御洞察、  
永世不拔之御基本相立候様遠大之御見識相居り、聊之義  
ニ 御動転不被為在候処專要之義と奉存候、朝令夕改御  
政令之輕ニ出候は、自古衰世之習ニ御座候間、此機會ニ  
乗シ

皇国挽回之道被為立候モ、右之御大志御屹立被為在候上  
ナラデハ、如何様之良法奇策 御採用相成候而モ、全ク  
其詮有之間敷、本立道生之明訓、能々御省察被為在度奉  
存候、

右は乍恐

朝廷御根軸相居り候大急務と奉存、未

御用之趣モ不奉承知候得共、大事之御時節黙止罷在候  
而は本志ニ無之、愚存之趣言上仕候、御処置之次第、

緩急ニ付而は愚昧之小臣一己之存慮を以難申上候間、列  
藩上京之上天下之公議 御採用、大策御決定被為在度

御事と奉存候、

誠惶誠恐頓首敬白、

亥十月十五日

島津三郎拜

上

文書原寸 縦一五・八糎 横八六・七糎

三三 横浜鎖港、將軍上洛召命等ノ件報告

横浜鎖港之儀去十二日外国奉行池田修理・川津三郎太(長巻)  
(箱形)

郎兩人横浜江差越可致応接旨申入候処、英仏不相応、

閣老参政ニ而候ハ、可相接由申募候間、右兩人夫形

引取候由、

一一 橋公御上京之儀ニ付而は水府類ニ相拒、衆議致沸騰

候は京中之勢ひニ御座候、

一重野(安纏)上京以後英夷共より為何儀も不申出、夫成御座候、

一一 橋公御召之

勅書今以不相届、甚不審之事共ニ御座候、乍併

大樹公御召之

勅書中ニ一橋御召之御文言も有之、夫ニ而昨日御決定

相成候、

十月十七日

文書原寸 縦一六・五糎 横六三・三糎

三三 松平春嶽公より島津久光公へ

春嶽公の着京

一島津三郎様(包紙ウラ書)

松平春嶽

用事

緘〇(黒印ト緘ノ文字ハ重複)

┌

一簡致啓上候、向寒之候御座候処、愈御清安被成御起居

拵賀之至御座候、陳は昨夕は大津駅旅館迄態々小松帯刀

御差出、委纏之御教示、殊ニ何寄之両種、且又過刻は見

事之佳看御惠贈、段々御懇念之儀共致多謝候、扱又先刻

家臣酒井十之丞貴邸へ差出候節、此旅館江明日御枉駕被

下候旨被仰聞候由、十之丞より承り忝致深謝候、然ル処

明朝は会津江逢対申遣候間、夕八ツ時頃より御来臨被下

候へは都合茂宜、大慶之至御座候、先は右之段得御意度、取込早々如此ニ御座候、尚書外之余緒は期明日之面参候、恐々謹言、

十月十八日

春嶽

三郎様

玉几下

尚々時下御自愛致專念可被下候、

文書原寸 縦一七・九種 包紙原寸 縦二五・二種

横 一一七種

横 三一・六種

言 松方助左衛門ヨリ京都大久保一蔵へ

茂久公犬追物練習ノ件

(包紙ウツ書)  
一 大久保一蔵殿

松方助左衛門

封

此節

(島津茂久)

太守様御犬追物被遊

御稽古候段、被

仰出、乍恐難有奉存候、右は前以御内々私江

御沙汰被遊候は、

三郎様江御伺之上、被遊

御稽古候儀御当然之御事ニ候得共、別段重立候訳ニ茂無之、先年御相談申上候節迄は御懸念之御事と被

思召、夫形御取止ニ被遊候得共、其節とは大きに時世も相替、最早当分ニ至り候而是

御打毬之御事茂

御案内之上ニ候得は、御懸念之儀は御同様之御事、此末

是非

御達者ニ被遊

御勉勵度

御沙汰奉承知、誠ニ以逐一御尤之御事と奉申上候、左候

而

御沙汰之通、一往御伺越之上ならば御当然ニ候得共、

御先代様方ニ茂段々被遊、殊ニ御家伝之御事ニ而、是非

被遊度被 思召立候へ、速ニ被遊

御稽古候而、乍恐決而御宜候半、京都江は一藏江私より御沙汰之趣委曲申越、

三郎様達

御聴候様可仕旨奉申上置候間、何卒御都合向宜様御取計被下度、右通被

仰出候処、急速ニ御弓道具等御出来ニ而、昨十七日より

御木馬

御稽古茂相初り、至極

御榮ミ御進み被遊、則

御書伝等茂十郎左衛門より差上候処、御三代様御時節は

至極御盛ニ為被為在筋ニ而、

義久公御初御筆之御起証文等茂段々有之、右被遊

御覽候処、猶以

御進之御事故、返すくも

三郎様思召御不都合不罷成様御取計被下度、御頼申上候、

右ニ付而は御相手人数も九ツ之免シ、六ツ之免シニ而、

折角御懸念之廉不被為 在様被仰付、

御式日は一五八ニ被召立筈御座候間、此段茂申上越候、以上、

十月十八日

松方助左衛門

大久保一藏殿

文書原寸 縦 一六種 包紙原寸 縦二〇・四種

横 二六・四種 横 二八・四種

〆 松方助左衛門ヨリ大久保一藏へ

茂久公ノ軍事精勵ニ就テ

(包紙ウツ書) 大久保一藏様(読メズ)松方助左衛門 要用

一筆啓上仕候、追日冷氣相催候得共、今般御道中海陸 何茂御都合能、

三郎様益御機嫌克、去ル三日八ッ後、二本松御屋敷之 様被遊 御安着候段奉承知、誠ニ以恐悦不斜御儀と、 返すくも難有奉存候、御道中筋何様之御都合欤と、

是迄始終奉想像候処、頓と安堵仕候、併 京地形勢段々と混雜之向ニ承及、未

御光着後御所勞之御申立ニ而、御出等不被為 在候

由、右は 御深慮被為 在候而之御事ニ而御座候段、

御内々奉承知候付、貴兄杯別而前後御配慮之程、実ニ

奉想像候、乍憚折角御自愛、御壯健御勤務御尽力被成

下候様、平ニ奉願上候、扱先々

御光着之御祝儀奉申上候、

一 太守様益御機嫌克被遊御座、恐悅御同意奉存候、去ル

十三日ニは、

御犬物御稽古被遊候段被

仰出候、誠ニ以難有奉存候、右ニ就而は別封を以依

御沙汰、委曲申上越通之御事ニ而御座候間、

三郎様思召之所宜様、乍恐奉伏願候、最早御聞及も被

為在候半、先達而

御城下諸士勢揃有之、

太守様 御出馬被為遊候処、

御前ニ茂御弓馬御達者ニ御稽古被遊度、頻ニ被

思召立、御犬追物被遊と之御事ニ而、実ニ不被為得止

事

思召ニ奉伺候付、別紙通私茂乍恐御返答奉申上候哉ニ

候間、宜御汲取可被下候、既ニ去ル十七日ニは、犬追

物場江被為入、被遊 御覽、畢而

御自身様ニ茂被遊

御場習等、同日七ツ後より

御木馬被遊 御稽古、翌日も御同断、別而 御楽ミ

御進み之御事ニ而、

御木馬之分ニ而も余程 御楽之御模様ニ御座候、犬追

物之問答は至極高き声ニ而致し候欵宜と、

御前ニ茂 御高声ニ被遊 御稽古、今日は八ツ後より

犬追物場江被為 入、最早一張之かけニ而、御矢放シ

等茂被遊候処、御相手人数も誠ニ以、則より 御達者

之御事と奉感心恐入候、始終

三郎様何様被

思召哉と是れ計被遊

御懸念候筋ニ奉伺候間、何卒不都合不罷成様、呉々奉願上候、尤

御直書之内ニモ 御認込ニ被遊との 御沙汰も奉承知候間、返すくも宜奉頼上候、私共ニも右御相手被仰付難有仕合候、下手之私も差はまり稽古仕事ニ而、御一笑可被下候、

一二九 御子様方ニ茂谷山等江御遠馬とも被遊、至極御機嫌能被為居、其外 御姫様方ニも御同断、御同慶奉存候、先は御着之御祝詞旁奉申上度、猶追々之形行可奉得貴意候、恐々敬白、

十月十九晚認

松方助左衛門

大久保一蔵様

貴下

追啓、乍恐帶刀様・主殿様江は、別段御祝詞等不奉申上候間、御都合を以宜様被仰上被下度、多罪なから此段御懇奉申上候、頓首、

二白、御当地何茂至極静謐ニ而浮説等全く無之、余

り静カ過候而御軍役方起りニ而勢揃、内々申出ニ相成、則去ル四日晝早鐘為御打ニ相成候処、速ニ相揃

此節は最早兩度目之事ニ候得は、何も無前後相運ひ誠ニ賑々敷事ニ御座候、四日朝五ツ前より

御出馬ニ而、直ニ吉野江

御出張被遊、調練御座候、何事も無事相濟、先至極も能き都合ニ御座候、其後桜島横山御台場江為

御見分被為 入、御軍役奉行・御軍賦役等も御供被

仰付候、谷山江も御遠馬有之、右同様御軍役奉行・

御軍賦役被召列、勢揃被仰付候処、先兎哉角ニ而折

角懸、心頭、御軍政之基律相立候様、

御沙汰ニ御座候、其後不時ニ弁天波止・新波戸御台

場漂的打被仰付、

御前ニも四ツ時より被為 入、此節は一発ツ、至極

尽吟味打発シ候様 御沙汰ニ而、尤於御前別紙通矢

先付等被遊候処、皆々一同別段之一張ニ而、余り遠

く違ひ候矢先無之、実ニ戦争後一統実地之稽古尤ニ

御座候故、打方七ツ過ニ相濟、

御船ニ而漂の御見分、夫より磯江 御上陸、集成館

江被為 入、六拾封度鑄込ニ相成候きひ通し等被遊

御覽、暮時分被遊

御帰殿候、最早六拾封度も五挺鑄込ニ相成、別而宜、

然ニ老挺は当月末方ニは打試被仰付筈御座候、集成

館見聞役・銃菜方其外ニも、孰れも勉勵ニ相見得申

候、神崎・燃崎等江茂、先日求馬殿同船ニ而差越、致

見分候処、燃崎之方は最早当月中ニは惣成就可罷成

相見得申候、其節は島焼酎五拾盃入を二本、夜中ニ水

中ニ入相働キ候夫方之人數江御内々頂戴被仰付候、

誠ニ以、冬向ニ罷成候処、夜中之水中は中々部行杯

茂見兼候段達 御聴、右通被成下候事ニ候、右通御

丁寧被成下候処、一同別而相働キ候由相聞得、仕合

候事ニ候、

一明日は五社江

御參詣之筈御座候、左候而來月五日ニは自然

太守様御厄年之御鎭流馬、御旧例通被仰付候付、同

日

三郎様此節之御祈願ニ御鎭流馬被仰付事候、左様御

聞取可被下候、此等は自然御都合も可有之奉存候、

一幸五郎一条宜様御頼申上候、

一演武館も追々出席人數相嵩ミ、幸ニ御座候、民部殿

主計殿杯江出張申事ニ候、先日は

御前犬追物場江被為 入掛ニ、諸流稽古所江も被為

入、被遊

御覽候処、式ヶ所不明所有之、直ニ御達ニ相成申候、

追々犬追物場江被為 入候付而は、演武館余程盛ニ

可罷成候半と存候、

一撰津殿 御発駕後、直ニ出来物盛ニ而、湯治江被差

越、被罷帰候処、亦出来、今日より又湯治ニ内々被

差越候事ニ御座候、夫故運ひ兼候儀御座候、求馬殿

別而之尽力、夫故旁々仕合千万御座候、乱筆は誠ニ

御ゆるし可被下候、

文書原寸 縦一六・一横 包紙原寸 縦二八・一横

横 二四〇横 横四一・一横

三 久光公ヨリ(山内容堂公?)へノ書翰草案

久光公ヨリ(伊達伊予守?)へノ書翰草案

上京ヲ促ス

七四一ノ一

一 翰進呈仕候、向寒之候愈御清安可被成御座、奉恐喜候、

然ハ先般御約束申上置候通、

皇国安危存亡之堺御座候ニ付、一時ニ上 京致、御互ニ

尽力之含ニ而、折角と御上 京奉待候処、

朝廷より御猶予被仰出候由承知致、大ニ力を失候処、此

度又々御上 京被成候様被仰出、恐悦至極、至小子拵躍

候次第奉存候、此上ハ一日も早く 御発途被成候ニ及万

一 御遅緩相成候而ハ、朝廷御不都合ハ申迄も無之、長州

御同意、

朝敵之御悪名御遁有之間敷と、別而懸念奉存候間、何卒

急速御上 京御座候様奉存候、先ハ右要用迄如此御座候、

書余ハ奉期拜顔時候、

十月廿一日

再伸、時季御自愛專一奉存候、

(黒田慶賢)

筑世子ニも京着 (松平越)

老ニも同断、追々上京御座候間、御延引無之様、偏

ニ奉渴望候、以上、

七四一ノ二

一 翰進呈仕候、寒冷増加之御貴体愈御賢剛被成御座、奉恐

賀候、然ハ家臣高崎猪太郎貴国江差出候処、種々御懇篤

被仰聞候由、去十六日帰京逐一承知、御厚情別而忝奉拜

謝候、殊ニ御儀論等巨細致承知、鄙野之小生奉感服之外

無御座候、乍併聊御起居不穩之段承知致、如何之御事容

体致と

皇国之御為、別而懸念奉存候、少シニ而も御快方御座候

ハ、一日も早く御上 京被成度、頻ニ奉渴望、春嶽兄

ニも去十八日御京着、賢兄御上京御催促之御模様致承知

候、当時勢、若御遅緩相成候而は、

官武御一和、各国一致之御基本不相立而已ナラス、終ニ紛乱之世態ニ陥り可申と致大心痛候、先は御安否伺、且御上京奉促度、以乱毫奉訴候、書外之心緒奉期拝顔之時候、

文書原寸 縦一五・八種 横一九種（表裏一枚書）

三 大原前左衛門督ヨリ島津三郎公へ

久光公ノ上洛ヲ祝ス

〔包紙ウツ書〕  
「島津三郎殿 大原入道前左衛門督不薄 梧下

〔封紙ウツ書〕  
「島津三郎殿 大原入道前左衛門督不薄 梧下

今朝ハ嚴霜寒威強候、逾御堅固珍重此事ニ候、陳ハ此度

御登京、御道中御無事、殊被

召候御次第も御座候由、はや／＼と御上着可為御安堵、珍喜之方々候、其砌聊表寸志候処、御挨拶并為御土産品々被贈下、痛入芳意之程千万々々、辱厚御礼申入候、殊ニ太平布ハ珍敷、名も面白候、天下渴望いたし候儀、全太平ハ貴国之周旋より天下ニ布キ候儀とはんじ候て、深相案申候、将去年ハ種々之儀、段々御世話ニ相成候事共御礼難申尽、決而忘却ハ不致候へとも、何欵障ル事ともニ而意外之御無音無申条候、御量察可被下候、此品ハ去年御帰国之砌進上いたし候御襖之上ニ被押候統キ色紙ニ候、出来早々為持可進之処、前文之障り勝ニて差扣居候内、小子も蒙

勅免、再青天白日ヲ奉拝候身となり、表立御通信も相成難有幸、御登京之上と存シ心組候へとも、御上着早々様之品御覽被成候どころニても有之間敷と思案罷在候処漸時日も経候故為持進上候、差当り御旅宿之御慰ニも相成候ハ、重畳本懐ニ候、何欵申度事も候得共、先要用

而已如之候、不典、

十月廿一日

二白

御国元とハ寒氣も強候、一入御自愛專要と存候、当

世之事、只々御案し申候計ニ候、猶期後便候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一一四号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・七糎 包紙原寸 縦二七・六糎

横八七・二糎 横 四〇糎

旨 伊達伊予守ヨリ島津三郎殿へ

伊予上京ノ件

(包紙ウツ書)

「島三郎様

密玉案下

伊伊予守

緘

「

芸州白尾の道馳短簡候、寒光日加之候、愈御清穆被成御

在京最中

公武御為終日神策御忠謀御焦慮可被為在、奉恭賀感頼仕

候、有志諸兄も追々參集、御商議と奉遙察候、先日呈翰

貴報、過十五日飛来、奉監誦、御指表之趣敬承、縷々御

教示ニ而詳悉忝奉感謝候、即十七日発程、今夕当所ニ着

岸波止浜より渡海仕候、此末無滞候ハ、来月三日入京可仕、

万々可蒙御教示、乍不及以死力微忠相尺度奉存居候、右

ニ付何卒京着前粗近況相同度候間、誰そ老人二日ニ伏水

へ御差向被下度、此段希度、恐惶頓首、

(十月二十二日)  
小春念二夕

二伸、時下御自愛奉專念候、僕瓦全旅行仕候、乍憚

御省念可被成下候、不備、

文書原寸 縦 一八糎 包紙原寸 縦二八・七糎

横四七・一糎

横三九・三糎

旨 黒田山城ヨリ島津久光公へ

中村円太ノ件

(封筒)  
「上 黒田山城」

(端裏書)  
「上 御直披奉頼候」

過刻は罷出御逢蒙

御懇命、拜領物且御湯漬等頂戴被 仰付、段々難有仕合

奉存候、扱其節御内分被

仰付候中村円太と申者之儀、尚勘考仕見候へハ、御心添之趣至極御明計之様ニ奉感佩候、迎而率ひ付置、相働かせ候方出来仕候へハ、上策之様ニ御座候間、弥之儀は難申上候得とも、重畳工夫仕見可申候、此段極秘鳥渡奉申上候、以上、

十月廿二日

文書原寸 縦一六・六糎 封筒原寸 縦二〇・七糎

横三九・一糎

横 五・五糎

旨 佐土原藩士樺山能勢兩人ヨリ幕府へノ

届書

英国公使へ償金渡方ノ件并洋銀引替金高書付

英国公使償金受取書原文及訳文 合四通

(包紙ウツ書) 一扶助金渡方ニ付、樺山舎人・能勢二郎左衛門より

閣老方江差出候書付写

一通

一洋銀引替金高書付

一通

七四五ノ一

本家松平修理大夫方、英人引合之儀ニ付、先達而修理大夫家来共当座取計を以、扶助金相渡可申旨、英人江決答申込置候得共、此節柄之無抛差合之事件有之、表向相渡兼候時機合御座候間、此際私共一先本家家来共ニ相代り扶助金仮ニ相預置申度御座候付、左候得共決答申込候驗茂相立、証券可相成と奉存候間、右之趣英人江御澤被下候様仕度御座候、尤差合之事件相片付次第、本藩より表向渡切証文引替等之義、錠と取極可申候、何卒願之通被仰付被下候様奉存候、以上、

(忠寛) 島津淡路守家来

十月廿六日

樺山舎人

能勢二郎左衛門

文書原寸 縦一六・九糎 包紙原寸 縦二九・九糎

横六一・一糎

横二七・二糎



眞 長門宰相ヨリ八月十八日七卿西下ノ事情

及攘夷決行ニ付朝廷ヘノ上申 二通一綴

(端裏朱書)  
「癸亥八年長州書」

八月十八日之儀、毛利讃岐守・吉川監物(元純)已下家来共取調

申候処、当日俄ニ九門内干戈を以御警衛等有之候御事ニ

付、兼而堺町御門御固被

仰付置候間、偏ニ

九重内不尋常御一大事と奉存、不取敢人数等差出、且遂

々詰居之者共馳集申候処、不凶堺町御門御固被差除候段

如何之儀ニ御座候哉は不奉存候得共、

朝廷之御為一途ニ抛身命御警衛申上候心底ニ御座候処、

右之御達有之、乍恐一同安心仕兼、是非奉歎願候而

朝廷之御様子奉窺度奉存候処、度々御催促有之、無余儀

一旦大仏迄引取申候、然処、前条之次第ニ付憂憤之余、

自然騷擾ニ涉候義有之候而不相濟と奉存、直様引取申

候、且又七卿方御事も、其節之次第不穩事と而已奉存、

其上攘夷御先鋒をも被為願候御様子ニ付、御供申上候、

実ニ当日之勢難陳尽不得止次第ニ御座候段申出候、此段

厚御憐察被成下候様奉願候、以上、

十月廿七日

長門宰相

一私儀攘夷之義ニ付

叡念を遵奉、幕意を承順仕候次第は、委曲別書之通ニ

御座候、然処、此度

御沙汰之趣領内江布告ニ及候ハ、是迄之

叡念、幕意如何被為在候哉と、淺陋之下情ニ不奉得察

御深旨、疑惑を生し可申、領内而已ならず列藩も同様

可有之候ニ付、天下人心方向不相定より竟禍変出来も

難測、上已上元其外種々紛乱、其鑑不遠候、

將軍家之御請ハ拒絶と有之候ニ付、談判後之御事と考

居候段ハ、先達而幕府ヘ申立置、其後如何御差凶も無

之ニ付、御聞濟と心得居申候、此上は乍恐

朝廷間近ク

叡感之御旨を以、

勅書を被賜、監察使をも御差下ニ相成候事ニ付、不相

變掃攘尽微力候心得ニ罷在候間、此段御執奏被成下候様、伏而奉懇願、已上、

十一月十九日

長門宰相

冊子原寸 縦二九・五糎 横二〇・七糎 五枚

近衛忠房卿より島津三郎公へ

容堂旅館の件

(包紙ウツ書)

島津三郎殿 内用

忠房

几下

(封紙ウツ書)

島津三郎殿 内々

忠房

几下

緘

(墨引)

尚以寒光御自愛之様存候事、

今日は快靄寒冷ニ候、弥御勇猛御滞在珍重ニ存候、扱容<sup>(山)</sup>堂旅館之義、輪門里坊内々借用之事、昨烏從尹宮先方留主居石井と申者へ被及掛合候処、異儀無承知之趣答候由

ニ候、定テ從尹宮其許ニハ御承知ニ相成候事と存候、自当方ハ一兩日前輪門へ、前殿下御書中ニ而巨細ニ被仰遣候事ニ而候、是而決而故障有間敷ト安心之事ニ候、今日当方へも石井呼寄可申聞心得ニ候、最早是ニ而決而故障無之安心候、右之趣猪太郎呼寄可申聞処、取紛居荒々以書中申入候、尚土州へ茂宜御通達希存候、扱又内々申入度儀在之、帯刀<sup>(小巻)</sup>入来候様御頼申入候、併今一応可申入候間、今一応申入候上入来候様、御申聞置御頼申入候、何レ明日ニ相成候半と存候、一寸序ニ任セ申入置候、荒々要用計如此候也、

十月廿八日当賀

三伸、

日々要用ニ而大取紛之仕合、甚御不沙たニ相成候事、

(本文書ハ、鹿児島史料 忠義公史料「第三卷第一二三号」文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・七糎 包紙原寸 縦二七・五糎

横二一〇・五糎

横三九・四糎

○真 近衛忠熙忠房両卿へノ宸翰

三条実美ノ風説ニ付

○真 近衛忠熙忠房両卿ヨリ久光公へノ書翰

三条実美ノ風説ニ付

善 真木和泉守ヨリ郷里へノ通信

四通

長州拳兵計画其他

七五〇ノ一

文して申上まいらせ候、寒さ罷成候へ共、皆々御さわりなく、目出度そんしまいらせ候、わしも外記共ニ三条様はしめ、さいしやう様御かちう心よくせわにて、かへり(家中カ)て国元よりもたのもしくそんしまいらせ候、とふそ今し(かえつて)はらくかんにんして、只々家内むつましく、どこからもかんしんいたし候様ニ御頼申候、つわか様よりも時々たより御座候て、ありかたき御事はかりにて御座候、菊もまたかへり不申、(肥後カ)ひご人とつれたち、角平つれて参候間、

なんぎいたし申間敷候、ひごとよろき山田一寸国さかいまでかへり候間、此手かミことつけ申候、先ハあらゝめてたくかしく、

十月廿九日

和泉守

母上様

おむつとの

小梅との

あね様かたによろしく、其外たれにもよろしくこと

つけ頼申候、

七五〇ノ二

愈御生事大慶存候、愚老・関外記・初五郎・中蔵共ニ無事ニ候、此節三田尻浅露ニ付、佐波山関人内湯田か(本ノマ)と申所ニ条公ハ御達ニ相成、愚老ハ仁木御付添、諸公ハ水見ニ御移り、三田尻ハ諸浪士者之兵隊計罷在申候、(本ノマ)三池より大勢参る含之由、只今四人参り居申候、(此四字よく不分)一中川見怪道衆早を上々流布之由、不遠好機会可有之、

老丈出馬も冬中ニは必可有之と察申候、因州・防州・

備前・芸州・佐州・勢州素木連署ニ而、七卿宰相卿之

ホンノマ、  
老丈敬

無罪を被詔候処、直ニ御暇ニ相成候由、ケ様之事ニ而却而正儀を激可申候、中川王八幡之僧双樹院月雲ニ被頼、速ニ帝位ニ登り度祈候事相知候間、右僧ハ因州勝部静男殺し候、静男ハ愚老知人也、

此事ハ秘事也、

ケ様之事ニ而長州之外ニ正人も多有之候、御安心可被成候、

一愚老三策を画候而、長侯ニ差出申候、其内差贈可申候

一家内和睦之事のミ相祈申候、

一少々様ハ因循御上京無之様、類ニ奉祈候、老丈

御出馬前ニは津和野ニ相頼一書献上可仕候、凡ニ申合

置候、申入度事如山ニ候得共、荒々不具、

愈御多年奉賀候、愚老無異消光、御安意可被下候、三

条公奉始、皆様御安泰ニ被為入候、此節は九州一枚正

議之士募候間、御出被下候様奉待候、徳太郎・忠次郎

之曹も志有之候ハ、参度存候、併道具無之候而は、

困り申候、

一此度轟木武兵衛・山田十郎密々国境迄帰り申候、高瀬辺迄御案内御頼申度由ニ付、御三人之内御繰合等相談之通、猶御苦勞御セ話可被下候、

一東北院・大島・田中・下門・石田・湧上等、宜敷御伝声可被下候、右草々、

十月廿九日

和泉守

照三郎様

舍人様

辰三郎様

二白、私事、三条公ハ勿論、長州様より只々御懇命誠ニ難有仕合ニ御座候、

七五〇ノ三

文して申上まいらせ候、先つく皆様御さわりなく、めて度そんしまいらせ候、私ニも皆々無事ニてくらしむ申

候、御安心可被下候、ことちさまもおゆきさまも、子ともなさそく御世話可被成下候、今しばらくよろしく御頼申候、夢吉は亡命ニ而もよろしく参り候様そんしまいらせ候、今ハくらしよく相成候まゝ、小つかひもしゆうになり申候、よきたよりに候まゝ、一寸御尋申候、めでたくかしく、

十月廿九日

(真木直人)

外記もこしと一同無事なり、

ことちさま

和泉守

おゆきさま

無事

文書原寸 縦一六・七糎 横二一八・六糎

三 藤井良蔵ヨリ小松帯刀へ

貞姫上洛ノ件其他

(包紙ウツ書)  
一帯刀様

御内用

藤井良蔵

一筆啓上仕候、

三郎様益御機嫌能被遊御座、恐悦至極奉存候、於御国許乍恐

太守様奉始御機嫌能被遊御揃、恐悦御同慶申上候、

御手元様愈御安康被成御連勤、万端御尽力之程奉恐察御都合よろしき処奉祈御事ニ御座候、扱私事去月廿一

日早天兵庫出船、廿二日夜半佐賀関着船上陸、熊本へ廿

四日夜着仕、即夫々へ引合仕候而翌廿五日出立、廿七

日昼八ツ時安着仕、則より中山始へ面話仕申候而、今

晦日いよく来月八日<sup>後</sup> 御発駕、四日<sup>前</sup> 御首途ニ御決

定御通達相成、安堵仕申候、扱

御内婚一条先中山へ熟談仕候処、聊存寄も御座候得共、

既ニ今日迄及談話、屹と内評も行届申候間、明後二日

徳寿院之方始小の島江篤と及談合御請相成候様、十分

尽力仕候筈ニ御座候、是非とも運付申候而御左右申上

様可仕候、然ニ喜入家小瘡之難にて、桜島温泉留主中

ニ御座候而、未面謁不仕候得共、是又兩日中ニは面談

仕管ニ御座候、

一尹宮御所望事件丈未取掛り不申、中山丈談合仕置、是非喜入家へも篤と御談申上候上周旋仕候存念ニ御座候、左様思召可被為下候、

一蒸気船之義、佐賀之関迄之御賦ニ御座候処、兵庫より申上候通申合、廿五日前之浜迄乗廻シニ相成、即より御荷物積入之御都合ニ相成申候、尤再度佐賀之関へ相廻シ御一緒ニ相成候筈ニ御座候、長崎より相廻ル筈之老艘何欵ゴテツキ申候よしニ而残念奉存候、しかし彼是と御尽力も有之候旨、求馬殿噂ニ御座候、児御小姓之義今日迄ハ人柄相知不申候得共、是以

太守様思召茂被為在、聊ニ而も取馴候者ヲ可被遣との御事も同人噂ニ御座候間、屹と私同道仕候而可有御座候、一昨廿九日 御姫様方々御輿様御畦へ被為成、終日被成御座、加治木 御近親中様も御打揃ニ御座候、明朔日六ツ時より桜島へ御渡海被為在候筈ニ御座候、一金比羅御参詣文ハ被為在候筈ニ御内決相成居申候、其

外相替ル事件も無御座候、

一守衛之義出水より老組被召列可然旨承知仕居申候へとも、既ニ諸郷より五人十人宛之御手当相成居、今更変動仕申候而ハ人氣大ニそこね候と申議論御座候而、尤之事故決定相成、出水ハ止ニ相決し申候、中小姓ハ定御供込ミ都合拾人被召列候筈ニ御座候由、

一昨日より今朝迄磯ニ而新御調之五十ポントツ老丁御打試ミ御座候、余程遠丁余り候由、終而七ツ時御供揃ニ而 御掃殿之筈ニ御座候、尤先日より御独ニ付而御滞在ニ御座候事、此内ハ御勢揃被為在、吉野へ御乗出しも被為在、存外人數も早揃ニ而万事御盛ニ御執行有之候由ニ而美談仕難有奉存候、尚申上候義も可有御座候得共、先今日ハ前件迄早々申上候、恐惶謹言、

十月晦日

藤井良蔵

帯刀様

御取次衆

文書原寸

縦一八・八種 包紙原寸 縦二八・三種

横三三・四種

横四二・六種

七三 紀伊中納言京都ヨリ賜暇帰国願

〔包紙ウツ書〕  
上

謹而申上候、浪華守衛ニ付暫御暇被下置、当月七日浪花江罷下候而、夫々海岸等も巡見仕候儀ニ御座候、然ル処無余儀、自国事情も有之候付、猶暫之間自国江之御暇被下置候様奉願候、今般大樹上洛之儀被

仰出、於私も難有奉存候、撰海防禦向之儀は不容易儀ニ付、大樹江厚申談度奉存候間、大樹上洛迄ニは私儀も上京仕候儀ニ御座候、依之奉願候、誠恐誠惶頓首謹言、

十月

〔徳川茂承〕  
紀伊中納言

文書原寸 縦一八糎 包紙原寸 縦 二八糎  
横九八糎 横四〇・八糎

七三 生野銀山拳兵一件書留

別冊之通り諸方探索書写取差上候、其外いつ方ニおひて聞合、同様之事ニ御座候、仍而此段御届申上候、以上、

十月廿六日

今熊野村  
伴左衛門

上

一諸侯より御出張之人数、御所より御達之上出張ニ相成候分ハ、いまた引取無之、騒動注進有之、御達し無之内ニ直様出張相成候分、静マリ次第勝手ニ引取相成候由ニ御座候、

聞書之写

当月十日銀山之内森垣村江、長藩月本將監内ト有之候先触罷越、同夜は播州屋形村宿屋渡世、

三木屋吉兵衛

右方ニ帯刀人三拾人計止宿、両掛五荷、鑓六すし宿継人足ニて罷越、翌十一日昼未ノ刻森垣村江罷越、同所真言宗遠王寺江着、夫より銀山御役所へ申出候は、此度森垣村ニ暫逗留致度候ニ付、借用申度旨願出候間、宿場逗留

借用之儀は承知之由返答致候処、同日夕方より追々浪士

共銀山市中江入込徘徊罷在、同夜四ツ時分御役所へ拔身

等にて込ミ入、浪士より申出候は、姉小路五郎丸事沢主水(宜嘉)

正殿御入ニ付、此陣屋暫借用いたし度、其内ニ京都へ御

詫申度、決而乱妨ニ不及候由申ニ付、銀山地役人衆も不

得止事御貸渡ニ相成候処、浪士共入込ミ、陣屋有合之鍵・

長柄等手頃ニ打切手鍵ニ致し、同有合之具足等着用いた

し、血氣之若もの共、十二日ニは朝来郡在々江罷出、農

民を駆集メ、凡一万計、其外右沢主水正殿より種々御頼

之儀有之候得共、難尺筆紙、浪士之法令張紙之写、

御重士隊惣督 官事路役 平野二郎(國臣)

(河上弥市、正義)  
南 八郎

(戸原卯橋ヲ、維明)  
戸田右橋

(辨之)  
横田友二郎

(木曾源太郎、義順)  
入江新吾

(高橋祐次郎、親輔)  
美玉三平

(立德)  
多田弥太郎

農兵隊惣督

皇軍儀礼

物頭之儀ハ警衛之番所可有之、略ス、

使番兼奏者

(重徳)  
高橋甲郎太

軍艦

(孫原盛)  
深尾源二  
(小河吉三郎)  
大川藤蔵  
(川又左一郎)  
川股左一郎

録事兼物頭

藤 四郎(茂徳)  
二名三郎

水本太郎

猶追々外々江も御往選可有之事、

右之通り張紙いたし候よし、猶亦銀山より二里計下之方、

山口村妙見山ニ浪士拾七人罷越、出石御加勢防戦之用意

専ら之処、銀山ニ差扣候惣大将沢主水正行衛不知ニ付、

浪士ノ方裏崩ニ相成、暫時之間ニ百姓共反心、山口村妙

見山ニ罷在候浪士江多人数を以鉄炮打掛ケ、追々攻付ニ

付、左之銘々討死、

戸田右橋

長野衛助

南 八郎

下瀬桃彦

小田村神一

伊藤三郎

川股左一郎  
四十九才

白石廉作

肥田左衛門

井関英太郎

久留 豊

和田小伝次

南八郎家来  
西村清太郎

以上

右四人之内大川藤蔵朝来郡野座村にて、百姓手ニ被取巻  
生害致し、残三人生捕、  
右之もの共出石様手へ為引渡、十七日ニ引取ニ相成申候、  
右山口村にて浪士討死之節百姓手にて、

右山口村妙見山之下字山伏岩ト申処にて、十月十四日七

ツ時分、百姓ト一戦ニ及び、終ニ南八郎ト申もの、残り

十一人及介借候上、自分ハ自殺致候、

此もの氷上郡

残り亀山浪人

黒井横丁片山新五左衛門

木村愛之助

俣にて名ハ官蔵ト申立

(付箋)「七ヶ年前ニ家出致  
候ものニ御座候、」

長藩

浪士

大村達之介

廿才

水府

右兩人ハ銀山にて罷在、十四日ニ播州へ落行先キ神西郡  
橋笹村にて、百姓共鉄炮にて討取候よし、

自殺

大川藤蔵

廿七才

但州養父郡藪村

明暗寺門下

羽瀨村之庄屋六左衛門俣  
元次郎  
三十四五

右元次郎三ヶ所手疵ヲ負、同夜死去致候、其節浪士死体

ニ金子凡六十両計所持被有よし、

阿州

(曾我部七郎、盛澄)  
長曾我部太七郎

(右京、基好)  
中条左京

清閑

江州膳所家老二男之由

当時本田小三郎ト変名

右落行先播州姫路様手ニて生捕

平野二郎

今 老人

右但州細場村ニて豊岡様御人数十五日六ツ頃生捕、老人

ハ横田友二郎ト申候よし、

美玉三平

但州高田村庄屋

太郎兵衛

同弟

此もの鑓術達者

黒田与一郎

右三人ハ播州(実栗)しそ郡木谷村ニて、百姓之手ニて討死、

三ヶ月森伊豆守様御領分之よし、  
(後滋)

長藩 録七千石

川上弥市事

南 八郎

家来 西村清太郎

川村辰之介

同下取 徳助

此者山口村ニて召捕ニ相成候、

但州竹田名奈瀬屋

新右衛門倅

五一郎  
三十五六

当時银山入牢

同 朝来郡

矢奈瀬村

定七

医師 福田

同 高田むら庄屋

太郎兵衛

同 瀧のやかやの木

三郎右衛門  
悴 新太郎

惣同勢五百人

出石様御出張人数

御番番手

荒木助左衛門様

二番三番手以上

惣都合六百人計之よし

銀山寺にて御逗留

右四人ものへ兼而浪士ニ心を合居発頭のよし、竹田村庄  
や太田新右衛門使にて、同所播摩や六左衛門・万や幸助  
(仙石久利)  
兩人出石様へ取付、御加勢御見合之儀申上候処、直様召  
(付憑)「勅命之浪士方ニ御座候間、御加勢御見合之儀  
申述候由ニ御座候、」  
捕ニ相成候よし、

神田住居

△印自殺

元福知山

大裏千之助

覚

○印逃去

市川弥左衛門悴

三十五六

無印生捕

右之もの誘引出候得共、病氣故十七日ニ竹田村へ帰り候  
よし、

豊岡様御人数

沢主水正○

戸田右橋△

南 八郎△

長野衛助△

御家老

木下弥八郎様

下瀬桃彦△

小田村神一△

御鉄炮方

国友寅五郎様

伊東三郎△

白石廉蔵△  
(作力)

跡押郡奉行

竹下半蔵様

肥田左衛門△

井関英太郎△

御作事奉行

津山多仲様

久留 豊△

和田小伝次△

川俣佐一郎

岩根鉄太郎○

大川藤蔵

木村愛之介

横田友二郎

長曾我部太郎

中条左京

中原太郎○

本田小三郎

黒田与一郎

南家来

西村清太郎

川村辰之介

藤 四郎○

二名太郎○

水本太郎○

深尾源二○

多田弥太郎○

入江新吾○

以上

銀山御奉行当八月出役

御奉行

川上猪太郎様

御家内隠レ家

銀山猪のゝ

丹後屋

川上様ハ備中倉敷江御代検ニ九月廿八日より出張、未  
タ引取無之、

一 揆之者乱妨之家々

柴村五郎兵衛

栗賀安左衛門

田中六左衛門

大月六左衛門

矢奈瀬定七

医師 福田

しんとふや

三郎左衛門

いつみや名五郎

同 別家

其外

沢 主水正殿

十月十三日夜御役所ニテ員数不分候得共、列々借用之  
(付箋)金千兩之程之よし御座候、

上行衛不相分被落行、

一 浪士之内行衛不相分もの左ニ

岩根鉄太郎

中原太郎

藤 四郎

二名三郎

水本太郎

深尾源二

多田弥太郎

入江新吾

メ 右之通り

銀山御役所御運上蔵にて金子取出し、浪士之向銘々少々  
ッ、配当所持之よし、

以走人申上候、今日夜通しニ和田山江可參心得ニ御座候  
得共、佐作にて暮候ニ付、境屋ト申宿江立寄相尋候処、

折能此宿主人此間中但馬江參候、今日帰宅候よしにて、  
委細聞取候処、当日夜より矢奈瀬辺江浪人参り、夫よ

り村役人ニ掛り下々ノもの一統差出し候哉、左様無之候  
ハ、打切候様申掛ケ候付、無抛申触、自分ニも呼、歩

行大勢引連、十一日朝銀山江押寄候処、折節御代官様ニ

は御検見御留主中故、直様御陣屋江入込、夫より百姓江

手訊申付、出石様御出張押出申、手当ニ山口ト申村江出

張り、山江上り手配り致居候処ニ、右御陣屋ニ居候浪人

為頭もの、金子を集取、逃去候風聞致候、亦は(酒井忠康) 姫路様

御出張にて、出石様ト挾打ニ相成候而は、(仙石久利) 逆茂叶不申様

子にて、右山口ニ陣取致し候浪人銘々自害致し候ものも

多分有之、右様(備)昆雜致し候ニ付、付随し百姓共鉄炮打掛

挿致掛、大騒動ニ相成、死残申候浪人共分散致し申候由、

右ニ付百姓共銘々銀山より引取、右村々を呼寄キ候仁を

恨ミ、矢奈瀬・いつミヤ両家、新道屋・針金屋・医師福田

六軒計、栗鹿安左衛門其外在家にて忒三軒、栗鹿安左衛

門殿一昨夜潰、夫より分散致し候様子、亦は昨十五日夜、

竹田岡田屋本家潰候得共、一向人寄不申候処、豊岡和田

山江御出張ニ付、直様御出張にて、両三人御捕ニ相成、

其俣ちり／＼ニ相成候よし、右様浪人も盜同様之様子ニ  
て、ちり／＼ニ相成、先ツ今日ニては穩之次第、今晚ハ  
佐伯泊りニ仕候、則此仁但馬江參り居候仁故、委敷は直  
ニ御聞取可被成候、尚但馬ニて委敷聞取、追々可申上候、  
早々、以上、

十月十六日夜認メ  
中沢七三郎(付書)「龜山藩」

大庄屋  
御両君様

尚々賃錢之義ハ、自然御渡し可被成下候ハ、有(た脱)かく  
和田山無(欠字)□之次第、拙宅江御通達之程奉希上候、  
尚今浪人ト申候は四拾人計之由ニ御座候、

但馬騒動

十月十一日、浪人四拾人計銀山江入込候処、其節銀山御  
代官作州江御出張ニて御留守中ニ付、御留主居之役人衆  
中江引合候処、何分浪士多勢之事故、無抛一味之体ニ相  
成、尤宝物、御金藏、御領分納帳面ニ至迄、浪士江相任

せ申候由、夫より近辺村々役人呼寄、都合能申ふくめ、  
竹田村役人を以、十四日昼四ツ時ニ、拔身ニて早駕籠ニ  
打乗り、矢奈瀬村江駆付、百姓皆々即刻、銀山表へ可罷  
出様言触候ニ付、百姓一統竹鑓・鳶口・熊手抔持參ニて、  
追々銀山表へ押寄セ候処江、出石様同勢六百人計ニて銀  
山江御出張之よし、猶又姫路様ニも五百人計之同勢ニて、  
播州屋形ト申処江銀山御代官様ニも御同道ニて御出張之  
よしニ付、浪士之もの共是ニ恐レ散乱し、数多退去之よ  
し、残浪士拾四人、山口トカ申所ニおひて切腹亦是自害  
ニ相成り候よし、此内二人之首は相知レ不申候よし、浪  
士三人出石様生捕ニ被成候処、内老人即死之よし、于後  
百姓共一統銀山表より引取候事知、言触候人家を乱妨ニ  
およひ候よし、家潰サレ候名前左之通り、

芝村五郎兵衛 栗鹿村安左衛門  
田中茂右衛門 早田喜兵衛  
矢名瀬村 助次郎 三郎右衛門  
泉屋両家

弥七郎

医師

玄丁

大月村

六左衛門

帯刀にて浪士同様にて罷出候よし、

溝黒村にて

式軒

三左衛門

喜多柿

甚兵衛

十五日京極様式百人計にて和田山江御着被遊候処、竹

田村より早々御出張被下候様願出候得とも、百姓共之

事ニおひてハ此方構と無之ト申置候而早々為引、其後

より直様取手を遣し、五六人御召捕被成候よし、

一柏原様三十人計にて遠坂江十六日御出張被遊候、  
(總田舊民)

一福知山郡奉行中野様引馬にて出張、千卒峠二十三人纏

州助屋具野ニ、都合三ヶ所、

一村岡様今十七日御出張之よし、

一福知山より久美浜表へ三十人計御出張被成候よし、

一宮津様・出石様御出張之よし、

十月十七日朝より八ツ時迄ニ右之通り聞取申上候、

右は十七日銀山江さし遣し候探索方書取、

但州銀山騒動手続キ書

十月十日銀山之内、森垣村之山中ニ有之寺院真言宗遠(鑑)

王寺江、浪士兩人計罷越し、明十一日芸州浪人四十人

計罷越候間、寺内借用致度旨申立、翌十一日浪士四五

十人計播州屋形村泊にて罷越候、直様支度、甲冑を帯

し銀山御役所江詰掛候処、折節御代官川上猪太郎様銀

山御領備中倉敷ト申処江御検見ニ御出張、御留主中ニ

而御元メ手付四人之御役人江及応対詰メ候処、右四人

之ものハ江戸役人衆追出し、御役所請取御米蔵・御金

蔵共押領致し、十二日ニは銀山御領村々江具足着用之

浪士数多罷越、百姓人数呼寄候ニ付、百姓共早鐘・太

鼓(鼓)にて人数を揃へ、皆々野道具・棒纏・鳶口等所持、

追々銀山へ向ケ詰掛ケ、人数凡三四万も有之風説ニ候

得共、大体老万余り之由ニも相聞へ候、十二日夕方ニ  
は村々之門ニは役人・庄や向老人ツ、本ノマ堀村、右浪士よ  
り兵糧被申付、三石、五石白米持運ヒ手当致候よし、  
浪士共凡見込百五拾人計、乍併何程ト申所難相分、先  
方所々より驅集り候ニ付、二三百人も有之候哉、亦是  
百人計之事哉、取留メ候儀は難相分、右は但馬矢名瀬  
近村早田庄や久兵衛申口、  
右久兵衛外用ニて但馬銀山へ罷越候砌、右大変ニ付無  
拋泊り、兵糧米手当ニ引取、右申立候よし、

徳畑村馬口方

音右衛門申口

右音右衛門馬口方山口立晒村(立晒)ニ十一日泊り、十二日引  
取かけ候処、銀山之前より浪士七人連ニて具足を着、  
拔身抜刀ニ而駕籠ニ乗り、老人ニ人足二三十計ツ、相  
掛り、早進ニ而出、村々百姓人数相集メ、追々下向へ  
罷越し、夫より竹田村・物ノ部村迄帰り候処、銀山役

人四人拔身鎧紙ニ包ミ、逃出し体ニて、雨天ニ付同所  
庄やニて、傘かし遣候由、大体播州実粟村シツウ之方江逃退  
候哉之由、夫より追々人数詰掛ケ候ニ付、本道往来難相  
成候ニ付、間道又は田之中等通行ニて、漸夕方ニ徳畑  
村迄引取候由、銀山地役人之内杉田六郎ト申仁、十二  
日四ツ時分柏原より通行ニ而、右之外銀山地役人五人  
計り浪士方ニ相成居候由、

是ハ柏原番人頭分柏原様江差上候届出之写、

一 乍恐御届申上候口上、

但馬銀山表騒動之儀ニ付、彼是承り、探り組下之もの  
追々差遣し、荒増聞込之次第、今朝以愚書申越候間、

左ニ牽申上候、

一 浪士人数七拾人計之由、

内頭取大將分

(宣喜) 沢主水  
(平野國臣) 佐々木將監

右兩人頭取之由、出立ハ歟形之兇、緋威之鎧ニテ、年成三十才計、以下其外皆々若年者、尤鎧ニ鉢巻、名々拔身・鎧所持ニ而見廻り之由、百姓向ニハ殊之外取扱よろしく、浪士之ものより格別ニいたわり候よし、

一浪士之もの当十一日昼時分、森垣村遠王寺ニテ寄集り、夜中七ツ時銀山陣中江込ミ入、在来之宝物御領内之調帳之向不残受取、地役人五拾人余ハ一味致候由、一右之外大将ト申立、名前難相分候得共、束帯之姿ニテ罷在候仁有之候、

一十一日より今日迄銀山領之百姓より、米凡弐百石余り持参り候よし、

一銀山領百姓共不残浪士ニ一味致し、村々役人より申付、五拾才より拾五才迄不残銀山江参候よし、

一十二日昼七ツ時分矢奈瀬村志賀や定吉ト申もの方へ、浪士早駕籠ニテ罷越、村々江百姓駆集候、右定七方ニテさらし木綿ニ三社之文字を書候白旗を拵へ、銀山江出掛候よし、右定七ハ帯刀浪士一味之ものニ候、博学

之よし、此もの当地成松小町豆蔵ト申ものゝ婿ニテ候由、大切之事故別段申聞候、

一出石様御出張ハ十三日四ツ時頃ニ米地村<sup>(兼父町)</sup>迄御出陣、如何之儀ニ候哉、俄ニ御引返し候よし、委細之儀ハ難相分候、

一竹田辺ハ辻々江見張之もの罷出、立寄事難相叶ゆへ、委細承り方甚六ヶ敷候へとも、風説推察ハ今兩三日ニハ銀山浪士引籠り候様子ニ相見申候、

一竹田町大庄屋矢名瀬屋使者方や・和佐田や右兩人出石様へ御固メ御陣屋へ罷越、京方へ一味いたし候ニ付、御支配之内より沓人ツ、人質ニ御取候趣申出候よし、風聞有之候、

一福知山様<sup>(夜久野郷)</sup>夜久郷へ御出張之様子、

一別段承り込候、昨十四日之事ニ候哉、出石様御大將早川庄兵衛様凡人數千人計ニ而、山口辺迄御出張、浪士逃去候内兩人計竹田辺江逃後候処、百姓數多寄集り、右兩人之内沓人御召取、沓人ハ切捨候よし、後之所ハ

右浪士一味不致候、長百姓の方へ百姓一統より乱妨ニても可致、人氣立模様有之風聞之由、此儀造成事不相候事ニ御座候、風聞而已申上候、

右之趣荒増之処奉申上候、尤彼地へ出張致候組下番人未タ引取不申、書通にて内密差送候事故、委細承り取難相成、此段御免可被下候、いつれ今明日ニは大体引取可申哉之由、遠坂村江相詰居候組下佐や町番人弥七より注進仕候間、追々注進可奉申上候、以上、

十月五日朝

小頭 熊八

十四日夕

是ハ柏原番人頭也

栗鹿村 安左衛門

家潰

農村 五郎兵衛

田中村 六左衛門

右之もの打捨矢名瀬村へ罷出候よし、人数ハ睨ト不相分、(細懸)柚村妙見山ニ昨日刻限不相分、今夕人数寄居候、

但馬宗氣村

馬口方聞口

一起リハ十月十一日十二日ニ其辺之百姓相集々、右十月十五日柏原様にて聞合如此御座候、

右は笹山様郡奉行永戸某より、下夕役番人探索ニ被出候、番人より探索書差上候写ニ御座候、

冊子原寸 縦二四・九糎 横一七・五糎 二〇枚

書 生野銀山一件探索書

二通

七五四ノ一

一美玉三平被討取、平野次郎(國邑)被生捕候儀は、風聞而已ニ

而、其場所ニ而は誰共不知討取候而、銀山江差送候事

ニ而、懷中ニ何ぞ証拠等數物有之候欝、又は見知居候者ニ而茂死体見受候欝承合候得共、夫等之儀茂無之、

中島太郎兵衛兄弟同道故、三平ニ而可有之と之事のミ

ニ而、或ハ六栗ニ而被討候兩人は、藤崎左馬藏(木曾原太忠)旭健士

事本田小太郎(納懸)野座村 兩人之由ニ茂聞得、委數聞ハ弥疑

數、且三平懇意ニ仕居候者江相尋候処、精々聞合致探

索居候得共、実否不相分趣承候ニ付、先日御届申上候

通、見知居候百性江(姓)為見届候儀、極々内分ニ而銀山役

人江為相合、漸都合出来申候付、廿六日夜為見届候手  
管ニ御座候処、銀山表出張之出石家中と銀山代官と相  
振候儀致到来候由ニ而、廿六日より敷敷取締相成、迎  
茂首級為見候儀、此涯難出来、就而は同所ニ而生捕相  
成候者江、極々内分を以今晚為逢候ニ付、牢屋ニ而篤  
と被聞届候ハ、可相分、其間ハ差含取計候との事ニ而、  
夜中窃ニ牢屋江兩人差越、其節之次第再三承候処、三  
平并我々兄弟六粟ニ而鉄砲ニ而打立られ、三平并兄ハ  
被討候、三平ハ所々玉カスリ、終ニ被討候と存居候、  
間違ハ無之旨申候段、兩人より承届申候、老人ハ銀山  
番人頭原田勇七、老人ハ出石番人頭岡村谷右衛門、  
一銀山御代官川上猪太郎殿と出石役人と不和相成候訳ハ  
仙石様ハ但馬警衛被仰付置候由ニ而、今度浪士徒党之  
者吟味強、其上銀山より騒動之注進遅、殊ニ役人之内ニ  
茂、浪士江同意等敷廉茂有之、強而取調候儀を御代官ハ  
不承知之趣ニ而、生捕之者茂未一度茂不被相糺由ニ御

座候、右等ニ付双方より氣張合、互ニ熟談不相整向ニ相

成、夫故含ニ而取計候儀難出来相成候段、内々承申候、  
一出石藩京田戸一右衛門江相頼、同人より茂致探索具候  
得共、樋ニ難分候付、同藩郡支配代官役渡辺仁左衛門、

此節銀山江出張居、幸銀山御陣屋内重役ニ伯父甥之統  
ニ而候故、彼方内々為致探索候処、別紙書取差遣候旨  
戸一右衛門より承得申候間、別紙差上申候、

一平野次郎ハ豊岡京極様方ニ而入牢ニ而候由、是迎茂未  
一度茂糺無御座候由、平野二郎と申者と聞召捕候俣ニ  
而、豊岡役人茂実ニ次郎ニ而候哉不分明ニ御座候由、

右成行此段御届申上候、尤先日極内首級見届之手筈  
ニ申上候処、到其期齟齬仕、甚大形之到奉存候、乍  
併暫氣を抜、時儀見合猶又都合可致賦候段承得申候、  
此段申上候、以上、

但本文外事情之次第ハ別冊之通御座候、

亥十月

服部政次郎

冊子原寸 縦二五・四種 横一七・七種 二枚

七五四ノ二

生野銀山騒動一件、同所近村竹田村且湯島等ニ而

探索仕候成行左ニ申上候、

(宣惠)

一十月十一日元沢主水正殿始浪土生野銀山江罷越、同国

(本多小三郎)

養父村虚無僧清閑を以、此度京師江歎願之次第有之、

当所迄參着相成候間、暫陣屋借受度趣ニ付、此頃は支

配毛見ニ被差越、留守中故御断申度、当所寺院等江御

逗留は御勝手次第候旨、相答候由、

一右ニ付同所遠納寺と申寺借入候而、飯五十人前手当之

儀、銀山役人江申入、早速差送候由、此間ニ浪土中何

欵評議為有之様子ニ御座候由、

一再応陣屋借受度掛合ニ付、終ニ貸渡候由、就而は諸道

具杯陣屋外江火急ニ運移、夜中沢殿初被引移候由、

但応接等は至極丁寧ニ為有之由、

一廻状を以近村江触出候由、尤是迄奸吏共相貧り、下々

及困窮候由、此節より貢米三步通り差免、上納申付候

段申触候由、

先年開港以来御国体を汚し、小民共困窮致し候を被

遊

御憂、度々関東江攘夷之

勅被下候得共、終ニ不奉

王命、教

朝廷を奉蔑、如毒藥等を献し候処

皇祖 天神之保護ニより

玉体無恙被為 在、然ル処、去ル八月十七日奸賊松

平肥後守始、以偽謀 禁門ニ乱入、関白を幽閉シ、

公卿正議之御方々之參 内を止め、御親兵を解放

し、言路を隔絶、恐多茂

今上皇帝逆賊之罟中ニ被為在、実ニ千秋一時之一大

厄を恣ニ致所置候始末、不共戴天之誓ニ候、嗚呼率

土之浜誰人か不涕泣哉、男子胆を張抛身此時ニ候、

但馬国ハ人民忠孝之情厚、南北之時にも賊臣足利ニ

不与、

皇威を揚、国体を張候条、被 聞召、兼而頼母度奇

特ニ 思食候、早々馳集り大義を承り、  
叡慮を奉し奸賊を退け、可奉安

宸襟事、

沢主水正

亥十月十三日 旧家并有志之人々江

一陣屋御藏金同米役人江引合借用候由、帳面等迄奪候と  
の風聞御座候得共、万事猥成儀は無之由、

一陣屋三方口ニ而南ハ播磨口、北ハ但馬口、東ハ丹波口  
一播州口江は美玉三平、其外但馬口江は二里計、北山口

村江南八郎以下長州浪士、沢殿ハ陣屋ニ罷居、村々よ  
り相集候百性共ハ陣屋内外ニ罷在候由、

一平野二郎・美玉三平ハ内外馳廻り、指揮仕居候由、

一十三日ニ一先相開候段、但馬口固山口村出張、南八郎

江農兵を以申入候処、八郎大音ニ而播摩口は美玉三平  
相固メ何馬鹿と、大ニ叱りたるよし、

一其夜沢殿初陣屋内落去候由、尤落去之次第は何故欤相

分不申由、御藏金取出、又は銀山辺豪農より金借用候  
ニ付、百性共銘々浪士ニ而ハ無之、盜賊杯と申立、致  
動揺候故欤と風聞仕候、

一陣屋内弥落去ニ付、百性共多人教南八郎以下固候山口  
村妙見堂下江押寄、銘々鉄砲打掛候由、八郎は以下之  
浪士江切腹を勸、皆々介借、後ニ切腹仕候由、

但南八郎本名川上弥一廿三才と為申由、実ハ十八九  
才、親ハ川上外記と申候由、

山口村妙見堂江左之通書残有之由、

議論より実を行ひなまけ武士

國の大事を余所ニなす馬鹿

皇国壯猛之臣

川上義一

一銀山辺より竹田・養父・ヤウカ近村、又湯島辺ハ、当

五月頃美玉三平其頃名ハ  
阿多事人 四十五日程湯島ニ滞在、勤王

之儀を唱、豪農之向江は教導仕、農兵と申儀相企候由  
当分專百性町人迄武術修行仕居候、夫故三平を父兄之

如致尊敬居候者多御座候、

一三平九月三日京師出立、湯島江罷越候由、其頃会津より宮津江被達、浪士探索有之由を湯島之者久見浜ニ而承り、早速急飛を以、同意之者江為知申たるよし、其折ハ三平養父村江差越居候付、右一左右聞と直様養父村逗留先江差越為知候由、三平ハ夫より因州路江穴粟越ニ而逃去候由、

一生野御代官川上猪太郎殿并支配下銀山地役人重役且手代之内ニ茂、勤王之面々相出来、潜ニ浪士江心を寄居候由、先達而大和騒動之節茂、若当所陣屋借度趣ニ而候ハ、及応接可貸筋ならハ、陣屋明後以後関東より御咎有之候ハ、切腹致迄之事と猪太郎殿被申たる事も有之由、尤浪士為致止宿不苦とハ難免候得共、其身勝手ニ為致止宿候儀は、強而咎ニ不及事と、内々役人江茂為被申由、

一農兵之儀は専三平周旋ニ而、元三条家より御書付被下候由ニ而、三条家以下并長藩其外暴論徒を正議と相心

得、只管隨身致居候姿ニ御座候、

一銀山支配百姓旧家又は豪農之向江は、猪太郎殿より帯刀差免、専農兵を広く仕立られ候工風と相見得、今度支配所検見之折、先々ニ而百姓ともへ武術相励候様、為被申由御座候、

一右支配所并湯島辺ハ勤王之者余程有之由御座候、能正暴之訳説得仕候ハ、可宜被存申候、

一肥後脱藩松田重助変名旭健士と申由御座候、  
一作州倉掛より浪士八人乗船致候由相聞候間、其方探索差越候旨、大坂町奉行組与力召列候手先之者より、銀山番人頭江申居候由、

右実否相分不申候得共、但州所々ニ而承得申候間、申上候、以上、

冊子原寸 縦二四・四種 横一七・三種 五枚

七臺 葛城彦一ノ長州及七卿事情覚書

覚

一 正親町殿黒崎駅滞在先江三田尻七卿より使として、本水藩加藤有林当分山田貢ト名乗候者被差越候処、正親町殿御出帆跡ニ付下関江渡り、正親町殿御用人徳田隼人ニ逢、同人より之手紙ヲ以筑前江来り役方ト取会候事、

一 筑州より長州江被差立候使江山口ニ而益田<sup>(親施)</sup>彈正・高杉晋作等心接之事、

一 高杉晋作事本下ノ関奇兵隊惣督、当時小郡辺ニ而他方問合等受持之事、

一 筑州之世子御上京中国路御通行、長州より願、且薩長確執之姿ニ相成候茂、根を糺候へハ如何ニ茂わけなき事ニ付相解候様御執持可被下旨筑前侯江頼入之事、

一 七卿同道ニ而長門守殿上京之儀、御周旋可被下同方より頼入之事、

一 当分阿州之土気振立候ニ付、徳田隼人差越、且土州迄

も差越候而申談、長州奇兵隊并和州之徒ト一ノ調子合旨徳田等心組之事、

一下ノ関江長州御家老国司信濃致出張居、渡海之者改メ敵重之事、

一同所教法寺出張之先鋒隊人数凡三百人余之事、

一 筑前御上京前長州より之御使者井上与四郎来り候事、

一 白石正一郎并山本林蔵外ニ四五人九月初旬より蜜々上京いたし候との事、

一 小倉大里之御本亭并阿弥陀寺之三浦屋源蔵か事、

一下関白石方江御預ケ早船之事、

以上、

十月

<sup>(竹内経成)</sup>葛城彦一

文書原寸 縦一七糎 横九五糎

妄 久光公ヨリ一橋中納言へ？ノ書翰草案

京師ノ形勢ヲ報ス

七五六ノ一

芳翰辱拝読仕候、先以愈御堅剛被成御座奉恐賀、然は昨夕は小松帯刀参上仕候処、種々御懇命被仰下候由、殊ニ御高論拝聴仕候由、奉拝謝候、其節は愈薄之 (後欠)

七五六ノ二

一 翰謹而進呈仕候、向寒之候御座候処、益御安泰被為成御座、海上無御恙御着坂被為在候段承知仕、恐悦御儀奉存候、然は当春は上京奉拝尊顔、從 高命 公武之疎漏之愚見言上仕候処、於 朝廷迎も御採用被為 在候御模様ニも無御座、長々滯京仕候而は、短慮之家臣共如何様之不敬ヲ醸出候も難計、乍残念空く帰国仕候、其後時態追日致転換、遂ニ今日之形勢ニ相成り、再 神州挽回之機會ヲ得候段、并躍之次第奉存候、殊ニ大樹公御上洛、閣下ニも御同様 被仰出、恐悦奉存候、至此時 公武御一和之御実情被為立、暴論御鎮靜、各国一致無之候而、迎も真之攘夷は相叶申間敷奉存候、御機嫌伺旁、当地之形勢言上可仕且心底之次第、小松帯刀差出候間、尚委

曲同人之口上ニ相讓、文略仕候、先は御着御祝儀旁申上度奉捧愚札候、恐惶敬白、

二 白、時季御保護被為在候様奉存候、乍恐一日も早く御出京被為在度奉伏願候、以上、

文書原寸 縦一八・八糎 横二四・二糎(表裏一枚書)

三 伊地知正治ヨリ藩庁へ建言ノ富国強兵策

(端裏朱書)  
「癸亥十月 いち、正治建白」

此度長州并浪士之暴行滔天上下一同倦果、京師引払被

仰付後、

三郎様

御召候処、我国ニ而は醜夷撃退之 御武功、既ニ四海

ニ頭、自然人望奉帰服候処有之、此上は天下紛々、不

容易御時節ニは候得共、我国御尽力之善悪に依而、内

外之治乱は相分可申重大之御機會と奉存候間、卑賤之

管見奉恐入候得共、聊愚存之趣申上候、

京師

天下百年之乱有而、一日之治なきは、古今之通例ニ而、  
当時不容易砌柄汲受、各吏勉勵仕候ものゝ、動は人心  
太平懶惰之風習ニ立戻り易ク候得は、何分此時ニ乘而、  
天下ノ人心悦而征夷之

詔ニ奉服從候御所置之 御廟算は有之間敷哉、伝承、  
唐徳宗奉天ニ翻遷之折は、天下過半賊手ニ陥り、寸兵  
尺鉄之権無之候得共、李泌陸贄道徳を以輔佐候故、奉  
天より之詔勅を見而は、猛卒悍将茂落涙して、不感者  
は無之故ニ、無程徳宗旧都ニ還幸成而、唐之世又久敷  
連続仕候由承及候、夫徳宗之闇愚成も奔走之余さへ道  
徳を以奉輔佐もの有之候得は如斯、況堂々たる  
天朝を以深天下之人情を被 知召、人情ニ依而美ニ不  
出来と可出来之筋を立、除<sup>(縁)</sup>ニ道徳を以征夷之実事を励  
し給ハ、長ク人心  
朝家を離奉ニ不忍、所謂愛我者悦、悪我者畏不申、返  
ス、茂四民各其処を得候様、 王政之大本相立、天  
下朝命之条理有之を悦而奉戴仕候儀、

皇威振興之御基本とは奉存候、

一朝議之定論追々相変候様ニ而は、譬十年相立候共、徒  
ニ天下之人心疑惑仕候迄ニ而、逆茂夷賊征討出来兼候  
は扱置、災害近々生候茂不可計事欵と存候故、定論相  
立兼候儀、大方乍恐 公卿要路ニ其人無之故と奉存候  
付、篤と熟考仕候処、 尹宮様御儀 皇族親王とは候  
得共、最早

御統柄茂遠キ御事御座候故、一旦人臣ニ御下被成候而  
知太政大臣ニ御任し、大原卿其外一方之御用可被成仰  
立 公卿方、昔日過失小退縮之御勘気は一旦ニ而御赦  
免、夫々可然処ニ御撰挙、大政可一定之人材上ニ御備  
り、天下匹夫ニ至り安心仕候様有之度御座候、治大国  
は如煎小餅、しは、動ハ潰乱と承及候、

一 近日京地騒動、且幕府疑惑を抱候は、浪士輩蜂起  
朝議不定之故と奉存候間、此涯諸藩有志并浪士輩へと  
被

仰渡度子細は、先年来洋夷追々猖獗、四民困窮、国権

不相立様覚候付、段々申渡趣茂有之候処、伊井・安藤(伊井直勝之)

閣老之折、大樹幼年を幸として醜夷を挟ミ、上を誑キ

下を虐け、罪惡貫盈候故、有志之面々奮起、二凶既ニ

天誅ニ伏候処、其後幕政追々一振断然非常之明所置茂

有之、如今ニ而不怠は、数年之後富国強兵之道十分相

立、

皇威万国ニ振之勢茂可有之間、有志ノ者今は務而浮薄

暴卒、却而国本を弱する事なく、実ニ夷賊征討可出来

を見而進退セよ、是

天朝之意也、宵旰

天朝ニ而茂聊無油断、公武合一、

皇国之武威相立候様、御世話被成候 思召ニ有之候

段被

仰出候ハ、幕府ニ而茂流石有志之面々

天意ニ安心し、武備一偏ニ心を用ひ、浮浪輩茂自然議

論実事ニ基キ候様可罷成奉存候、

一今日之洋夷は昔日之夷狄類ニは無之候得は、徒ニ攘夷

如キ之御定論ニ而は、迎茂彼を征服之儀無覚束御座候

間、如今は勤而 公武一和国本を強して、武備十分相

整ひ、世界第一之強国と 御国体相立候様、幕府列藩

へ御委任、左候而時々首尾を茂 御聞届有之、其中ニ

而衆夷之内、別而難差置無礼之国茂候ハ、世界普通

之大罪を御鳴し、何処迄茂御征討有之、夫ニ而

皇国之御威勢十分相立候上は、衆夷は自然來服可仕、

抑禦夷之策茲ニ不出而洋夷之形勢何物成ルを不并知、

太平懶惰之民を以、一時ニ衆夷各国を攘除被 仰出候

儀、乍恐

朝廷之 御明策とは不奉存候、

一長州其外浪士輩、幾度之御解論も不奉畏、疎暴之模様

候ハ、(毛利慶親・定広)長門守父子并彼国有職之ものへ被 仰談後、

巨魁之者一兩輩御成敗、其余は如何ニ茂して助命仕置、

後日征夷之御用相勤候様被

仰出候、可然返スノ、茂暴論之者迎甚敷御惡ニ而、彼

等を益必死ニ陥候儀、御得計とは不奉存候、

一在京之列藩一同へ、

朝廷より被 仰渡度子細は、不得止時勢ニ付警衛旁として、各令滯京候付而は、都下之華俗ニ引替へ、勤而物入無之様節儉相用、各国力不費弊、不年而武備十分相備、夷賊征討之

叡慮奉戴候様被仰出度御座候、

一都下一同へ近年諸国より段々多人数上京、自然之融通各ニも満足之筈ニ候、就而は彼等か朴実不馴を幸ニ、当座無法之高利を貪り、永ク遠人之心を失ひ、終ニは各か産業を失候様之儀無之様、可相慎旨被 仰出度御座候、

### 幕府

一海岸之備弥盛大、軍艦大砲練兵之上、十分行届、幕府之幕府たる名実十分相立、内外共ニ恐をなし候而、代々の旧物を不失様、厚く被 仰付度事、

一越前侯再勤被 仰出候儀、  
(松平重永)

天朝へ御伺相成度事、

一諸侯へ内外不容易時節ニ付、非常之決判を以參勤相延

妻子引取被 差免候上は、各篤得其意候而、海陸之備十分相整、醜夷畏服候様無之候而は、我等武将之棟梁として、

天朝へ申訳無之、勿論各ニ付而茂決然家国之保全出来兼候半欵之段、懇々御達相成り、前条通幕府より先達而广大ニ備向相整候へ、天下之人情自然幕府を依頼仕候様有御座度候、左候而幕吏之面々、動は幕威不落様との議論、左も可有之儀ニは候得共、今之時ニ当而徒ニ威を國中ニ張立候様ニ而は、四海之人望却而相離候儀も可有之故、勤而武備充実之上、

皇国之威を万国ニ被立候上は、天下匹夫ニ至り、一人たり共幕府を不尊敬者有之間數奉存候、

一諸御沸騰諸人困窮候儀、古より国乱之本と承及候、近年醜夷来舶以来、物価日ニ揚行、実以不可然事と奉存候処、幸幕府ニは先代より京・大坂は勿論、其外每都會之地、必奉行被召置候上は、勤而諸御致平均候様取

締可仕旨被仰渡、精々御世話有之、御精心自然物情幕政を相悦候様、御所置有之度存候、

一浪士共蜂起、蓋言路之塞る子細有之故と存候間、譬無頼卑賤之者たり共、所存は十分申上候様御達相成、其内巨魁御用立候モノ、限り、夫々御拳用被成度、即是内乱ノ源を清するの御所置と存候、

一長州夷難之儀、元來彼等ニ対し無名之兵を用候ニ起り候得は、此後如何相成候半欵、長防夷虜ニ拠れ候而は、皇国之大害大恥、扱は其刃ニ而は相済申間敷、多年醜夷征討之深キ

叡慮茂此涯一旦ニ而相立兼候半と奉恐入候故、早ク幕府ニおひて夷情ニ先し、無事之所置不相付候而不叶儀と奉存候、御所置之次第は、下之関ニ而三里四方之地御取揚ニ而、可然諸侯両三藩へ警衛被仰付、夷人江は程能御達相成、後長州ニは近国ニ而豊ニ返地被成下、数度敗走之戦苦相忘候様、御所置相付度奉存候、

但浪士共ニも夫々に片付相安候様御所置有之度存候

### 諸侯

大小之侯伯数多都下へ会盟之上は、争長は自然之人情ニ而、確執はより相生候半欵と苦心仕候、我国ハ昨年来大義既ニ四海ニ顯然、加之醜夷撃退之御武威相立候上ニ候得は、此上は早ク公卿武門合一、皇威万国ニ振興し、被為安

叡慮候多年之御精心、此時ニ御尽力候儀可為專要間、勤而御謙遜之御徳相立、勞は自己ニ先し、功は人ニ譲り、無善無惡、拳而公武之命令を悦而、国本強大相立、乍恐天下之薬石と被遊御成候様、我国人之定論相成候ハ、自然天下之議論一定、武備相整醜夷畏服奉安

叡慮之儀可相調奉存候、昔斉桓公驕色有しかは、其霸ハ不久と智者は申居之由承及候、

一諸侯元來深宮之内婦人之手ニ長候而、下情ニ疎ク、事業之出来兼候は案中御座候趣、其辺能々御親切ニ御世話被成下、自然彼方より依頼仕候様ニも御座候ハ、

御議論往々被行易キ方ニ候半と奉存候、

一越前侯早ク 御上京ニ而、如初早ク政事惣裁職御任し有之度、越侯ニは流石初より有志の方ニ而、近年幕府非常之明断多は彼方より出候由、感服之至御座候得共、不幸ニして公武之人情相失候処有之、今之時ニ当而天下之為ニ不相失之名將と奉存候故、宜敷

天朝幕府へ御取成し被仰上、御再勤之処有之度奉存候、

#### 洋夷

長州可笑之備を以禁忽<sup>(變)</sup>之兵端を開キ、教度之大敗を取候儀

皇国之大恥を引出し候は、举世知処ニして、確然醜夷征討之御深謀は是より如何相成候半と恐入候、早ク内ニは正名分振節義、外ニは通商航海を先し、武備十分相整、彼等十分畏服候上は、自然万国ニ

皇威は相立可申、其上万一是迄通猖獗甚敷夷種茂候ハ、万国と共に其罪を攻、不服は其一国と降和を乞迄可征伐、其時逆茂衆夷を一時ニ攘ひ、彼等を合力セシ

め給儀、御得計とは難申上候、既ニ強大之一夷畏服之上は、

皇威自然四海を蓋ひ、衆夷来服、祖

宗之大業当

御時代ニ成就仕候儀、十年を不可過と存候、右は磊落難叶議論ニは御座候得共、堂々たる

天朝幕府大小之侯伯合力、夙夜相励候上は、万々不相調之理勢無御座候故、其中緩急之所置、縦横之策、彼か形勢情実を審し、務而今日小忿小恥之憤、越王も胆をなむるの意を主として、不遠而大ニ膺懲之典を奉候様、大小之条理相備度奉存候、

右は多日存寄候事共ニ御座候処、既ニ当時天下之盛敗安危大関係之時節到来、殊ニ近日辱ク所存は可奉申上候御達承知仕候上は、不顧恐懼執事迄言上仕候、以上、

亥十月

伊地知正治

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一巻第五九〇号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・三糎 横四一〇・五糎

七異 大坂ニ於ケル諸品買入高

(表紙)  
一 元治元年子七月

於大坂諸品御買入方付浜崎方江

御下金総

一金拾万百六拾五兩壹步壹朱

右亥十月十三日より十一月八日迄時々御下金

一金壹万五百兩

右長崎より為替を以大坂江御差統之上御下金

合金拾壹万六百六拾五兩壹步壹朱

私

一金九万九千九百九拾兩壹步貳朱

一 錢貳貫四百八拾五文

綿式万六百九拾六本御買入代

一金壹万七千八拾貳兩壹步貳朱

一 銀拾壹兩貳分五厘 (厘)

宇治茶貳千五百九拾九箱御買入代

一金四百貳拾四兩

一 銀 八兩

割昆布百六拾五表御買入代

一金七百拾八兩三步壹朱

木綿形付千六百七拾貳反御買入代

一金三百五拾三兩壹步三朱

一 錢貳百七拾九文

右品々御買入付諸雜用

合金拾壹万五百六拾九兩

合錢貳貫七百六拾八文

合銀拾九兩貳分五厘

錢ニして壹貫五百四拾文

二口合錢四貫貳百五拾四文

金ニして貳步貳朱ト錢貳百五拾四文

惣合金拾壹万五百六拾九兩貳步貳朱

惣合錢貳百五拾四文

差引殘

金九拾五兩貳步三朱

錢貳百五拾四文

右貳行於長崎上納為仕申候、

右、於大坂諸物御買入方付御下金差引總、右之通御座

候、以上、

子七月

伊地知壯之丞(眞筆)

冊子原寸 縦二八・七糎 横二〇・八糎 四枚

表紙 長崎貿易利潤

一元治元年子七月

於長崎御商法御利潤」

一金貳万五千八百貳拾八兩貳朱

一錢貳百壹文

右於下之關綿五千七百六拾本宮崎屋より御買入

一金七百貳拾八兩三步

一錢百六文

右於同所綿百五拾六本島屋より御買入

一金百九拾七兩貳步壹朱

一錢拾八文

右於同所三石昆布百三拾九宮崎屋より御買入

一金貳百拾壹兩三步壹朱

一錢四百五文

右於同所五陪子七拾八表御買入(倍力)

一金千六拾七兩三步三朱

一錢四百九文

右於同所割昆布千三百貳拾九表宮崎屋より御買入

一金六拾貳兩三步

一錢四百拾壹文

右於同所椎茸八箱御買入代

一金百貳拾九兩壹步壹朱

一 錢百六拾五文

右於同所品々御買入方付諸雜用

一金千八百八拾壹兩三步貳朱

右於備後鞆綿三百五本御買入代

一金七拾七兩貳步貳朱

一 錢貳百四拾九文

右於同所五陪子三拾三丸御買入代

一金貳百貳拾兩

右於同所銅錢六百六拾貫文御買入代

一金七拾兩貳朱

右於同所品々御買入方之諸雜用

一金百五拾壹兩貳步三朱

一 錢五百六拾四文

右於四國樟腦貳拾五樽御買入代

一金四拾六兩貳朱

一 錢貳百貳文

右於同所白炭五百表御買入代

一金五百拾七兩三步

一 錢四百五拾七文

右於同所五陪子百九拾八丸御買入代

一金五兩壹步貳朱

右於同所五陪子貳丸御買入代

一金八拾五兩三朱

右於同所品々御買入ニ付諸雜用

一金六千五百四拾五兩壹步

右於防州岩國綿千四百六拾本御買入代

一金九拾五兩三步

一 錢三百五拾九文

右於同所右品御買入ニ付諸雜用

一金四百五拾兩貳步

一 錢四貫九百文

右下之関并防州岩國・備後鞆(鞆カ)・四國より諸物長崎迄

仕送ニ付運賃并上乘賃錢

一金六万千八百五拾兩三步

一錢貳貫貳百六拾文

右於大坂綿老万四千百四拾本御買入代

一金七千三百貳拾四兩壹步壹朱

一錢八百貳拾四文

右於同所宇治茶千貳百八箱御買入代

一金四百貳拾四兩

一錢六百四拾文

右於同所割昆布百六拾五丸御買入代

一金七百拾八兩三步壹朱

一錢五拾四文

右於同所木綿形付千六百七拾貳反御買入代

一金三百五拾三兩壹步三朱

一錢貳百七拾九文

右於同所諸物御買入ニ付諸雜用

一金七百五拾八兩壹步壹朱

一錢五貫四百七拾四文

右大坂より長崎迄諸物積送方ニ付運賃并上乘賃

一金三万三千三百八拾五兩三步壹朱

一錢貳百六拾三文

右於長崎綿五千八百貳拾本御買入代

一金五百八拾八兩三步

一錢百八拾四文

右於同所綿御買入上荷船より積送并水上賃掛る其外

諸雜用

一金百拾六兩貳步三朱

一錢三百貳拾八文

右諸所より諸品積下候節替方其外諸雜用

合金拾四万千百九拾四兩壹步貳朱

合金拾八貫九百六拾貳文

金ニして貳兩三步貳朱ト貳百貳拾文

二口

合金拾四万千百九拾七兩壹步

合金貳百貳拾文

右於諸所御買入相成候品々代銀

一金三千九百三拾四兩壹步

綿六百八拾三本

斤ニして貳万八千貳斤

百斤ニ付拾四兩替

右英夷カラハ申請

一金三千貳百六兩貳朱

綿五百六拾四本

斤ニして貳万貳千九百壹斤

百斤ニ付拾四兩替

右清人沈篤齊申請

一金貳千七百九兩壹步

綿四百拾貳本

斤ニして壹万六千四百貳拾斤

百斤ニ付拾六兩貳步

右英夷カラハ申請

一金三万貳千四百四拾七兩壹步三朱

綿五千本

斤ニして拾九万六千六百五拾壹斤三合

百斤ニ付拾六兩貳步

右英夷カラハ申請

一銀錢九万三千八百八拾貳枚三合九夕五才

綿九千六百拾本

斤ニして三拾五万八千三百九拾三斤八合

百斤ニ付貳拾六枚替

右清人沈篤齊申受

一銀錢八万三千九百七拾枚

綿八千五百五拾五本

斤ニして三拾三万五千八百八拾斤

百斤ニ付貳拾五枚替

右英夷カラハ申請

一銀錢八千貳百拾四枚貳合六夕

綿仕劣八百五拾三本

斤ニして三万四千九百五拾四斤三合

百斤ニ付貳拾三枚五合替

右清人沈篤齊申請

一銀錢貳万五千五百三拾三枚三合八夕六才

綿貳千四百貳拾三本

斤ニして九万六千三百五拾九斤九合五夕

百斤ニ付貳拾六枚五合替

右英夷レンボ申請

一銀錢千七百六枚壹合壹夕

五陪子三百拾三丸

斤ニして貳万四千三百七拾三斤

百斤ニ付銀錢七枚替

右英夷カラハオールト申請

一銀錢壹万五千五百四拾六枚七合七夕五才

宇治茶千貳百八箱

斤ニして六万三千三百八拾壹斤五合三夕

百斤ニ付平均貳拾五枚六合三夕三才

右英夷右同人共申請

一金貳百拾七兩貳步

三石昆布百三拾丸

斤ニして八千七百貳斤

百斤ニ付貳兩貳步

右清人泰和号申請

一金五百八拾壹兩三歩

割昆布百六拾五丸

斤ニして壹万六千五百五拾七斤

百斤ニ付平均三兩三歩ツ、

右清人右同人申請

一銀錢千貳百五拾四枚

木綿形付千六百七拾貳反

百反ニ付銀錢七拾五枚替

右清人沈篤齊申請

一金七拾七兩三朱

一錢貳百七文

椎茸八箱

斤ニして四百貳拾九斤

百斤ニ付拾八兩替

右清人泰昌号申請

一金百八拾三兩貳朱

樟腦貳拾五樽

斤ニして千六百六拾五斤

百斤ニ付拾壹兩替

右清人沈篤齋申請

合金四万三千三百五拾六兩貳步貳朱

合銀錢貳拾貳万九千四百八枚九合貳夕三才

内七万五千枚、百枚ニ付五拾七兩貳步替

代金四万三千百貳拾五兩

拾五万四千四百八枚九合貳夕三才

代金九万千百壹兩壹步

但百枚ニ付五拾九兩替算

合金拾七万七千五百八拾貳兩三歩貳朱

合錢貳百七文

差曳

金三万六千三百八拾五兩貳步貳朱御利潤

外ニ

金七千三百九拾貳兩壹步三朱

錢百七拾五文

綿千七百本

右於下之関・上之関焼失相成候以下

百斤ニ付并直成算当

又差引

金貳万八千九百九拾三兩三朱

右之通御商法付御利潤総ニ御座候、以上、

子七月

伊地知壯之丞

冊子原寸 縦二八・二種 横二種 一三枚

志 島津主殿消息

出發準備宛名不明

(封紙ウツ書)  
一拝復

梅里

ノ

┌

茶実少々進上いたし候、

雲煙辱拜見いたし候、追々御書籍も為御持相成、御請取申上候、御面拜之上御礼申上候、今日は快晴、御観耕之段御尤ニ存候、夕刻よりハ御光駕奉待候、僕ニも少々働きの心得ニ御座候、借純子ハ今日ハ快ク相成、御放慮可被下候、山之内ニは兎角罷帰候上ニと御延之所御頼申上候、匆々終日之願客ニハのし不申候、昨日共ハ朝より晩迄、一時之隙も無之、仕舞杯出来候丈ニ無之候、何卒一日ニ而も早目ニ御仕舞被成間敷や、僕ニハ延而廿七日に相成ハ廿六日といたし度候、兎角御同行ハ不相調事故、必貴君方ハ荷方船と御飛乗被成候而、緩々と御乗廻可給候、船ハ廿七日ニ出船いたし候様、取計置申へく候、一日を暮し兼候次第御座候、御笑察可被下候、母も昨日より参り呉仕合よく御座候、旁後刻も可申上候、以上、

八朔

文書原寸 縦一六・三種 横一〇五・九種

一 有馬中務大輔より島津久光へ

上京尽力ノ件

〔包紙ウツ書〕 有馬中務大輔

〔朱〕

〔封紙ウツ書〕 島津三郎様

貴答

有馬中務大輔

〔朱〕

華翰被成下拜誦仕候、如貴論向寒之節ニ御座候得共、

益 御安清被為 渡、奉欣賀候、然は

皇国安危存亡之界ニ御座候ニ付、速ニ

御上京御尽力被成度、且ハ小子ニも最早上京も仕居候と

被成御考候、此度

朝廷より御猶予被

仰出候事、御承知ニ相成候所、又々上京之義被

仰出候ニ付而ハ、一日も速ニ出立、若万一遅緩ニ相成候

而は、

朝廷江之不都合は勿論、長州同様ニ悪名更ニ遁有之間敷、

就而は速ニ上京仕候様ニ段々之御懇書、且ハ家来左門江も態々御逢ニ而、御伝言之趣具サニ致承知候、同人よりニ出立之手筈申付候、最早過半出来仕候央、近日浪人体所々江致徘徊、群盜蜂起之風聞も有之、日田表より人数催促御座候故、一応達

御聞不申而は掛念之場も御座候間、御請且為伺、重役之者出京申付候、於小子は何とも

御沙汰次第と相心得罷在候、猶委敷家来江申含置候間、不悪思召御汲分可被下候、先は貴答迄早々頓首、

十一月朔日

二白、御端書之趣難有、猶御自愛專一ニ奉存候、

不備、

文書原寸 縦 一七・六種 包紙原寸 縦三三・三種  
横 一九三・七種 横 四四種

三三 松平春嶽公より島津三郎公へ

宸翰拜見及一橋卿着坂之件

〔包紙ウツ書②〕

一島津三郎様

松平春嶽

親展

〔朱封〕

〔包紙ウツ書①〕

一島津三郎様

松平春嶽

用事

〔朱封〕

一輪致啓上候、向寒之節ニ御座候処、愈御清勝珍重之御

儀御座候、陳は昨日は小松帯刀被差出、過日来風氣御尋

問、殊ニ御国産之美茶御惠贈被下、不相替御懇厚、致叩

謝候、其節帯刀より段々之御心緒逐一承之、尚帯刀へ從

是茂衷情吐露之段々、同人より委細御聞取被下候事と存

候、且又

宸翰御写御内々帯刀より拜見仕候、極密自写仕候、即致

返上候、御落掌所希ニ候、書外期他日之面上、草々頓首、

復月二日

春嶽

三郎様

二白、時下御自愛專念之事ニ御座候、一橋殿ニも海上無滞も、昨日着坂、直ニ浪華城へ御入候旨、只今大坂より申来候、御承知とは奉存候へ共、乍序申上候、已上、

文書原寸 縦一七種 包紙原寸 縦二九・八種

横二九種 横三八・三種 二枚

三三 江戸ヨリ京都西脇江参候書状之写

江戸横浜ニ於ケル殺傷事件

西脇江参候書状之写

江戸飛脚屋より当所飛脚屋江参候書状写

一昨夜俄ニ市中騒敷候故、何事之出来候哉と怪ミ相尋候所、横浜商人之家江浪士乱入いたし、所々ニ而怪我人有之候、左ニ、

伊勢町

糸会所ニ而 即死三人

同所寺本

支配 同 式人

丁子屋甚兵衛

手代 同 老人

黒江屋

若者 三人

草伝馬町

中島屋久兵衛 深手

本町三丁目

高橋屋ニテ 即死老人

於玉ヶ池

中村屋善助支配 同 式人

丁子屋吟三郎

手代 同 老人

右之外、往来所々ニ而切害有之候付、今日は何れも戸ノ切ニ致し居候、右之始末昨夜五ツ時頃諸方一時ニ出来、市中誠ニ大騒動仕候、右ニ而交易之儀茂相止り可申と奉

存候、

右之趣横浜表より十月廿六日出之書状ニ申来候間、為

御知申上候、

一昨夜廿四日碓子橋外ニ而

一橋殿之御家老未夕御名前ハ聞取不申候得共

御家老衆両三人計何れ茂切害致し候由噂ニ御座候、

右之趣江戸廿七日書状ニ而申来候間為御知申上候、

十一月二日

文書原寸 縦一七・九糎 横九三・六糎

右 尹宮家奉仕人名

(包紙ウツ書)

大久保一藏殿

御内用

長崎在勤

竹下清右衛門

尹宮御方

諸大夫

進藤大学権助

武田相模守(備免)

隠岐長門守

御用人

伊丹藏人

駒井能登

岡本備後

山田勘解由

村山齋助

下総

御用人加勢  
御隨所兼務

御役所

山下右近將監

倉沢嘉兵衛

三島弥兵衛(通應)

木藤彦次郎

中根又八

御側番頭

検見崎四郎

大監

中村 藤太

御側衆

並川 主税

井上 中務

生駒 右京

医兼務

志々目 猷吉

御広間番頭

前田 十郎

大竹 富記

御広間詰  
御近習兼務

松元 清記

永山 左内

西田 司馬

高田 隼太

中村 源吾

川井田 多門

内田 恒治

佐川 又三郎

諏訪 伝三郎

田中 末次郎

大村 重介

津川 勝吾

飯田 友三郎

御広間衆

梅島 左兵衛

岡本 廉三郎

外様衆

加藤 糺

井上 一学

山本 兵馬

依田 義十郎

御茶道

西村 可久

藤井宗一

御賄下掛り

曾我佐太郎

赤井伴助

小島慶助

以上、

右亥十一月四日書付写

文書原寸 縦一六・二種 横一三三・八種

長崎竹下清右衛門ヨリ大久保一蔵へ

長崎ニ於ケル始末書添

購買大砲差押報告

二通

(包紙ウツ書)

大久保一蔵殿

御内用

長崎在勤

竹下清右衛門

七六五ノ一

蒸気スコットラント船并大砲買入方之儀、亜米利加コン

シニール・ウヲルス江約定取究候形行は其砌養田伝兵衛より御届申上置候、其後大砲取入方之儀都合能相濟候段申參候由、ウヲルスより承候付、九月廿日頃ニは可致来着管御座候得共、為何儀も相分不申候、中原猶介事右船乗組被仰付、先達而より出崎仕候間申談、諸手当物等相調日々相待申候処、先日上海より出帆英商船致入津、ウヲルス兄より同人江書状相届、且新聞紙手入候由、ウヲルス持参いたし申出候ニは、マカラニ而大砲買入方都合能相濟候付、同港ニ而積入方可致管之処、折節風波烈敷、マカラは小港ニ而大船繁碇不相調、無抛マカラ近傍支那領カムシンムーン港江致繁碇、端船を以大砲仕送積入候処、支那官吏之者参り、船并大砲取押候由、右カムシンムーンは開港免許無之港ニ而右様取押候由、ウヲルス兄ニはマカラニおひて鎮台免許之上取入候品ニ而、積入候儀は開港不相成場所ニ而も差支有之間敷心得、カムシンムーン官吏江届も不申出由、マカラはホルトカル領、カムシンムーンは支那領御座候得は、マカラ鎮台免許迄ニ

而は不相濟、其上カムシンムーン港ニ而密商売ニ而もいたし候半との疑念も有之由、乍然右様之儀は決而無之、

ウヲルス兄も早速広東詰亜国コンシユール江掛合、其外

支那官吏江も手之届候丈は都合仕候付、別儀なく相濟可

申、後便より委細可申越候間、其内右形行聞置可吳旨承、

当惑仕候、段々応接仕候得共掛隔候儀ニ而何分吟味付兼、

日々後便相待申候得共、未今日迄は相達不申候、いづれも

御急用之御品ニ而右様面働到来延引仕候儀何共恐入奉存

候、ウヲルス儀は当地にて亜国コンシユール相働候得は、

第一面皮ニも相掛候付、科料ニ而相濟候へ、何程差出候

而も不苦と殊之外心配仕候、右次第御座候得は恐入候得

共、急々来着は先無覺束奉存候間、猶介申談別段吟味仕

候儀御座候、就而は組入候付書面ニ而は事情貫徹不仕儀

も可有御座奉存候間、近日中猶介其御許江罷登り、形行

御届申上、且奉得御差図候様仕度同人江示談仕置候、其

内何分相分申候へ、早速御届申上候様可仕候、ウヲル

ス致持参候横文川原広太郎江為致和解候処、別紙を齎り

差出候付、為御見合相添、此段以御内用御届申上越候、  
以上、

亥

十一月五日

長崎在勤

竹下清右衛門

大久保一藏殿

文書原寸 縦一四・三糎 包紙原寸 縦二八・六糎

横三七・五糎

横四二・三糎 二枚

七六五ノ二

於長崎千八百六拾三年十一月廿七日<sup>亥十月十七日</sup>

一 第十月廿一日<sup>亥九月九日</sup> スコットラント船マカラ<sup>地</sup>江大砲

積入として、香港より開帆し同港鎮台より免許を請、

都而大砲買札充分なる手数いたし候、全体マカラは水

底浅くしてスコットラント之如き大船は、其港内江投

錨する事能はず、殊ニ風烈敷して港外江碇泊するは危

く見へしか故、マカラ<sup>地</sup>名より凡拾弍里<sup>日本</sup>五里を隔て、カ

ムシンムーンと称する港は至極結構なるか故、此港内

江淀舶せり、此津は支那開港之場所にハあらされとも、支那司人の免許を請るには及はずと思ひし也、前書に書載セシ如クマカラニ於て積入方出来ざるが故、スコットラント舶は大砲積入方ニ付而は、マカラニおめて適宜なる免を乞請、内港江乗廻り候、実は先年外国舶數同所江趣き、荷物積入し先例も有之故、拙者兄并船長ガルデイネルも、今迎故障ありとハ更ニ思はざりけり、

「合衆国と支那国との条約第四ヶ条ニ、亜米利加船は隱密ニ偽計を以、支那ニ開きある港の外ニ而商法を企て、亜米利加国旗を建たる船は其積荷共支那政府江取揚可申事と有之候」

去なからスコットラント舶はカムシンムン港ニ於て密買を謀候ニはあらされは、条約を違背いたし候儀ニは有之間敷候、第十月三十一日亥九月十九日同港貌利太尼亞政府之蒸氣船スコウト号船ト着岸し、直様スコットラント舶江士官被差送、船切手并積荷等被相改候、勿論スコ

ットラント舶渡來之始終は明白ニ告知致し候、然ル処、十一月二日亥九月廿一日支那蒸氣船コンファー廻着し、亜米利加条約第四ヶ条違背之旨を以スコットラント舶并積荷及び荷船は取押られ、船は支那司人の命ニ因てウロンポーと称する所江英軍艦スコウトより挽れ行し成り、此艦はスコットラント舶はカムシンムン港江着岸し、当日より大砲積入方いたし、上海ニある大砲式挺并荷船ニありし式拾四ホントの外ハ空彈実彈とも都而積入致し居、取押られなは速ニ開帆可致筈ニ有之候、拙者兄広東ニある亜コンシユル江申遣し、船荷物とも取戻しの熱談致し居候、且又同人は支那司人江至極信友有之、又肝要ニ候ハ、北京ニ有るミニストル江茂其旨申送候欤、自己ニ参り対談可致候、スコットラント舶薩州侯之為大砲積入方之儀ニ付、誰かスコウト舶の船將江告知致し候者可有之候、則新聞紙ニ而顯然たり、夫故支那司人江相達し、終ニハ取押られ候場合ニ相成申候、スコット船之船長誰より承知いたし候哉は

一円相分り不申候、兄并拙者此一件ニ付而は他江相洩し候儀、決而無之候、拜具、

十月十九日

ジョンジウヲルス

川原広太郎

大砲数挺を薩州江壳渡さんと企し一件

当月廿八日マカラ<sup>地名</sup>江廻着せしが李論生蒸気スコットラント船カムシンムー港にありて、大砲及び軍備を積入れるよし、此数は七八拾丁、拾式ポントより六拾八ポント迄之間にして、積込のためマカラより船ニ而送られると伝承せり、式拾ホント三拾ホントハ便宜次第西洋船を以送り船移せんと謀られり、兼而此一件は香港におゐて治定し、積入諸費として洋銀千式百ドルアルを払はれしよし、三十日<sup>亥九月八日</sup>午前マカラよりカムシンムー港江着岸せしが、スコットラント船投錨しをりし也、以前は李論生国旗を建しが、今は亜米利加国旗を立ありしを見請、実に驚駭せり、スコットラ

ント船に繋れ四艘之端船は委く風に向ふて逃去んとせし故、老ツ之弾丸を炮発せしか帆を下け碇船せり、其折左之大砲并軍備積請け居るを頭発せり、

一左ニ記す如くスコットラント船之船長士官江告知せり

一千八百六十三年十月廿日<sup>亥九月八日</sup>スコットラント船は

香港にある亜米利加官吏館におゐて、ワルシンデレミ氏より全權に任したる証書を請け、上海滞在のエトワルトキニンング公氏江壳渡し、香港ニ而合衆国官吏よりの出港証文ハ十月廿二日<sup>亥九月十日</sup>之日付なり、船

長ガルテイネルの告知には式百拾八ポント之大砲及び軍備を積込、長崎港江向け開帆のよし也、此告知ハ実体なるよふ見へしがとも、此拾八ポントは砲術心得之もの製作結構なるか故、広太にして重く有るとなり、支那婦人三人を船老艘毎に残し置、亦三人の支那人を老艘之空船に残し置けり、何等を吟味せんがため、大炮積入方ニ付面倒あるや了解あらざるよし、既に積入ある所の拾八ホント之大砲見分之儀を乞しが、大炮檢

番する権柄あらば免許すべしと答へり、暫ありて亦三

艘之船スコットラント船脇に乗進み、大砲積入を始め

り、最初引揚しはタルクリン<sup>名</sup>人<sup>名</sup>之大砲なり、引続き今

早天大砲積込あり、速ニ開帆之用意整へるべし、

船に積乗せありし大砲数尺目錄

第一之船

一英吉利大砲壱挺

砲穴八インチ

尻 式拾五インチ

口 十七インチ

長サ九フット拾一インチ

一亜米利加大砲壱挺

砲穴拾インチ

尻 二十七インチ

口 拾四インチ

長サ七フット拾一インチ

一英吉利<sup>不詳</sup>

砲穴六インチ

口 拾式インチ

長サ七フット十一インチ

第三式は空船

第三

一空彈 凡百五拾

一亜米利加大砲壱挺

砲穴拾インチ

尻 式拾七インチ

口 拾四インチ

長サ七フット拾壱インチ

第四

一亜米利加<sup>不詳</sup>大砲壱挺

砲穴八インチ

尻 式十七インチ

口 拾四インチ

長サ九フット八インチ

一亜米利加大砲壱挺

砲穴九インチ

尻 式十七インチ

口 拾四インチ

長サ九フット拾壱インチ

一英吉利大砲考擬 砲穴五インチ

口 拾式インチ

尻 拾七インチ

長サ七フット五インチ

再白

前条を書記セし後伝聞するには、以前日本に趣きし

ハ別儀にあらず、雷管及軍備を鹿兒島ニ陸上せしよ

し、長崎港へ赴くとは虚言にして、此度も同所江向

開帆する事ハ明白なり、

此書翰ハ、英軍艦スコット舶乗組之者此評判を広

めんがため、新聞者に送る所之書面也、

十月廿一日

川原広太郎

冊子原寸 縦二〇・五糎

包紙原寸 縦二八・六糎

横二八・九糎 九枚

横四二・三糎

奏 近衛忠熙忠房両卿ヨリ島津三郎殿へ

二本松邸へ訪問ノ件

(包紙ウラ書②) 内密々

島津三郎殿

几下

忠熙  
忠房

(朱紙三ツ同ジ)

□

□

(包紙ウラ書①) 島津三郎殿

几下

忠熙  
忠房

緘 亥十一月

(封紙ウラ書) 島津三郎殿

緘

(墨引)

忠熙  
忠房

吳々御手輕ク々希度、御手重クハ御断申度存候事

弥御勇健珍重之至ニ存候、抑明烏は相願休日ニ相成事故

未刻頃ニ一寸々其御方へ兩人推參仕候、併誠之微行、

今出川通穴門より歩行ニ而、人少ニ而可參入候、側之者

四五輩計残し置、其余ハ供掃リニ致候積リニ候、決而々

御手軽ク御扱御頼申度候、御手重ク御取扱ニ而ハ甚々迷惑之事ニ候、吳々臨期之事故、決而〳〵御手軽ク御扱御頼申入度候、吳々御手重キ御扱ハ、分而〳〵御断申度候、何も右而已一寸〳〵申入度如此候也、

霜月五日

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三六号 文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一八・二種 包紙原寸 ①縦二七・五種 横三九・三種  
横 七〇種 ②縦三〇・四種 横 四二種

芝 大坂小松帯刀ヨリ京都島津主殿伊集院

平治へ

一橋慶喜着坂有無ノ件

〔包紙ウツ書〕  
一京

島津主殿殿

伊集院平治殿

大坂  
小松帯刀

拙者事一昨三日宇和島侯御旅館江相勤候而、暮時分伏見

〔伊達宗徳〕

江致着候処、船手当等急速出来かね候付、一泊ニ而未明乗船いたし候得共、向風故漸々暮時分着坂、直ニ一橋様御左右御留守居を以爲相伺候処、しかと不相分候付、只今迄も内々為聞繕候処、未だ御着坂無之、来ル十日頃

御着坂之御様子と被相伺、暫シ御間茂有之義ニ候間、直様帰京之含ニ候処、御金繰等之義、彼是御留守居江相達置候義も有之候間、精々今日中相仕舞、明六日川登いたし帰京可申候間、以御都合達

御内聴候様宜被御取計置可給候、此段申越候、以上、

十一月五日

小松帯刀

大坂より

島津主殿殿

伊集院平治殿

文書原寸 縦 一四・三種 包紙原寸 縦二八・六種  
横 一四七・二種 横 四一・一種

○六 償金問題ニ付日本貿易新聞記事

亥 中山次左衛門ヨリ小松帯刀へ

貞姫上洛ノ件

〔包紙ウツ書〕  
「帯刀様

中山次左衛門

平和

苗代川より

今八日

御発興ニ付、急飛脚被差立候間、奉啓上候、先以

三郎様益御幾嫌克被遊御座、恐悅御義奉存候、於爰許

太守様益御幾嫌克、御惣容様ニも御安全、然は今日辰刻

貞姫様御発興、夕方苗代川江 御着、明九日向田御泊之

御賦ニ御座候、其以後より藤井承知仕候通、御日限無相

違相運、重畳誠以恐悅御義奉存候、将又 御手前様ニも

弥以御勇健御奉職、旁御周旋之御様子、恐賀之至奉存候、

扱段々噂可申上件々も御座候へ共、万事御直と、態と其

条々ハ載紙上不申候、御発興御当日より、万端御都合よ

ろしく、殊更天氣も好、今形ニ而ハ早目之

御京着と奉勘考事ニ御座候、然は其御元万事 御都合向  
之義ハ、何分ニも宜敷御指揮之程奉願候、此等之趣甚乍

恐被達

高聴候御都合ハ、偏ニ御頼奉申上候、誠恐誠恐謹言、

十一月八日

苗代川より

中山次左衛門

帯刀様

尊下

文書原寸 縦一六・五種 包紙原寸 縦 二九種

横 一六三種

横 四二・八種

三三 久光公ノ筑前侯尹宮近衛家御訪問道筋

御道筋

御出口表御門、鎗之図子、今出川通、室町通、中立売筑

前様御屋敷、

右御屋敷より中立売通、室町通、下立売通

下立売御門内

尹宮様

右 宮様より御旧地前西院参町新在家公卿御門前通

近衛様

右 御殿より乾御門、鑓之函子、表御門

御出口之通、

御帰館、

以上、

文書原寸 縦一三・八種 横五六・九種

三 藤井良藏ヨリ小松帯刀へ

貞姫上洛ノ件

(包紙ウツ書)  
「帯刀様

御直披

藤井良藏

全体之御都合は中山より被申上候ニ付、私よりハ別  
段不申上候、

一御内婚一条は、大概運相付申候へ共、最早当年いか程  
之日数も無御座候へハ、とても冬内ニは御無理ニ御座  
候欤、来春二三月迄之御延引は、偏ニ御猶予奉願具候

様との事ニ御座候、尚無程御直ニ細々申上候様可仕候、

一宮ノ城一条茂至極御宜敷向ニ御座候得共、是以何ヲ運

候間合も無御座、尤喜入家とうく

御発駕迄御帰り無御座、私御温泉場迄罷出申候而、篤

と毎事御依頼申上置申候而、自跡御都合為御知被下処

ニ御談申上置申候、左候様思召被為下度奉願候、

一金比羅社江はいよく

御参詣被遊候筋ニ御決定相成申候、私事前後始而之

御供、何も彼も中山氏江すかり申候而相濟、心配此事

ニ御座候、悪筆之上差急キ、何も恐懼至極奉存候、偏

ニ御海恕奉願候、以上、

十一月九日

藤井良藏

帯刀様

御直

文書原寸 縦 一四・四種 包紙原寸 縦二八・八種  
横二〇五・二種 横四二・九種

三七 京都岡崎調練場ニ於ケル大砲試射届書

七七三ノ一

一十五擗長忽砲 拾五発

伏見江出張人数

一十二擗小船忽砲 拾発

大目付

一右同携臼砲 拾発

永井主水正殿

内五発焚燒弾

御目付

一三封度野戰砲 拾発

戸川鉦三郎殿

外ニ火矢三本

小出五郎左衛門殿

右之通、来ル十七日十八日、天氣次第於調練場打試仕

其外

候間、此段御届申上候、以上、

御徒目付等

十一月十日

御軍賦役

(年代ハ元治元年カ)

文書原寸 縦一四・七種 横三一・三種

文書原寸 縦一六・二種 横二三・六種

三七 小松帯刀ヨリ在藩ノ桂右衛門ヘ 合三通

七七三ノ二

〔包紙ウツ書〕  
一桂右衛門様

小松帯刀

緘 眞下要詞

霜月十一日発ス  
鹿城ニ而從京都

去八月十八日脱走、全奸計之虚説専流言之由、右等之儀  
尔来決而不信用、妄説様一同可相心得御沙汰候事、

右十一月二日御公達相達候事、

文書原寸 縦一六・二種 横二七種

七三ノ三

追而海江田も未帰京不致、夷情之程も相分不申、併不日

ニ罷帰候半と相待居申候、岩下も上京いたし居候得共、

当所御用向も相仕舞、今日帰府被仰付候、左候而関東御

用相仕廻、当地江罷登候様申談置候間、其辺之所も可被

致言上候、旁細事ハ幸五郎便ニ申上候、

文書原寸 縦一六・二種 包紙原寸 縦二八・二種  
横 二八種 横四〇・七種

〇三區 久光公へノ宸翰

三三 伊達伊予守より島津久光公へ

二本松邸へ来談ノ件

〔封筒〕 島三郎様

侍史

伊伊予守

〔封筒ウラ〕

ノ

ノ

寒力栗烈、弥御清穆奉大賀候、扱明朝五半過頃ニ参館、

得御面晤度、御否奉伺候、尤尔後〔松平容保〕松肥後方へ参候間、昼

御湯付御所望、酒ハ一切明日ハ御断申上候、一橋にも昨

日ハ浪華入城と相察候、帯刀にも一兩日中帰京と存居申

候、万々拜眉候、恐々闍筆、

霜月十七日

伊予守

三郎様

侍史

尚後文不贅、已上、

文書原寸 縦一六・八種 封筒原寸 縦一八・一種  
横三八・九種 横四・八種

三三 近衛忠熙卿ヨリ島津三郎殿へ

勅問ニ対スル久光公奉答書ノ件

〔包紙ウラ書〕 島津和泉とのへ

翠山

忠房

ノ

ノ

〔封紙ウラ書〕

三郎殿

内々御報

忠熙

〔朱〕  
〔封〕

御書中何も忝候、追日寒威増長、一兩日は別而難凌候、

愈御平安珍重存候、誠ニ一昨烏は御出給、御談話申承忝

存候、今朝ハ猪太郎江御伝言、何も御尤ニ承候、扱極密

之

宸翰御請書御草稿御出来ニ付、密ニ為見給、篤ト拝見候、

遂ニ御尤ニ存候事、尤何之所存も無之候、御闕字等之処

も是ニ而至極ニ存候、尚御請書御献上之様ニと存候、秘

門一条も御認至極ニ存候、其内熟考ニ而御請可申上

候、昨日言上致置候俣、御安心之様存候、何モ御報迄荒

々申入候也、

十一月十七日夜認

寒氣專御自愛之様存候也、

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一三九号  
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一五・一 横 包紙原寸 縦三〇・五

横九二・八 横四一・七

三三 伊達伊予守より島津三郎殿へ

京都薩摩邸ニ於ける饗宴

〔封筒〕  
「島三郎様」

侍史

伊伊予守

〔封筒ウラ〕  
封

凍雲醸雪候処、先以愈御清穆奉大賀候、扱昨日は緩々拝

謁、殊ニ何寄之御催見物、無余念累集之苦情払却、種々

御盛饗、深厚忝奉存候、加之豈料

尹宮奉始御来臨倍從、実ニ無御隔意被入御奥候御容子、

恭賀之至蒙御懇命、難有仕合奉存候、乍然大醉不敬、さ

ぞ〳〵御配慮被成候半、今朝ニ至弥恐悚多罪不能申上候

条、何分宜敷

宮御始御断奉希度、先は御礼海岳申上度、且謝大不敬之

罪候迄如此御座候、恐惶頓首、

霜月十九日

尚以実ニ昨夕ハ御不図大臣家御参会、御大悦之御様

子乍傍難有存上候、

皇武御合体之吉兆、大愉快奉恭悦候、尤具々泥酔御  
取持も不仕、背本意恐縮之至、御仁恕可被下候、御  
密話可申上事件も不及吐露候故、又々近日中参館可  
仕候、不備、

文書原寸 縦一六・九種 封筒原寸 縦一八・一種

横六三・一種 横 四・八種

三六 近衛忠熙忠房両卿より島津三郎殿へ

江戸城本丸焼失之件

(包紙ウツ書)

島津三郎殿  
几下

忠熙  
忠房

緘

(封紙ウツ書)

島津三郎殿  
几下  
大乱書御免

忠熙  
忠房

実々死人怪我人在之由、甚々懸念く之事ニ存候也

今日茂寒冷殊更ニ覚候、弥御勇猛珍重、尚承度存候、抑

昨烏は俄ニ推参、誠ニ面白く事深く喜悦候、昨夜も大

長座、大沈酔く、其許ニは嚙々御草臥之事と察し入候、  
扱関東本丸焼失之由、飛脚屋より申来候、誠ニ風聞故不  
慥候、定而実否慥ニ御承知ニ相成候事と存候間、承度存  
候、実々焼失杯ニ而ハ、又々上洛之障ニ茂可相成、深々  
懸念之事ニ候、御承知ニも候ハ、巨細承度存候、右已  
荒々如此候也、

十一月十九日夜

(本文書ハ「鹿児島史料 忠義公史料」第三卷第一四〇号  
文書下同文ナリ)

文書原寸 縦一六・三種 包紙原寸 縦二七・八種

横四四・九種 横 三九・二種

三六 高崎伊勢ヨリ小松帯刀へ

別啓申上候、

宮様

陽明様益御機嫌克被遊御座候半と恐賀至極奉存候、私義

明日方より横浜江さし越、其内ニは勝一条等相分可申、

其上発足之賦御座候間、少々は日数茂相延候得共、官方可然御取繕置被下度、伏而奉拝願候、諸彦江茂例之不勇ニ而何共不申遣候間、乍恐罷出候節、よろしく御伝声奉仰頼候、敬白、

十一月廿日

高崎伊勢(正風)

帯刀様

猶福山平太夫と申者、此節御国元江罷下候序ニ、同人従弟野村勘兵衛墓参等いたし度囁、私ニ立寄るも如何と存候間、何欵御用共有之間敷哉と申事御座候間、幸別紙あられし申上度と存候折柄ニ而、相託差上申候間、左様思召可被下候、

文書原寸 縦一五・三 横七七 種

六〇 伊達伊予守より島津三郎公へ

諸藩召しの件

(包紙ウツ書)  
「急用 御直披

(封紙ウツ書)  
「三郎様

内用

伊予守

愈御安栄奉大賀候、少々御外邪之由、為

朝野御保護奉専念候、昨夜於陽明御殿、帯刀へ御伝度諸藩被為召出之御約束、諸兄計ハ可然と奉申上候処、何分此御議論相起候ハ、根拠可有御座候、少々懸念も候間、今一応御談合仕度、仍而猪佐兩人之内御出し可被下候、恐惶頓首、

霜月念二

例文省略不乙、

文書原寸 縦一七・八 横一七・八 包紙原寸

横三九・七 種

縦二八・八 横三九・三 種

亥 將軍上洛ニ付道中準備令達

付勘定奉行根岸肥前守処罰ノ件

(端裏朱書)  
「壬戌」

十一月廿五日

學問奉行

本多伯耆守(正勝)

右御用相勤候様被仰付候、

右和泉守宅江家来呼、達之、  
(永野忠清)

御勘定奉行

根岸肥前守(新書)

名代 溝口八十五郎

此度御道為見分罷越候節、御趣意柄も乍相弁、無益之

手数相掛、下方為及難儀候次第、不束之事ニ候、依之差

扣被仰付、

右、今晚河内守宅おゐて申渡、大目付竹本甲斐守相越  
(正雅)

大目付

御目付江

諸道中筋御用荷物其外共、車相用候の御場所は車ニ而運

送不苦候、尤小形ニ補理、往来之妨不相成、道橋破損不

致様心を用引通し可申候、

右之趣、御料は御代官、私領は領主・地頭より可被相

触候、

右之通可被相触候、

十一月

右書付和泉守渡之、

十一月廿二日  
(文久二年乙)

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一七七号

文書ト同文ナリ〕

文書原守 縦一六・一横 横四四・三

亥 近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ

内勅奉答遅延ノ件

〔封筒〕  
島津三郎殿 内々

忠熙 几下

〔封筒ウラ、朱・紙ニツ同シ〕

〔封紙ウツ書〕

三郎殿内密

几下

忠潔

緘

日々寒威甚候、弥以御安康珍重存候、過日来少々御風邪之旨、寒氣之時分專御保養之様存候、抑過日之

御内勅御請之儀、御風邪ニ而少々延日之儀、御断申上置候得は、何も被

聞食候、御快方ニ候ハ、御待被遊候旨、

御沙汰ニ候、右之段一寸申入置候、何モ荒々如此候也、

霜月廿三日

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一四一号 文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一五・一横 封筒原寸 縦一五・七横

横 四九種

横 四・五種

六三 宸翰ニ対スル久光公ノ奉答書

攘夷其他八月十八日政変等

〔編纂朱書〕

〔癸亥冬 本書別ニアリ〕

宸翰拜戴被 仰付、不肖卑野之小臣恐懼之至ニ奉堪、難有謹而拜見仕候処、御趣意之件々只低頭感泣仕候

外無御座候、抑 公武聊御隔意被為在候哉ニ伝承仕、

臣子之身傍觀難仕、去春押而上 京仕、愚意献言周旋

仕候以來、当春時勢種々転換仕、被惱

宸襟候御事共、誠以奉恐入候次第御座候、且当夏も以

宸翰御趣意之条々拜承仕、暴論輩鎮静之儀、精々熟考

仕候得共、何分心より早速上京仕時節到来不仕苦心罷

在候処、其後弥増長仕、既ニ不容易形勢相及候処、〔松平容保〕肥後

守初莫大之尽力ヲ以、遂ニ八月十八日之一挙ニ相成、

聊被安

宸襟候御儀、実以 朝家之御高運と并躍仕候次第御座

候、然処今般又々 勅命承知仕候付上京仕、公武御実

意御一和候処、只管周旋仕候舍御座候処、不図も 宸

翰ヲ以 御依頼之 勅命、且御質問之件々拜承仕、不肖之小臣重疊之 天恩奉報謝候ニ無所、水火之中ヲモ不辭、周旋尽力仕度奉存候へ共、素より至愚短才之身御主意通奉行仕候義無覺束、赧慙仕候外無御座候、乍併微力之及候丈は相尽、聊ニ而も奉安

宸襟度含ニ御座候間、乍恐左様被思召被下度、九拜奉伏願候、

一攘夷之一件積年之 叡慮ニ被為在、度々被 仰出候得共、於幕府奉行不仕処より、下情大ニ乖戾仕、戊午之一変ト相成、其後桜田之一挙等、乍恐皆是天下之人心混乱之根元と奉存候、実ニ堂々タル 神州醜夷之汚辱ヲ受候は、有志之者誰欵切齒扼腕仕ラサランヤ、雖然如 勅諭、二百年來之泰平、武家も名有て実無之形勢罷成、殊ニ外夷方今之戰爭は、  
皇国古來之戰爭とは雲泥之相違ニ而、其辺別而難行届、於幕府も無拋詛合とは奉存候、乍併只管防禦ニ心ヲ用ひ、指揮十分行届候得は、不日して大功ヲ 奏候管御

座候処、何分不行届之処より、終ニ奉戾 叡慮、人心モ瓦解之模様と罷成、痛恨之次第奉存候、就而今般大樹上洛、一橋初諸大名会合之上は、右之処精々談判仕、武備充実、心底相決候様周旋仕候含ニ御座候間、乍恐左様被聞食被下度、奉伏願候、尤夷情等之義は、先日(近衛忠房)家来より前関白江差出置候一書御座候間、右之趣意乍恐 御熟覽被遊被下度、偏ニ奉伏願候、小臣急速之攘夷ヲ相好不申候義は、去秋書取ヲ以奉言上候通、迎も方今之趣ニ而は一度其端相開候得は、万民快樂之叡慮ニモ不被為叶、皇国億兆之人民是が為ニ塗炭之苦ヲ受、乍恐堂々タル神州醜夷之戎馬ニ被穢候様罷成候而は、何共恐入候次第御座候、此方江武備充実仕候得は、彼は不戦して畏服仕は案中と奉存候、此義は小臣乍過言盟而御受合可奉申上候、全体当時ノ夷人は、古來之蒙古新羅等之類ニ無御座、世界全国不至処無ラシムルノ主意ニ而、

皇国而已鎖国難被成置形勢御座候、尤方今ニ而は我ニ

武備乏ク、彼ニ武備充実いたし候得は、開鎖之權は彼カ掌握ニ帰候故、此方より鎖港相達候而も難被行次第ニ御座候、此權我歸し候得は彼自然畏怖ヲ懷キ可申、此權ノ我ニ歸スルト申ハ、武備充実之外ニ策略無御座候、乍恐其刃之处深く、御熟慮被遊被下度、九拜奉懇願候、一大政大樹ニ御委任之御趣意、乍恐御至当之御事と奉存候、兎角中古武將天下ノ權ヲ執候より以來、万民皆其勢ニ從ヒ居候得は、方今俄ニ王政ニ御復古は迎も六ヶ數御義と奉存候、殊ニ外夷輕蔑之時世、内政混乱仕候而は不相濟、第一内ヲ齊ヘ候而社、外夷之御所置も可相成、修身齊家治国平天下之次第、乍恐御勘考奉希上候、雖然大樹御委任被仰出候上、前文申上候武備充実之指揮兎角不行届相成候欵、朝廷尊崇之道闕如仕候義共御座候ハ、其節社顯然と罪ヲ御正被為在度義と奉存候、

一堂上暴論過激之説ニ成候云々、乍恐是以御至当之御趣意と奉存候間、猶又以來御取締向敵重行届候様、堂上

方は勿論武臣へも談判仕可申候、尤此義は小臣去春以來前闕白父子へは再三獻言仕置候得共、其節迄は迎も難被行勢御座候故、致方無御座候得共、方今ニ而は是非左様無御座候而は大難之基と奉存候、

一 八月十八日已來御評義之次第、逐一拜承、万機ニ觀念ヲ被為用候御事、啼泣感拜之外無御座候、尹宮ヲ初前(朝彦親王)

闕白等決而異義有之間數奉存候間、猶又其刃之義は時々談判仕置可申候間、被安、宸襟候様、乍恐奉伏願候、

一 十八日一条、叡慮之御事ニ而候処、非真実之叡旨、

尹宮会藩又は右府以下之所作之様風説仕候義は、長州且浮浪暴論輩之人心ヲ疑惑セシムル造意ニ御座候間、

乍恐、御配慮不被為在様奉存候、於小臣寸分も奉疑候心底無御座候間、被安、宸襟候様奉伏望候、

一 十八日粗落着候得共云々、此義至當時響は有之間數奉存候、併若右様之説申立候堂上も御座候ハ、再三

説得可仕と奉存候、

一 先年来虚説布告云々、此義誠以恐入奉拝承候、尔来右

様之義は決而有之間敷候得共、猶又列藩江御布告被為  
在候御事は御至当と奉存候、乍併は大樹上洛、諸大  
名会合之上、一同参 内被仰出、於 御前 御直達被  
為在候ハ、誰欵感佩拜承不仕者も無之筈と愚考仕申  
候、

一 正親町少将(公意)云々、此義尚又熟考仕、尹宮・前関白等江

も談判可仕、尤武臣之面々江も評義被仰付度奉存候、

一 関白辞表之事御至当之御義奉存候、此際退職無御座候

而、列藩之疑惑不少欵と愚考仕申候、

一 八月十八日脱走之実美(三条)以下七人之事、自

朝議之御定策も可被為在候得共、実以不忠無限事御座

候間、尚又熟考、諸藩談合仕可申奉存候、

一元同輩ニ而不脱走之輩之事、御趣意御至当之御事と奉

拜承候、中ニは随分改心仕候人も可有之奉存候間、尚

又熟考仕、尹宮等申談説得之手段仕可申と奉存候、

一 姉小路一件云々、実以恐入奉拜承候、家来暴悪之御疑

ヲ蒙リ、何共無申訳次第奉存候、併一藩惣而奉蒙御疑

只々苦心仕罷在申候処、十八日後御寛有之御沙汰ヲ奉

拜承、幾重ニも奉恐入候次第ニ御座候、夫故上京之

勅命モ抑留ニ相成候次第、何共恐縮之至奉存候、

一 列藩布告浮浪取扱之義、委細奉拜承候、後偽ヲ不成様

との御事、逐一御尤之御義、尚勘考取締行届候様、談

合仕可申候、其外御依頼被仰下候件々、徹肺腑恐入奉

拜承候、

一 深心配候は、是迄ニモ兎角疑念偏執云々、此義何共奉

恐入候得共、御服心之人材能々御觀察被遊度御事と奉

存候、遠小人親賢臣ト申、聖語篤と御熟考被遊度、若

御取違之御所置共被為在候而は、別而恐入奉存候事、

一 肥後守江此 宸翰同様被成下度トノ 叡慮、実以難有

御趣意ニは御座候得共、此義先御猶予被遊度奉存候、

小臣江も度々様御秘密(密)之 勅書拜戴被仰付候而は、

第一尹宮・前関白等之処、別而恐入奉存候間、乍恐以

来は彼兩人丈江は御談合被為在候而拜戴被仰付度奉存

候、愚意不悪御聞濟被遊被下度、九拜奉伏願候、

一外ニ從來御苦心之御事被為在候間、御依頼之節は周旋

右入牢

仕候様、兼而被 仰付候旨、委細奉拝承候、乍恐御訊

執頭

合何共承知不仕候得は、如何様トモ難申上御座候間、

一

正応坊

御趣意承知仕候ハ、其節何分可奉申上候、

右揚屋

右は不容易御秘蜜之

奉行役

宸翰拝戴被 仰付候ニ付、不顧至愚之身、忘卑賤奉犯

一

義俊坊

忌諱、所存献言仕候、何卒聊ニ而も御採用相成候義被

右同

為在候得は、別而難有仕合奉存候、誠惶誠恐頓首敬白、

一

良叶坊(什之)

文書原寸 縦一五・八糎 横一二六・三糎

右入牢

近習役

○六四 久光公ノ奉答書

一

城島主税

奉行役

六五 土持平八小倉ヨリノ報告書

一

橋本坊

英彦山僧徒処分ノ件

一

宗観坊

彦山執頭

一

来米

政所坊事

一

玄清

不動院

目明し

右七人評定所預

勘市

又兵衛

淨円坊

右為廻檀拔出、於肥後相捕昨日列越候、

教観坊

裕玉坊

水口坊

中之坊

敵藩坊

右五人、長州江差越居、且此内より名前不相分候得

共、京都江紛入候風説有之由、

右通御座候、以上、

亥十一月廿九日

土持平八

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一二八号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・五種 横六三・四種

英彦山一件  
土持平八報告書

英彦山一件

此表動静旁致探索不寄何事、時々御国許江申上候様致承知、左候而違變到来御見合相成儀共承得差急候節、同案を以其御方江差向可申上旨、御裁許掛最上善之助より致承達、承合候形行左ニ申上候、

一豊前英彦山江浪士式三拾人相見得、将又当座主院権僧正始山門之宗徒等長州江交を結候聞得等有之、小倉中家老二木求馬、番頭青木庄七、物頭平林仁右衛門已下士分凡三百人、当月初彦山江差向、執頭役政所坊・正応坊・儀俊坊三人召捕城下江曳出、銘々糺明有之、政所坊・儀俊坊申出候は、長州浪士江致加担候儀共一切無之段申募、正応坊申分ニは、右体致同意候而是変革之訳合一山之後難差見得、決而不宜段申断、尤一同致血判候得共、私式連判不相加、追而形行寺社奉行江及内訴存含之処召捕、付而は直様不差置可致言上候処、無其儀今更無調法之段申出、右糸口を以入もつれ筋段

々糺方相成、(成田坊)宇都之宮貞・良野仕良・佐竹織部・柏木

民部・水口寛次

(水口坊)・宇都之宮堯

(備本坊)・常照主水

(教親坊)・藤山衛門

(中之坊)

阿部豪一等九人、変名を以一味致連判候儀共及露頭、

其後追々相捕、当月廿二日使番大塚所右衛門・物頭平

林仁右衛門以下五拾人又々登山、座主院権僧正并右簾

中母堂付女中・側医師・役僧・家来・小者等都合式拾

人余山門より曳出、御本陣村上銀右衛門方江召留、番

頭諸士式拾人昼夜致立番、寺社奉行より致対談候処、

座主院儀は隠謀之次第全不存段申出候由、右事発は当

八月中旬頃長州藩中山田幹太郎・椎野熊太郎兩人彦山

江差越、此節正親町少将殿より

勅命ニ依而夷賊致私攘候付、勤王合体可致哉否、若同

意不致候ば一山悉焼払死刑ニ可取行、併無二心致同意

候は長州より事仕済、天下平均之上、知行拾万石寄付

可致、左候而武器為調達方、金三千兩位は則可差贈、

強而申進候処より、無余儀勤王攘夷無疑心条神文ニ表

し、致血判候段及白状、政所坊等外々為取締致申分者

も有之、未糺明約兼候形ニ而、僧徒六人脱衣ニ而揚屋

牢込等相成、夜白糺方有之由、左候て奉行格浄円坊事、

先月末頃より為廻禮檀後諸所江差越、徒党之張本と相

見得、段々不宜聞得等有之、先達而盜賊方三四人同十

九日頃より出立、諸所足配相繋、於肥後ニ召捕昨夜列

帰、其外段々防長江四五人差越居、右人数之内より京

都江同様紛入候風説有之、右一卷付而は一山座主院迄

も招呼相成程之事ニ而、一通ならぬ一変之訳合候半、

右次第長州江相洩候は不意ニ人数差向候欤、何様致到

来候儀も難計人氣ニ而、台場等江大炮玉棄迄も相備、

諸士昼夜出張、且客屋江も凡三百人余交代を以詰切、

役々始商儀区々之形ニ相見得申候、

一当八月彦山江長州より差越候節、当

将軍始奸賊之幕役共右加担之大小名等、調伏之法相行

候聞得有之、其旨糺相成候処、曾而左様之所業無之、

併天下太平国家安全夷賊降伏之法取行、右祈禱料且武

器用金三千兩可差贈段承候儀は有之、然共右之金子未

相請取段申募候由、乍然下々論評ニは調伏取行候儀共  
專申触、突留証拠は無之形ニ相見得、然ニ段々逃去候  
者も有之、自然相捕糺相約候上、追而分明可致哉、差  
当風評迄ニ而一々碎兼候儀有之、猶又手を付置申候間、  
追々相分次第何分可申上候、

一右付一山之僧徒相捕牢込等相成、又は当分他所江拔出  
候者共名前別紙相添差上申候、

一諸国動靜探索等付而は大久保一藏より致承知、是迄時  
々同人江申上越候得共、当分関東出府之哉ニ致伝承、  
別段不申越候間、可然御聞取被下度、為念此儀も申上  
置候、右通御座候、以上、

亥  
十一月廿九日

長州下之關詰  
唐物締横目  
土持平八

奥掛  
書役勤

長野彦七殿

岩切八兵衛殿

東郷源左衛門殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二二七号  
文書ト同文ナリ)  
文書原寸 縦一六・三釐 横四三・六釐

六七 広島ニ於テ芸藩士岩国使者トノ応対筆記  
毛利大膳大夫上洛ノ件其他

岩国藩中河上莊吾・笠井次郎右衛門・小国保介

此度罷越応対之頭書

一当今之形勢ニ付小藩之事故、別而御因厚く仕度、何角  
御依頼申ニ罷出候事、

本文先方申聞候趣意ハ、御当家様之儀ハ、是迄格  
別之御因合に仕、誠ニ尔来御懇命ヲ蒙り候儀ニ御座  
候へ共、方今之時勢ニ付而ハ、尚又御因厚御頼申上  
度、当度連中共打揃罷出候儀ニ御座候、斯ル切迫之  
時ニ押移り候而ハ、小国ハ御大国之御方へ御縋り申  
候外ハ無御座、何卒内外共御打解被下、何角無御用  
捨被仰聞候様仕度、既ニ集会之儀も近年此御方様よ

り御断も御座候而、隔年ニ御出会仕候得共、以来何卒前々之通年々之御集会ニ仕度、尤御互ニ御饗応振等之儀ハ、如何共作略仕、御双方共失却之儀ハ相省キ申度、明春ハ此御方様之御引受順年ニ付、其節御手本御差出可被下旨申聞候事、

一 (毛利慶親・定広)  
大膳大夫父子主人監物ヲ山口表江呼出し候付罷出候事

本文之儀三人申候趣意御承知も可被下、本家方近年京師之向不宜、吾人之飛脚ニ而も京師へハ入レ不申、就而ハ弊藩も同様之事ニて、此先キ如何成行候もの欤、素より長州一国独立ハ相成不申、甚心細御座候、先達而大膳大夫父子より山口表へ監物ヲ呼寄、近頃京師不首尾之様子、且ハ政事向等一体之事相断候付監物よりも存志申聞候処、父子も同意いたし候由ニ御座候へ共、執政職益田右衛門介初メ其外ニ今四人(鬼)程兎角暴激之計ひいたし、其儀差押度候得共、父子共小門、六ヶ敷場も有之、甚取扱兼候趣ニて落涙いたし相断候由ニ付、監物より執政職之者へ何角及示

談候処、因循之姑息之と申シ、所詮取上ケ不申、却而疑惑いたし、あの様之者ハ打捨よ杯と申ス族も有之候付、申ス事逆も取用ひ申間敷永居ハ無用と存、八日滞留罷帰候事、

一 御当方様へ監物より使者差上度候得共、御引上可被下哉之事、

本文申候趣意御同意伺ニ人差上度候へ共、近年山口表より弊藩江間謀差出居候付、何故ニ広島へ人差出候欤と不審いたし候儀ハ見へ透候付、考合仕候処、私共罷越候へハ、是ハ以前より御境筋之儀ニ付、御因合も有之、御懇和中之事故、何も廉立不申、たとへ不審仕候共、其分ニ相答候積リニ御座候、使者御引上被下候儀御許容被成下候へハ、本家方之模様ヲ見合せ、当年之内差上候やら、又ハ明春差上候欤、其所ハ相分り不申候へ共、夫等ハ御合  
御上向之所御執成ニ預り度、何様本家方前ニも御咄申候通、当時全く孤立と相成り、諸侯方之御悪ヲ受

可申、ケ様ニ申上レハ本家方ヲ悪様ニ申成候と御氣取も可被下候へ共、素り本家ニ随從仕候監物ニ御座候得ハ、本家不立行時ハ此方も立行不申訳ニ御座候間、悪しかれと存候儀ニハ無御座ナレ共、余りも暴ナル取計仕候得ハ、又アノ方之申立候通ニも参り不申、一向小肌之ゆるされぬ場も御座候而、夫等之処ニおゐてハ役人共も実ニ痛却仕候間、万々御推察被下、御憐ミ被思召、たとへ如何様之事タリ共、御心付之儀ハ御腹藏なく被仰聞、ケ様可致、左様可致と、何角御内々御指押(彌カ)ニ預申度、先ツ差向使者御引上被下候様、御鼻息程之御内答承り候得ハ、監物初メ一同安心仕候事、

一 関戸江人数差出申度事、

本文申候趣意兼而御承知被下候通、関戸表へ本家より人数差出候儀、小瀬村江差出度と申聞候へ共、何も国境へ人差出候ニハ及び申間敷、左様いたし候而

ハ

御当様江対し失敬之段申聞候へ共、聞入レ不申、色々申聞候処ニ而、小瀬村より式里手前関戸へ差出是も引取候而可然と存、監物儀右人数頭取、平賀左ト申ス者へ、当関戸之事ハ岩国より如何様共計ひ可申ニ付、人数被引取候様ニ段々及直談引取せ、夫成ニ仕候心組ニ御座候処、其後弊藩より人差出方本家方より度々切磋いたし居ル処、何共返答難出来様相成候付、無扨此先家来三四人差出、幕家と打せ出張之体ヲ見せ置候へハ、本家方江之申分も相立申候間、不悪御氣取被下候様、兼而及御噂置申候事、

一 御当様と筑前様(黒田齊博)ハ以前より御因厚仕候付、筑前様江も使者差上申度含、兼而御座候事、

本文之趣意、当今之形勢ニ付、監物より使者差立、何角御頼申置度含ニ御座候得共、本家方之処如何可有御座哉と差扣居候折柄、先達而下野守様御登り有(黒田慶賢)之例防州領ハ御昼休ニ御座候処、当度ハ久賀駅関戸江御泊りニ付、以前宿へ使者差上、監物御眠(晩)近仕度

段御伺申候処、速ニ御許容被下候付、関戸駛へ罷出御逢も被下、大慶仕候、然ル処、本家方より果而人

差越、何故ニ右様之儀有之哉、何ヲ申タカト入々切磋いたし、素より異心有之様ハ無御座候処、色々疑

念ニ預り、甚以閉口仕候、御承知も可被下黒田様ハ、(黒田孝高)如水公より監物先祖由緒も有之、御代々厚御因ミ申

シ、本家方ニも其儀ハ兼而御承知ニ御座候処、右之様疑念仕候段、甚以迷惑仕候事、

一 監物二男本家方之養ニいたし度杯申越候事、

本文之趣当監物ハ生質虚弱ニ有之、嫡子も同様ニ御座候へ共、二男ハ丈夫ニ御座候間、頼ニ存居候処、

本家方より養ニ致度趣申越、素より本家之事故、論ハ無御座候得共、監物跡継之事被案候付、一応之請

答仕置、判断中ニ御座候処承り候へハ、山口表ニ而ハ右二男養分ニ内約して相济候段下方へ触差出し候

由、誠ニ案外之儀、夫と申スも察所、右等之事ニて岩国は当時本家方と同腹一体ニ相成居候杯と見せ懸

ケ候哉ニも被相考、甚迷惑仕候、諸事右様魚暴之儀御座候段、万々御推察可被下候事、

一 長州領大島郡より人夫子人差出候へ共、百姓共尊藩ニ而ハ鉄炮所持之者御しらへ、玉葉入用ナレハ御下渡し、

尚又尊藩沖合ニテ三ツ引ニ宝珠之船印差立候へハ、寺院之早鐘ヲ撞候趣相尋候事、

本文之趣人夫ハ長州様近々御上京、其外之儀も右ニ付御軍備共ニ御座候哉、此元ニ而ハ先達而より風聞

いたし候段、何となく相尋候処、次郎右衛門保介答ニ節角其儀ハ巷説区々ニ申触し候へ共、何社取留メ

候儀ハ無御座、夫ニ付先達而本家方より使者差越候節、介添之者大ニ酒ニ給酔ひ申候間、取持之者共二

三人入代り相手ニ罷出、段々酒ヲ進メ、右等之様子本家方之内沙汰相嘶せ可申存、追々相尋申候処、介

添之者申聞候ハ、御上京も早御治定之様子ニて、日限も近日之内、当度ハ先ツ一番手長府、一番ニ徳山、

三番清末、四番ニ大膳大夫、殿りハ岩国と申ス事ニ

て、右ハ三家の方々へも達ニ相成候趣ニ候なと、申

聞候故、未タ当方ニ而ハ夢ニも存不申、始メテ承り、

案内之事ニ候と挨拶仕候処、夫レハ如何之事と大ニ

当惑いたし候儀ニ御座候、三家之処も承合候へ共、

素よりあの方ニも一円ニ承知不仕趣ニ御座候、彼是

右等之訳合ニテ一向何も取締り候事ハ無御座、何分

鳥渡御考合被下候而も、差知し候事ハ先刻も御咄し

申候通り、老人之飛脚さへ京師へハ入レ不申事ニ押

移候付、大膳大夫いかニ仕候而も此場合上京ハ難出

来、たとへ押而登り候共、諸大名様御警衛も有之、

上京之儀ハ諸藩より御執成申上と被考申候茂、三つ

引船印ハ此方之印ニ御座候へ共、宝珠之儀ハ承知不

仕、ケ様手筈事ハ夷船防禦ニ付、兼而是迄触示し置

候事ハ、何レも御同様ニ御座候事、

一七卿長州ニ被成御座候事、

本文之趣相尋申候処、如何様七卿ハ長州三田尻ニ被

成御座、尤沢主水正様ニハ、先達而脱走被成、夫へ

付添奇兵隊の内脱出申候趣ニ承り候事、

右之外、差而廉立承り候事ハ無御座候、以上、

十一月

山田三太

深町三郎左衛門

文書原寸 縦一三・七糎 横三七・五糎

亥ハ 朝廷ヨリ幕府へノ御沙汰書

二通

久光公京都守護職任命ノ件及茂久公参観猶子ノ件

(包紙)

七八八ノ一

別紙之通被

仰出候ニ付而は、島津三郎儀早々上京被

仰下候間、父子一時発途ニ相成候而は難渋ニも可有之候

故、修理大夫出府之儀、暫猶予有之候様被遊度

思召候事、

十一月

文書原寸 縦一七・五種 横四三・三種

七八ノ二

松平肥後守儀、  
(容俵)

京都守護職被申付御警衛筋茂行届

御満足被

思召候、然処一藩奉職ニ而は人心居合茂如何可有之哉

御懸念被

思召候、依之島津三郎儀、今般

公武御一和之基本を致周旋、為

皇国尽忠誠候者ニ而、此末

公武之御為、別而可然被

思召、且同人儀家督ニ茂無之候得は、京師守護茂專一

ニ可相調候儀と被

思召候ニ付、右旁別段之

叡慮を以断然守護職被

仰出度、於大樹家茂猶又

叡慮貫徹候様、肥後守申談相動候様被申渡度

御沙汰候事、

十一月

文書原寸 縦一七・六種 包紙原寸 縦二七・二種

横八〇・八種

横三八・一種

○天、山内容堂公ヨリ島津久光公へ

薩藩ノ尽力ヲ求ム

五〇 久光公ヨリ板倉伊賀守へ

將軍ノ上洛ヲ促ス

七九〇ノ一

〔編纂朱書〕  
「癸亥十二月 板倉江遣ス状」

未拝尊顔候得共、一書進呈仕候、先以寒冷之砌、愈御堅  
剛可被成御勤仕奉大賀候、然は

方今天下之形勢、危急存亡之秋ニ至り候義は、一々論ス  
ルニ不遑、御同苦奉存候、乍併去ル八月十八日

朝廷御発動后暴論退散、忝も

叡慮

御卓越、左右輔弼之 公卿方 遵奉之 御忠誠、確乎無  
御動搖、以此大機會 官武 御合体、

皇国挽回之道被相立度ト之 御持論、随而滞京之列藩聊  
不生異論、為天下尽力此一挙ト衆評内決いたし候、就而

大樹公御上洛被

仰出候上は、神速

御発途不被為 在候而は

皇国ノ御為ハ勿論、幕府之御為 御失策ト奉存候間、

既ニ以内使愚意建言仕、最早

廟堂之明裁を以 御内定之段ハ奉伺候得共、今般

御城御焼失ニ付而は、万一是か為ニ 御猶予被為 在候

様ニ而は失望之義ト、於

朝廷別而 御不安心被 思召、小臣等ニ至り駭然、且歎

息之仕合ニ御座候、然は

尊君方之御配慮不一方、猶断然之御周旋可有之奉深察候

得共、実ニ挽回之成否は

御上洛之寛急遲速ニ依而其機之分ル、所ト見据、昼夜不

安寢食候間、伏願ハ

御当地之形勢事情深重御熟考有之、是非々々御委任被成

区々之評説ニ御顧念なく、以

御英断 御発興被為 在候様御尽力、偏ニ〳〵所仰候、

自然御明察之前トハ奉存候得共、四方之情態篤ト熟考仕

候処、即今人心洶々物議騒然、各国機ヲ見合候模様も有

之、懸而御疑惑之廉も可有之候得共、兎角

御上洛之上、

御一和之道被相行、今一層 幕府之 幕府たる正議之御

威權相加上、被為奉

叡旨、下為万民天下之耳目を令一新候御処置無之候而ハ

愈以四分五裂之体ニ陥り候は必然之義ト憂慮仕候間、乍

不肖

朝廷 幕府之御為抛身命必死之周旋仕度決心罷在候、再

三之誓言、思召之程如何ト、退而は恐縮仕候得共、前条

不可止之至情、且一己之憶見ニを以言上之詛ニ無之、滯京之列藩一定之論ニ候間、旁御内察被成下、無御猶予御断決被為在度奉至願候、此ニ至り候而は各方之御任ヲ責候外無之候付、小臣ニ於而も黙止罷在候而は非本志候間不願前後、一片之赤心吐露仕候、幾重ニも御賢慮所仰候、恐々謹言、

追而寒威御保護專一奉存候、突然之書翰高慮之程如何敷奉存候得共、本文之趣意ニ御座候間、不惡御聞取被下度奉存候、御同席中様へ別段不申上候間、乍憚尊君より猷序之微志御伝声伏而奉頼候、是より別

紙ニツ、くX

文書原寸 縦一六樞 横二〇二・八樞

七九〇ノ二

(別紙) 別啓

X 且又、夷人折合一条、且拝借金等之義ニ付、段々御高配被成下、別而難有奉存候、追々家来共推參、御海量を以

御叮嚀被示聞候段、是亦忝奉存候、御案内通無骨者共、無御遠慮御叱声可被成下候、此旨御礼申上度、如此御座候、已上、

文書原寸 縦一六樞 横三一・七樞

〇五二 尹宮へノ宸翰及写久光公ヨリ尹宮へノ復書 三通

五三 在京小松帶刀ヨリ在国お近どのへ

貞姫着京ノ件等

(封紙ウツ書)

小まつ

お近どの

帶刀

人々

無事平安

かへすくいとあく被成候やうそんしまいらせ候  
(正夏カ) こほかしんたにもよろしく、くひ玉をあとり遣し候まゝ、そのよしもよろしくたのミまいらせ候、何もいそきゆへ申越したき、をしき筆とめまいらせ候

かへすくもいたみなきやうニ、くれくもねんし  
まいらせ候、何も幾久しく追々と申遣しまいらせ候  
又々めてたくかしく、

文にて申入まいらせ候、まつくさわりなくさゝくし  
くくらしの事、いか計く幾久しくめてたくそんしま  
らせ候、こなたにて

上様御きげん御よく入らせられ、ありがたき事ニ御座候、  
二ニ拙者ニも寒さのいたミもなく、大元氣にて相勤居、  
毎日く朝から晩迄、諸方の御使、又うち居候せつは  
客来にて、いつもなから少しのひまもこれなく候へとも  
少しもいたミもいたさず、大元氣ニ候まゝ、少しもく  
あんしなされましく候、こなたも当分ハ無事ニ御座候、  
一橋様も先日御着ニ相成まいらせ候、又々

公方様御上洛被仰出、近々御上洛之はつニ御座候、しか  
しいまたいつ方と申事は相分らず候へとも、正月ニ相成  
候へとそんしまいらせ候、此

御上洛ニ相成候へハ、今一しはいそかしく候へとそん

しまいらせ候、

貞姫様ニも来ル十日ニ御着之はつニ而、色々此方の御用  
もこれあり、中々いそかしく御座候、俄ニ御内婚之事  
とも仰出され、無こし・のしめ・かちん上下等俄ニこし  
らへ方ニ取かゝりまいらせ候、此迄いつこう

平野へ参詣もいたさす候まゝ、一昨日日からもよろしく  
御座候て、参詣ともいたしまいらせ候、此兩日は雪もき  
へ、肌持もよろしく相成仕合ニ御座候、其方いか御座  
候哉、何事もこれなく無事のこととも折々承り、仕合ニ  
そんしまいらせ候、よし利はいか御座候哉、肌持もよ  
ろしきはつとそんしまいらせ候、当年はとしもよし利に  
て重ねられ候へとそんしまいらせ候、いまた御下りも  
相分らず、いつれ来二月方ニ相成候へとそんしまいら  
せ候、少しにても相分候ハ、直ニ申遣しまいらせ候、  
成たけ早く御供ニ而下りたくそんしまいらせ候、此方  
御やしき中も無事ニ而、大きにく仕合ニ御座候、昨日  
奈良原便より一筆申遣し候まゝ、相とゞき候へとそん

しまいらせ候、去年越後屋へ注文の品とも出来いたし候  
まゝ、拙者ののは此方ニとり、そなたの品は遣しまいら  
せ候まゝ、うけとりなさるへく候、別紙ニかきつけ歳暮  
之しるしとして遣しまいらせ候まゝ、よろしくうけとり  
なされたくそんしまいらせ候、細々に申遣したくそんし  
候へとも、大きに〳〵とりこみ、他国の人の客、毎日〳〵  
〳〵ニこれあり、いそぎゆへあら〳〵歳暮かた〳〵とり  
つかね品とも遣しまいらせ候、まづは幾久しく、万々年  
もと、めてたくかしく、

十二月四日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二巻第六〇九号  
文書下同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二糎 横二〇五糎

五五 伊達伊予守ヨリ島津久光公へ

近衛家へ訪問ノ件

(封紙ウツ書)  
「双松明公

内用

弄鍬拜

ノ

霜威厳烈之候、愈御勝常率大賀候、今夕退朝より陽明殿  
へ罷出候時相伺候処、無御差支趣ニ付、罷出候心得ニ御  
座候、御閑暇ニ被為在候ハ、閣下にも御推参被成間敷、  
何か御申談都合宜と奉存候間申上候、○肥藩にて召捕轟  
杯兩人懐中之書付類、○因州始四人建白書、○陽明公へ  
猪太郎(高橋五右)より呈覽、外夷事情書、右のかと〳〵早々為御写  
御密示被下度奉希候、恐々頓首、

(十二月四日)  
臘四

尚又今夕七時頃ニ(重野玄經)繁野幸之允 陽明殿へ出候様、御  
表控所ニ而得面晤度御沙汰所希候、已上、

文書原寸 縦一六・五糎 横四九・一糎

五五 伊達伊予守ヨリ島津久光公へ

一橋邸へ参集之件

(包紙ウツ書)  
「舌代要事

ノ

〔封紙ウツ書〕  
「双松明公」

舌代

对翠軒

御承知候へ、不及御返書」

奉賀候、今日一橋始

(朝彦親王)

尹宮へ出候事へ相止み候故、八半頃迄ニ橋館へ御参集可

仕候、尤僕へ今朝四時供にて、堂上方五六軒寒中 勤候

末一寸貴館へ出候間、暫時御面晤申上度、匆々頓首、

(十二月五日)  
臘五

尚昼御湯付預候、酒へ一切御断申上候、中原直助も

逢度御さたと下置也、

文書原寸

縦一六・五種 包紙原寸

縦二八・七種  
横四二・五種 横 三九種

〔包紙ウツ書〕(朱)  
「癸亥十二月五日」

へ

同主殿ヨリ大久保一蔵へ

久光公ヨリ將軍ノ上洛ヲ促ス及茂久公上洛ニ

付御供ノ件

〔包紙ウツ書〕(朱)  
「癸亥十二月五日」

京 伊集院平治殿

江戸 島津主殿

大久保一蔵殿

十二月五日出ス

七九五ノ一

乍恐窺

御機嫌等之儀共宜敷様奉頼候、以上、

十二月五日

島津主殿 (久壽)

伊集院平治様

大久保一蔵様 (利通)

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一四二号  
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一五・七糎 横三四・五糎

七九五ノ二

昨四日夕刻、江夏喜藏到着いたし、(傳傳)板倉侯江之御内用向  
被仰付越候趣相達候付、今朝直ニ

御書持参之含御座候得共、御太鼓より 御出殿ニ而、朝

之間は別而暫時之事ニ而、毎も御繁用ニ候間、今夕刻喜

藏同伴

御書持参板倉侯江拜謁いたし、篤と

御趣意演説仕

御書差上候処、早速御披観相成、

三郎様御趣意至正至当之御義論ニ而、別而御尤ニ被思召

候旨致承知候付、御返翰之義奉乞候処、(松平直克)大和守様・(酒井忠)雅案

頭様江も御相談之上、可被差出候付、来ル七日八日頃迄

相待呉候様いたし度、且其期ニいたり候ハ、

御発途御日限等も被 仰出、旁御沙汰之趣茂可被為在候

間、左様相含居候様ニと之御事ニ而、別而深切御懇意之

御沙汰ニ而御座候、就而は明後七日御当地出立之含罷在

候処、右之形行御座候間、いつれ御返翰被相渡次第、直

ニ出立可致候条、被達

御内聴候義共、宜御取計可給候、此段御内用を以申越候、

以上、

十二月五日

江戸  
島津主殿

伊集院平治殿

大久保一藏殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一四四号  
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一四・二糎 包紙原寸 縦二九・一糎  
横一七三・六糎 横四二・七糎

(包紙ウツ書)  
「京ニ而」  
大久保一藏様

御内用

江戸ヨリ  
島津主殿

封 「癸亥十二月

五日」

七九五ノ三

御家老座より

御上洛ニ付

太守様御促進之儀、去春も御願ニ相成居、此節如何いたし可然哉承候得共、此段別段承知いたし不置候、何れ今日之便より窺之方可然返答いたし置候、又々町飛脚を以早々御申越有之候共、随分於此元何も相済申へく、此段も御心得之ため得御意候、自然御間ニ逢不申候ハ、吟味之廉も可有之候、以上、

十二月五日

主殿

一藏様

文書原寸 縦一五・七櫃 横六一・八櫃

七九五ノ四

右之上ニ付、窺御機嫌之儀は、先便申上置候通ニ御座候、一寸御窺と御座候而も、中々御品々不日ニ相揃候丈ニ無之、来ル九日ニ取揃相成被差出候筈ニ御座候、御品立等ハ小生帰京之折可奉入

御覽候、太抵御例も御座候、左候而急便岩下より窺ニ相成候、

(徳川家定室) 天障院様御手元より女中共江被下御用之金子八百両余、

折々御沙汰も被為 在、尤花川より此御品ハ如何様とも御減少ハ不相成、勿論御反物杯々場ニ御目録ニ而被下候処ニ御取立ニ相成候得は、却而此御元様ニは御仕合之向きニ相見得申候間、何れ是丈ハ近々之内ニ御差出ニ相成候様、取計有之筈御座候間、窺ニハ相成候得共、其段ハ不都合不相成様御取成奉頼候、猶細事ハ小生御直ニ可申上候得共、此段吟味相変候訳ニ付申上度候、宜敷奉頼候、以上、

十二月五日

一藏様

主殿

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一四六号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一五・七糎 包紙原寸 縦二六・七糎  
横 一一四・一糎 横 三九・二糎

十二月五日

江戸  
島津主殿(久壽)

京都詰  
御側役衆

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一三〇号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一四・一糎 横四六・七糎

亥 江戸島津主殿ヨリ京都大久保一藏へ

將軍上洛ニ付幕府ノ通達相添 合十一通

(包紙ウツ書)(朱)  
「癸亥十二月五日」

京都  
大久保一藏殿 江戸  
島津主殿

七九六ノ二

以廻状致啓上候、只今大御目付様より御廻状并御書付写  
八通被差越候ニ付、右写各様迄致通達候様、左兵衛督・  
越中守被申付、廻状教通相認持廻り申付候、以上、

津輕越中守内(承應)

十二月四日

平井修理

七九六ノ一

別紙

公義御触達拾通老鑄おのつから御家老方より可被達

御聴候得共、為御含写書いたし差越候、以上、

比良野助太郎  
松平左兵衛督内(吉井備免 矢田藩主)

酒井清兵衛  
増尾新兵衛

御次第不同

松平陸奥守様(伊達慶邦)

御留守居中様

松平修理大夫様(島津茂久)

御留守居中様

有馬中務大輔様(慶親)

御留守居中様

松平肥前守様(鍋島茂実)

御留守居中様

島津淡路守様(忠寛)

御留守居中様

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三二号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・四糎 横八四・八糎

七九六ノ三

酒井雅楽頭殿御渡候御書付写八通相達候間、被得其意、

御同列中不残様無遅滞早々可有通達候、答之儀は先々從  
銘々不及挨拶、各より溝口讚岐守方江可被申聞候、以上、  
(直博)

十二月四日

大目付

松平左兵衛督殿(吉井信尧)

津輕越中守殿(承昭)

右留守居

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一二九号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・四糎 横四五・六糎

七九六ノ四

大目付江

今度

御上洛ニ付、供奉相勤候万石以上之面々、

禁裏御始江献上物、関白殿始江贈物之儀、当春

御上洛之節相達候通相心得、尤四品以下之面々茂、忒拾

万石以下並之通献上物等有之筈ニ候間、被得其意、差上

方之儀は〔稲葉正邦、徒澤志〕所司代可被承合候、

右之通、万石以上之面々江可被相触候、

十二月

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ  
一号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・四糎 横六六・七糎

右之通、万石以上供奉相勤候面々江可被相達候、

十二月

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ  
二号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・四糎 横七五・七糎

七九六ノ五

大目付江

御軍艦ニ而

御上洛被遊候付、

御先江上京、供奉相勤候万石以上之面々、大坂表江御出

迎ニ不及、京地ニ罷在、二条

御城 御着座之節、同所東御門内外江御出迎

御目見致し、直ニ登

城之上御供之謁老中、御機嫌可被相伺候、尤

御目見場所等之儀は御目付江可被承合候、

七九六ノ六

〔端裏書〕  
「大目付江」

御上洛ニ付二条

御城 御着座之節

御目見罷出候面々、御供之向は旅装着用可致候、京地在

役之面々は熨斗目・麻上下着用

御目見可被罷出候、尤御出迎

御目見場所等之儀は掛り御目付江可被承合候、

右之通可被相触候、

十二月

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ

三号文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一六・四種 横五二・八種

七九六ノ七

〔端裏書〕  
「大目付江」

今度

御上洛ニ付、武家方一季居之奉公人主人より暇出候儀は格別奉公人より暇取候儀仕間敷旨、町中江可被相触候右之通相触候間、得其意、若違背致し候者有之候ハ、其段町奉行所江可被達候、右は御供御留守之面々同様之儀ニ候事、  
右之通向々江可被相触候、

十二月

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ四号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・四種 横五九・五種

七九六ノ八

〔端裏書〕  
「大目付江」

今度

御上洛之節、下々不及難儀様との厚御趣意ニ付、大坂・伏見・京都御通行筋屋敷々々憲蓋等不及、町家其外都而平常之通相心得、二条大坂御在城中茂市中商売等相休ニ不及、御警衛筋之外は諸事常々之通相心得、  
御上洛ニ付而屋敷々々町々等一切取飾ケ間敷儀仕間敷候  
但

御通行筋江往来人立集候儀は難相成、都而横小路江蹲踞可罷在候、

右之趣、京・大坂・伏見ニおみて相触候筈ニ付、右最寄御料・私領江可被相触候、  
右之通可被相触候、

十二月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ  
五号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・四種 横八〇・二種

七九六ノ九

(端裏書)  
「大目付江」

御軍艦ニ而

御上洛被遊候ニ付而は、風様次第相州浦賀、豆州網代

下田、駿州清水、志州鳥羽・安乘、紀州須加留・三木

島浦・大島・由良・塩津、淡州由良、摂州兵庫港等江

御碇泊等被遊候儀も可有之候間、右港々入口海岸暗礁

隠州等有之場所々々は、兼而目印之品仕付置候様可致

候、

一御通船ニ相成候海岸ニ領分知行有之面々は、

御通船之御程合見計、海岸御警衛向敵重ニ可相心得、

且又港々江は別段人数差出置、風波之模様ニ寄、自然

御碇泊等被遊候儀も有之節は、夫是御便宜筋取計可申

候、尤海岸所砲台場江備置候大砲等は御警衛ニ付候事

ニ付、其假据置不苦候、遠見番等も下し候ニ不及候、

一御通船相成候海岸、人留・船留ニ不及、平常之通漁業

等為致不苦候、

右之趣海岸浦々江御料は御代官、私領は領主・地頭

より不洩様可被相触候、

右之通可被相触候、

十二月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ

六号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・四種 横一一五・六種

七九六ノ一〇

(端裏書)  
「大目付江」

御上洛之節、二条

御城

御着座翌日、且

御参 内被為濟候翌日、并御暇

御参 内被

仰出候翌日、共万石以上以下之面々、在京之分は二条

御城江登

城御祝儀可被申上候、

但病氣之面々は雅楽頭旅館江使者可被差出候、

一 在国在邑之面々は隠居之分共承知之上、同人旅館江飛

札可被差越候、尤御暇

御参 内被

仰出候御祝儀は御留守月番之老中江飛札差越候様可被

致候、

一 在府之面々且御留守ニ罷在候万石以上以下之面々は相

達次第御留守月番之老中宅江相越、御祝儀可被申上候、

但病氣幼少隠居之面々は御留守月番之老中江使者可

差出候、

一 御在京中御供等ニ而上京之面々、御用之外、平日二条

御城江罷出候ニ不及、朔望其外出仕之節着服之儀は都

而江戸表之通相心得可申候、

右之通可被相心得候、

右之趣万石以上以下之面々江不洩様可被相触候、

十二月

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ

七号文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一六・四纏 横一一八・六纏

七九六ノ一一

〔端裏書〕

「大目付江」

此度之

御上洛は再度之御儀ニ而、格別御手輕可被遊

御上洛御主意ニ付而は、御持越相成御道具等茂格別御

減省、可也御用相弁シ候丈ニ、精々御省略御持越可被

遊旨被

仰出候ニ付而は、向々ニ而茂其心得を以取調持越候様

可被致候、右御道具等御行列ニ相立候御品其外共、惣

而有来を相用可申、尤御損し相成候分は御手輕御取締

可相成候間、其段向々より可申出候、右ニ付而は銘々持

越候品は、猶更格別ニ減省致し御趣意行届候様可致候、

一諸向請取候新規御道具之内、油竈桐油之類

還御以後外ニ御用無之分は御用濟御細工所江可相返候

尤断書差出候節其旨可被書加候、

一諸組役羽織之儀茂新規相渡不申候間、在来品を相用可

申、損し候而難用分は、其筋見分之上相渡候而可有之候

但御徒以下江は木綿股引・脚半・合羽等相渡ニ而可

有之候条、可被得其意候、

右之趣向々江可被相触候、

十二月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三四ノ

八号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六・四糎 包紙原寸 縦二八・八糎

横 一三五・三糎 横 四二・七糎

(七九六ノ二ノ一号文書ハ一綴)

五七 江戸島津主殿ヨリ京都大久保一蔵へ

將軍上洛督促ノ件

(包紙ウツ書) (朱)

「癸亥十二月五日」

(付箋) 「御内用」 京

伊集院平治殿

江戸 島津主殿

大久保一蔵殿

十二月五日出ス

去月廿八日

御書宰領ニ而被差立候江夏喜蔵、昨夕方下着いたし、

御書差出、慥ニ御請取申上候、且御問合加之喜蔵江御含

之趣も委細致承知候、

三郎様益御機嫌克被為在御座、恐悅御同意奉存候、偕此

許之形勢別而能模様ニ而、先町飛脚便を以申上置候通、

弥何も相変儀無御座候、

大樹公断然御決定之所より、惣裁職板倉侯・酒井侯其外

之所も最ハ大丈夫ニ御座候、左候而

御書之儀、今朝持参いたし可然欵と吟味も有之候得共、何分御登城前へ、毎も暫之御逢ニ而、何も事件具ニ申述候儀ハ尽兼候次第も御座候付、延引之儀トハ奉存候得共今日七ツ時分より喜蔵同伴いたし、

御書持参仕、拜謁之儀奉願候処、未御退城無之、然処六ツ過御退城ニ相成、段々外ニも拜謁願人も有之様ニ相見得、暫有之候而罷出候様御案内有之、喜蔵一同ニ毎之通罷通候而、同人被差越候儀共申上、

御書小子ヨリ御直ニ差上候処、即御開封ニ而篤と御覽被為在、誠ニ

三郎様御趣意之程、猶亦親敷御承知被成、実ニ御尤至極被思召、何れ

三郎様御趣意之様ニ無之候而は不相濟事に候段、丁度先日小子江被仰聞候通之事候間、猶亦

御書之趣大和守様其外御同席中様江被仰談、弥一日片時も御早く

御発途被遊候処、精々御尽力可被成との段承知仕候得共

猶又重而丁度

御趣意之御旨、小生ニも申上、喜蔵よりも彼是巨細ニ申上候趣も御座候処、一々時機至当、公平之論弥此節柄、

断然

御決定之儀ハ、先日より小生江も度々被仰聞通、無疑來十七八日ヨリ廿日頃ニハ無相違

御発途ニ相成賦ニ而、一杯ニ相働候間、少も無疑様相心得、其趣能々御汲取被為 在候様ニ申上候との御事ニ御

座候、若其時分迄御船不相揃候ハ、

御召船等之所さへ四五艘有之候得は、外ハ無御構御発し之御賦ニ御座候由、御供方等之所ハ、とても考通ニ参兼候間、是ハ何れ近日之内より陸行之筈ニ有之段、御沙汰

ニ御座候、随而御返書之儀は乍恐如何可被成下候哉と相窺、私共ニも明後七日ニハ出立之心組ニ御座候段、小生申上候処、とふも其内ニハ御返書も不被為整、何れ同席中相談いたし候而、七日八日之間ニ其方共江此方より申遣候間、杵人ニ而も宜敷参候様いたし度、とふそ夫迄ハ

相待具候様ニ、御懇ニ御沙汰承知仕候間、御受仕置、左候而度々申上事ニ候得共、

御上洛御日限之所、一日も早不被仰出候而は、上下之人心安堵居合も付不申候間、利害得失弁解仕候処、七日八日ニ返書被差出候、其内何れ御日限も被仰出ニ而可有之、内実ハ御究ニ相成居候得共、とふも今晚其処被為申聞度被思召候得共、其儀ハ勘弁いたし呉と別而御叮嚀ニ御沙汰有之、恐入申候、尤此方共迄早其段承知仕度と申上候儀ニハ聊無之、誠ニ旁難有次第ニ而、最ハ弥無相違御事と奉存候、乍恐御口氣ニも廿日過、猶弥何も大丈夫ニ而候と、度々相窺申候間、其時分ニ而も可被為在欵と奉恐察候、右様之次第ニ而、格別六ヶ敷撰立申上候儀も無之、左候ハ、御返書御下迄ハ罷居可申旨申上候而、御暇仕候折ニ、自分

御上洛之上も何角

三郎様御頼被成度と思召様之御沙汰、能程合ニ被仰聞申候、左右して又近日参々時、咄事も有之との趣も御沙汰

御座候、何ぞ思召も有之欵と奉察候、右様之時機合ニ付、何れ御返簡御渡ニ御呼出之節迄ハ、兩人共ニ罷出候而承知不仕候而相濟間敷事と申談候間、右廉之場合も宜敷様ニ被仰上置可被下候、

御書御渡被下次第、直ニ出立いたし候様之含ニ御座候、御直ニ御渡被成様な御模様ニ御座候、將亦昨夜出帆相成候蒸氣船よりも申上越候、先日は勝麟太郎殿江差越、御船之御都合ハ如何之段、細々承申候処、廿日頃迄ハ大丈夫之段安心いたして被居申候、五六艘參候得は可也ニ御用途相成よし、段々考合見又承候処、公義船横浜江式艘長崎より壱艘參様な向き、越前船・長崎船御回船・筑前船・肥前之船も決而参さうな模様ニ相窺申候、御船之ことハ此方が御請之賦ちやと笑て被居申候間、先々別条無之相心得居申候、永井主水正殿江も中介同伴昨日差越候処、折悪く留守逢取不申候、越前之島田近江ハ今朝出立いたし候、格別急ぎ之様ニも被聞不申、十日計而上着之賦と咄ニ御座候、右件々喜蔵より茂可申上候間、彼是能

々御勘考を以

御前宜敷様被仰上可被下候、先は此段公私之交用御海容可被下候、敬白、

十二月五日

島津主殿

大久保一蔵様

追啓、帯刀殿江老封同条差出度候得共、差急其儀不相調候間、乍恐宜敷様御申述被下度御頼申上候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一四三号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一五・八糎 包紙原寸 縦二九・一糎  
横五六二・四糎 横四二・七糎

五六 將軍上洛ニ付江戸出府ノ旅人并江戸市中

取締命令

合六通

七九八ノ一

本文書ハ七九六ノ二号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一六・七糎 横七六・六糎

七九八ノ二

板倉周防守殿御渡候御書付写四通相達候間、被得其意御

同列中不残様無遅滞、早々可有通達候、答之儀は先々從

銘々不及挨拶、各より溝口讚岐守方江可被申聞候、以上

十二月五日

大目付

(吉井信亮) 松平左兵衛督殿

(承昭) 津軽越中守殿

右留守居

文書原寸 縦一六・七糎 横五一・五糎

七九八ノ三

(端裏書) 「大目付江」

今度

御上洛被 仰出候ニ付而は、御留守中御取締向、一際

嚴重可致、就而は来ル十五日より諸国御関所并江戸出

口宿々番所等ニおゐて、出入相改、主人并領主・地頭

之書付持參不致ものハ不通管ニ候間、万石以上之面々

ハ勿論、以下ニ而茂陳屋有之、時々家来往來為致候面々

ハ、兼而印鑑道筋御関所等江相廻し置、家来往來は度

々月日人数等、委細ニ認候調印之書付可被相渡候、若

脇道閑道相越、又は押而相通候ハ、召捕、手向致し候

得は切捨致し候筈ニ候、

一御代官手付手代等茂、御代官印鑑御関所等江相廻し置

前同様改可受候、

一御代官・領主・地頭付属ニ無之土地之寺社家來等、其

寺社印鑑兼而御関所等江廻し置、同様改可受候、

一御料・私領寺社百姓共無抛子細有之分ハ、支配御代官

領主・地頭江申立、月日・人数等相認候調印之書付申

請、出府可致候、地頭家來詰合ニ無之小給所百姓は、

最寄御代官陳屋、又は私領役場江申立、右陳屋おゐて

糺之上、支配所領分知行之者同様書付可相渡候、

一御供ニ而上京致し候万石以上家來出府致候儀等茂有之

候ハ、前ケ条ニ准し可被取計、万石以下之分は多人

数之儀、銘々印鑑差出候而は双方混雜茂可致間、御供

御目付江申立書付申請、右を御関所等江差出可相通候、

一御留守中都而不差急儀ニ出府致し候儀、可為無用候、

一江戸出口宿々御番所等江差出候印鑑三拾枚程、来ル七

日迄ニ御目付江可被差出候、

右之通向々江不洩様早々可被相触候、

十二月

文書原寸 縦一六・七種 横二四二・四種

七九八ノ四

(複製書)  
「大目付江」

今度

御上洛御留守中、諸国御関所并江戸出口宿々番所等ニ於

而、出入改方之儀向々江相触候ニ付而は、右御関所并番

所等勤番致し候面々触面之趣を以敵重相改、聊等閑無之  
様可被致候、且又関所々人通方之儀、遠国迄は急速心得  
方行届申間敷候間、来子正月廿日迄ハ遠国より出府之者  
ニ限り、関所ニおゐて糺之上、主人・領主等調印之書付  
無之分は、在所出立日限等得と相糺、怪敷儀茂不相聞、  
無抛訳相立候ハ、其訳并何方迄相通候段書付ニ認相渡、  
江戸出口番所ニ於而為差出相通候様可被致候、  
右之通御料・私領其外、関所・番所等有之面々江、早々  
可被相触候、

十二月

文書原寸 縦一六・七釐 横一一六釐

七九八ノ五

(編纂書)  
「大目付江」

今般

御上洛被 仰出候付而は、御留守中御取締一際敵重ニ可  
致、就而は東海道・中山道筋并関内取締別而行届候様ニ

との御沙汰候間、居城并陣屋有之、家来差出置候面々は、  
非常之節人数操出方等、弥手厚用意致し置、且領分知行  
所内時々家来共見廻り、怪敷者見受候ハ、無用捨召捕、  
手向致し手余り候ハ、切捨候とも鉄砲ニ而打殺候とも  
致し、尤召捕候もの共は不取逃様手当致し、其所奉行又  
は江戸表江可差出、尤程遠之分等は時宜次第、最寄奉行  
所又は御代官掛合之上可引渡、他之引合無之候ハ、万  
石以上之面々は手限仕置をも可被申付候、勿論兼而最寄  
御料・私領申合置、相互ニ不取逃様可致候、  
但関内之儀は関東筋取締出役江も打合、可被取計候、  
右之通東海道・中山道筋并関八州ニ領分知行有之面々江  
可被相触候、

十二月

文書原寸 縦一六・七釐 横一〇六・一釐

〔端裏書〕  
「大目付江」

今度

御上洛御留守中、武家屋敷取締之為、道筋大通り而已  
往来致し、小道々々ニは出口木戸門取建、番人付置、  
木戸門を組合と定め、頭取相立、組合内江用向有之者  
之外、相通し申間敷、尤万石以上之者は、屋敷門番所  
等江も人数差出置、万一狼藉もの有之候節は、早速駈  
付応援致し可申、且右組合内武術稽古場有之候場所は  
銘々申合、家来又は子弟厄介等差出し、武芸熟達之も  
の重立、昼夜修行をも致し、平日火災盜難等を始、相  
互二助ケ合、万一事変出来候節は一同罷出候様、兼而  
鳴物等を以合図を定メ置候様可致、左候得は子弟教育  
之一筋ニも相成候間、世話行届候ハ、其次第二寄御  
賞之品も可有之候、  
一大通り道筋之儀は、二三町置可成丈辻番所際江木戸門  
取建、朝正六時明ケ、夜は五時メ切可申候、御用筋又

は病人有之医師呼寄、或は用弁手間取れ時刻後れ、無  
抛子細有之分は、往帰之場所を相尋、何時ニ而茂潜り  
相通可申候、万石以上、組合之場所も都而前同様取計、  
番人合図次第早速駈付候様、手筈致可被置候、

但木戸門開閉之儀は、辻番所有之場所は右番人相心  
得可申、自然辻番所無之場所は新規仮番所取建、番  
人付置可申、就而ハ有来辻番組合を改、木戸門組合  
相立候事ニ候、

一出火之節は木戸門明ケ候は勿論ニ候得共、小道組合之  
分は狼ニ不明様致し、勿論夫ケ為混雜怪我人等無之程  
ニ相心得開閉可致候、

一木戸門取建場所之儀は御目付方於て差図可致候、  
一狼藉もの有之捕押候節手向等致し候ハ、切捨可申、  
都而委細之儀は大目付・御目付可被談候、  
右之通万石以上以下之面々江、早々可被達候、

十二月

文書原寸 縦一六・七釐 横一八一・八釐

(七九八ノ一六号文書ハ一綴)

五五 江戸島津主殿ヨリ京都詰側役衆へ

久光公ノ御機嫌伺

(包紙ウツ書)

京都詰

島津主殿

三郎様江

右今日町便被差立候付、御機嫌奉伺度候間、毎々振合を以宜御頼申越候、以上、

十二月六日

江戸

島津主殿

京都詰

御側役衆

文書原寸 縦一四・二種 包紙原寸

縦二二・四種

横三七・五種

横 二九種

〇〇〇 英国ニ対スル薩藩ノ処置ニ付世上ノ好評

〇二 稲葉長門守ヨリ島津三郎様へ

回章ノ件

(包紙ウツ書)

島津三郎様

(正邦) 稲葉長門守

御直披

一 翰啓上仕候、寒威凜然之候御座候得共、益御安寧恭賀

之至奉存候、然は松野州より別紙二通差越、異存も無御

座候ハ、御順達仕候様申越候間、一覽之上御廻申上候、

次順江ハ夫より御回達被下候様仕度奉存候、草々、以上、

十二月九日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一四五ノ

一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・八種 包紙原寸 縦三七・八種

横 四五種

横 二七・五種

△三 板倉周防守より島津三郎公へ

將軍上洛ニ就而

(包紙ウツ書)  
一島津三郎様

板倉周防守

貴報御直展

(朱一紙)  
〇

┌

客月念七日付之芳墨致拜見候、如貴論未得拜眉候得共、

酷寒之節弥御壮栄御滯京、欣然之至御座候、然は如仰方

今天下之形勢実以御同苦之事ニ候、先頃中より御在京に

而、國家之為御尽力之段致感銘候、今度御上洛之儀ニ付

而は、御家来御差下、其御地之御模様等巨細被仰越、速

ニ

御上洛無之而は、

官武 御合体

皇国挽回之道難相立候段、御尤之事ニ候、既に

御上洛御一定相成候処、不計も 大城炎上、恐入候事ニ

候、乍去、右ニ而御猶予難被成儀ニ付、

御發途御日限来ル廿一三兩日之内之御含ニ而、此節供奉

之面々、追々出立致候事ニ候間、御放念可被下候、猶比  
上とも弥以

御一和御整、挽回之御処置、為天下御尽力所希候、此段

貴報迄匆々如斯御座候、恐々頓首、

十二月九日

(藤懸)  
板倉周防守

島津三郎様

貴答

再白、隨時折角御自保專一ニ奉存候、御紙上之趣、

具ニ同列共へも及演說置候、将英人一条云々被仰越

御至念之儀先々都合能相濟、

皇国之御為と存候、御家臣へも格別骨折感心之事ニ

候、書余縷々御家臣へ申含、文略致候、不宣、

文書原寸 縦一八・八種 包紙原寸 縦二七・五種

横一四二・四種

横 四〇種

〇三 將軍上洛ニ付松平容保ヨリ諸藩ヘノ廻状

別紙共二通

(包紙ウツ書)付箋  
「十二月十日慶応三丁卯欵

御廻状式通 書翰一通

大樹上洛 御差急之事件

松平肥後守より伊達伊予守様 松平下野守様

稲葉長門守様御名長岡澄之助様

同 良之助様」

御廻状面

式通

」

八〇三ノ一

別紙相認御廻達、得御添削可申筈之処、素々差急候儀ニ  
候故、早く関東江遣し、跡より草稿御廻候而も可然、春  
嶽殿より御相談も御座候ニ付、略而直ニ差出候間、左様  
御承知被下度候、以上、

十二月十日

松平肥後守 (容保)

伊達伊予守様 (宗徳)

(黒田慶賢) 松平下野守様

(正邦) 稲葉長門守様

(久光) 島津三郎様

(細川護久) 長岡澄之助様

(慶美) 長岡良之助様

再伸、今日参

内差懸候間、乍略儀代筆を以申進候、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一四五)

二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・二糎 横六八・一糎

八〇三ノ二

一筆致啓上候、甚寒之節ニ御座候処、

御所益御安全、

公方様倍御機嫌能被遊御座奉恐悦候、随而

各様御安健御奉仕可被成御座珍重奉存候、扱去六日、

(慶喜) 一橋公御始私共一同、二条殿江被召呼、

(朝彦親王)(二葉齊敬)

(忠熙・忠房)

(公純)

尹宮・右府殿・近衛殿御父子・徳大寺内府殿御同座ニ而

御上洛之儀兩度迄被仰遣候得共、今以御様子不相分、深

御案事被

思召候、

大城焼失等無余儀訳合も有之候得共、此節速ニ御上洛無

之候而は、向後不容易形勢ニ可至被

思召候ニ付、御日限御取極、早々

御発途被為在候様、

御懇諭之

勅意御書面を以、尚又関東江被仰遣度被

思召候趣、左様候而は如何可有之哉、御内談被仰聞候処

一橋公始申上候様、右は至極難有

思召ニ御座候得共、已ニ再応被蒙

御沙汰、今又御懇諭被下候儀、於関東深被恐入候儀奉存

候、且は弥本月下旬

御発途之趣、年寄共より申越候ニ付、必相違有之間敷候

間、今一応御懇諭之儀は御見合被下候様、一同奉願候、

右御同座之方御懇篤之儀は勿論、

主上ニ於而

御上洛御待兼被遊候程之御様子委細奉伺、御一和之御都

合美以不堪感泣次第ニ御座候間、少茂御早く御日限御取

極被仰越、早々

御発途被遊候様仕度、一同屈指而奉待上候、委細之儀ハ

一橋公より御上書有之候間、定而各様方茂御拜見可被成、

右御合考御領掌宜敷御取計被下候様奉希候、先は右之趣

早々申上度、如此ニ御座候、恐惶謹言、

十二月

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一四五ノ

三号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・二糎 包紙原寸 縦二七・七糎

横 一九五糎

横四〇・三糎

British Legation in Japan

The basis of good will and amity being thus established, and the Agents of the Prince of Satsuma having preferred to the Undersigned His Majesty's Charge' d'Affaires a request ~~in presence of officers of~~ ~~the voyage, and soon to that~~ of friendly feeling established, that he would facilitate the desire of the Prince of Satsuma to purchase a ship of war in England. His Britannic Majesty's Charge' d'Affaires does hereby engage to represent such request.

Gonen ah Yokohama  
 this eleventh day of  
 December 1863.

Edw. M. Stale  
 His Charge' d'Affaires

request, when formally and specifically preferred, to Her Majesty's government, provided that at the period when such request is made in course of execution the relations of the Sycoon's Government with Great Britain in general and the proceeding and dispositions of the Prince of Satsuma, in particular, are not inimical or divided against the rights required by treaties now existing between the Sycoon of Japan Great Britain and other friendly states.

△ 英国代理公使「ジョン・ニール」ノ薩藩

軍艦購入方周旋契約書

三通

原書英文 蘭訳 和訳

(包紙ウツ書)  
 「軍船請合」

英文

蘭訳

翻訳文相添

一通

一通

文書原寸 縦三三・五糎 横四〇・六糎

gemaakt houdende en  
als een bewijs dat vriendschap-  
-pelijke betrekkingen hersteld  
zijn, dat hij behulpzaam  
sou zijn om de begeerte  
van den Prins van Satsuma  
te doen ter uitvoer brengen  
in het koop van een  
oorlog schip in Engeland,  
Doo belooft H. B. Mi's  
Charge' d'Affaires by  
Aoren dat hy Sulck  
en

H. B. Mi. Legation  
Japan. 11<sup>de</sup> Decr. 1853.

De grondbeginselen  
van een goede verstand-  
houding en vriendschap  
altes bewijst gelyc  
en de Agenten van den  
Prins van Satsuma aan  
H. B. Mi's Charge' d'Affaires  
Lar verzoek in de tegenwoor-  
-heid van de Takouki bekinn  
gemaakt

文書原寸 縦三三・五種 横四〇・六種

met groot. Britsche in  
het algemeen, en de  
handelingen en gepinckheid  
van den Prins van Satsuma  
in het byzonder, niet  
bijzondere gelyc, gericht  
tegen de voorrechten door  
Traktaten verkregen die  
nu bestaan met den Takou  
van Japan, Groot. Britsche  
en andere vriendschappelyke  
Staten - Geyon J. Yokohama  
den 11<sup>de</sup> Decr 1853  
n. g. E. H. Mi's Charge  
H. B. Mi's Charge' d'Affaires

en verzoek zal doen  
mededeelen aan H. B. Mi's  
Gouvernement, indien  
Sulck een verzoek of een  
behoorlyke en officiële  
wijze gemaakt wordt,  
of vermaande echter  
dat op den tyd dat  
Sulck een verzoek gemaakt  
wordt of ten uitvoer  
gebracht wordt de betrekkingen  
van de Regering van Takou  
met

八〇四ノ三

千八百六十三年第十二月十一日日本に在る

貌利太泥亜女王殿下使臣館に於て

此の如く交誼親睦の基を確定し、薩摩侯のアージェント大君役人目前にて、貌利太泥亜女王殿下のチャルゼダフヘールへ懇願あり、且つ和親の交際本に復せし証として、余薩摩侯の英国に於て軍艦を買入んと欲する意に充しめんか為め、周旋をも為すべきなれハ、此度貌利太泥亜女王殿下のチャルゼダフヘールは、其懇願相当にして公然たる趣向なれば、之を貌利太泥亜女王殿下の政府へ報告すへしと約するなり、尤其懇願を為し、之を取行ふ時に當て、大君政府大貌利太泥亜との一般の交際及び薩摩侯一己の取扱向、且其意衷不和の事なく、又即今日本大君と大貌利太泥亜其他和親の国々とに存する条約にて受得たる免許に反せる仕向けなからんと予期して約之、

千八百六十三年第十二月十一日

於横浜之を与ふ

女王殿下のチャルゼダフヘール

イシント・チヨン・ニール手記

冊子原寸 縦二七・七種

横一九・六種 二枚

包紙原寸 縦二八・二種

横四〇・七種

伊達伊予守弄鋏ヨリ島津久光公へ

橋公旅館へ参集、菴原帯刀書面ノ件

〔封紙ウツ書〕  
一 双松盟台

内用

弄鋏

沍寒之候、愈御清穆奉大賀候、扱御風邪如何被為在候や、  
為

皇国御保療奉専念候、扱又昨日ハ粗如御承知、橋公・春

岳平慶丈(松平齊侯)・会津・小子参内可仕旨、伝 奏より申来、罷出候末、

二条殿御始拝謁、菴原帯刀差出候書面披見被仰付、所存

も御尋御座候間、橋公より閣下御始ニ御判談之末、御請

可申上と御答申上置相成候故、何卒今日午過第一時 橋公

御旅館へ御参集被下度、右等僕より申上候様、黄門噂故、如此御座候、恐々頓首、

願句三

有川万一御不参に候ハ、小松ニ而も御さし出有御座度奉存候、已上、

文書原寸 縦一五・九種 横六二・八種

○米 南部弥八郎江戸ヨリノ報告

薩英戦争ニ於ケル薩士ノ勇敢

久光公ニ対スル林家等ノ批評

一 英吉利本国出版之新聞紙近頃横浜江到来仕、拔萃

翻訳大意之趣

日本は支那に比すれば遙に優りて勇武の名あり、然りといえとも太平久しく打つゝきたれば、敢て信する能ハざりしに、鹿児島の一戦に彼将士尽く大砲の火門に向ひ、端然自若たり、己に砲発するの際、戦士粗衣露体死を怯れず、能々戦を勉めたりと、嗚呼忠勇実之感

すへし、仍ておもふ、此のとき勇武忠烈之國なれハ

数年を待たず東方の一強國たらんを、今鹿児島役に報せんに、大兵数万軍艦数十艘を以てせば、必然勝利を得べきなれとも、斯く廉武の國、一たひ仇敵たらは却て憤激勉強して其技に長せは、数年ならず其讎を報せんには我に損有て益なし、此の如き國は誠心懇親をむすひ、相互に救援し、以て富強をはかるにしかず、固有強國の名実に空しからずといふへし云々、

右原文之儀はいまた手ニ入不申候、追而探索仕尚亦可申上候、

一 近頃湯島学問所并林家等之内評に

三郎様御事兼而歴史の学に深く御長し被遊、夫故昨年来世態之變化ニ就て御進退能く機変之御所置被為在候旨、専ら風評仕候、

一 水戸勘定役立原某并書生三人、重野厚之丞江面会之儀紹介いたし候様、清水卯三郎江相頼候旨承申候、右之者は兼而攘夷の説ニ而は無之、全く外国之形勢応接之

次第を尋問之積と相聞得申候、

一市中に張紙いたし、或は商売向に差障り候者二十人余召捕相成候処、長州人は無之、大概は水府人ニ而、其余無宿少々相交り居、其上品川洲崎台場水戸持ニ相成、出張致し居候、水戸士人等海道往来之異人を付ねらい、先日宇瀨生プロイヌのコンシユルを追懸候儀も有之、先日俄に台場交代ニ而、中津侯之持ニ相成申候、

一上州赤城山江無頼人五六拾人相籠、近隣の民家を掠奪いたし候付、幕下知行より相募り候歩兵を以誅伐之内評有之趣ニ御座候、

右之通承申候間、此段申上候、以上、

亥十二月十四日 南部弥八郎

冊子原寸 縦二七・八種 横二〇・一種 二枚

○久光久光公ノ学問ニ対スル林家等ノ内評

○伊達伊達遠江守ヨリ桂右衛門へ

上京遅延ノ件

一筆致啓上候、甚寒之節愈御健達可被成御勤慶賀之至ニ候、陳は先頃は寒氣之時分為御使者御入来御苦勞存入候、御滞留中不行届失敬之至御海容可被下候、其節御咄申上候通、

朝廷より御召ニ付上京之合ニ御座候、然ル処、御借用申上置候蒸氣船茂未帰着無之、追々歳暮ニ相成候得は、月迫致発足候而は召連候家来共難渋之向茂可有之、其節ニ相成候得は、来春早々致発足候而茂、对

朝廷首尾如何御座候哉と心配致候、右等之処御賢慮之次第同度願望ニ御座候、何卒無御遠慮御答被成下候様希入候、尚又書中ニ被示下兼候廉茂有之候ハ、使之者江御口上ニ而委曲御教諭被下度、此段頼入候、右之趣意御間合迄如斯ニ候、恐惶謹言、

十二月十七日

(伊達)遠江守

(久光)桂右衛門様

二白、敵寒之節御保養專要所祈候、本文之趣可然御  
聞取御答書待入申候、不備、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第七三三号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・二種 横一九一・六種

△元 伊達伊予守ヨリ島津大隅守  
皇武一和ノ件及貞姫婚儀ノ件

(封筒)  
一隅州聖明公 宗城  
侍史中

(封筒ウラ)(朱)

(封紙ウツ書)  
一雙松賢兄

内用

弄鍬拜

雪後増寒候処、愈御清穆奉大賀候、先日以来之御所勞、  
最早御清快と奉南山候、扱又一昨日は万端無御滞御祝儀  
被為濟、幾久敷奉万福多賀候、将先般猪太郎(高崎五六)へ及噂置候

皇武御一和ヲ始、挽回維持周旋尽力之目的事件、閣下  
賢慮伺候末、各商議預教示度段申置候処、追日御上落も  
近相成、不日より二条

御城参集等相始り候ハ、尚更緊要之儀ニ付、尚亦御考  
量被下度候、○廿三日野州嘶ニ御光臨可被成や、(松平慶永)  
春岳・  
僕も倍従可仕との事御座候、弥御取極候ハ、同日朝之  
内参 殿、前文之義御密話可申上候、此品乍不珍当季御  
尋問迄ニ表寸志候、頓首、

(十月二十日)  
臈念日

尚以菴原之儀、猪太郎より賢慮之趣も於橋館伝承仕

候処、

朝儀ハ如何被相決候や、御承知候ハ、御密示奉希  
候、不備、

文書原寸 縦 一六種 包紙原寸 縦一八・四種

横七〇・六種

横 四・七種

△〇 黒田長知公ヨリ島津久光公へ

黒田邸へ訪問ノ件

(封紙ウツ書)  
「三郎様

用事

紫州

已来愈御清安奉賀寿候、扨明日御入来被下度旨、過刻得

貴意候処、唯今春嶽兄より今日

尹宮ハ參 殿相成候処、明日ハ

内侍所御神楽ニ付拝聴可致段

尹宮被 仰ニ付、春・予兩兄とも拝聴願ニ相成候旨ニ付、

入来之義断ニ相成申候条、甚毎度種々之儀申上、貴慮之

処恐縮ニ候得共不得已、明日之処ハ御断申上候、就而ハ

明日僕も拝聴被相願候儀ニ候ハ、奉願存念ニ御座候、

尚御入来被下候日限之処ハ、不日申上候条、右等之趣不

悪御承諾可被下候、此旨得貴意度、草々如此御座候、再

拜、

(十二月二十一日)  
臚念一

二白、例文ニ御座候、不具、

文書原寸 縦一七・一糎 横九五・七糎

△二 黒田長知公ヨリ島津三郎公へ

黒田邸へ参集之件

(封紙ウツ書)  
「三郎様

玉几下

鴨州

謹啓仕候、先以愈御清安奉大賀候、扨明日ハ弥御光来被

下候様奉待候、春嶽兄も昼前ニ被参候積御座候間、君

ニも昼前ニ被下御出度候、予州兄ニハ明日当番ニ付、右

退出より直ニ入来之筈ニ御座候、右等之趣申上度、余ハ

明日期面尽之時候、頓首、

臚念一

文書原寸 縦一七・二糎 横五八・八糎

八三 辻山城ノ「海有之鞍」及「両咲之鎧」

折紙

八二一ノ一

「宮備中守時道正作  
(包紙ウツ書)」

海有之鞍折紙」

海有之鞍

宮備中守時道

正作

紋軍配

代金貳拾五枚

文久三亥年

十二月廿一日

辻山城

政恒



文書原寸(折紙)縦二六・三種 包紙原寸

横六五・八種

縦四〇・八種  
横二八・四種

二通

八二一ノ二

「宮備中守時道正作  
(包紙ウツ書)」

両咲之鎧折紙」

両咲之鎧

宮備中守時道

正作 永正六年  
三月七日

在判

代金貳拾五枚

文久三亥年

十二月廿一日

辻山城

政恒



文書原寸(折紙)縦二六・三種 包紙原寸

横六五・八種

縦 四一種  
横二八・四種

△三 黒田長知公ヨリ島津久光公へ

黒田邸へ参集ノ件

〔封紙ウラ書〕  
「三郎様」

野州

急用

ノ

」

以急使申上候、御清安奉賀候、扱今日御入来被下候様、  
昨宵申上置候、其末予州兄今日敝館へ入来前、其御方へ  
被立寄候而、貴君御同伴ニ而被参候との事ニ有之候条  
何卒右様御承知被下、予州兄御同道ニ而御入来被下候様  
希候、此段鳥渡申上度如此候、不備、

願念三

文書原寸 縦一七種 横五三・四種

△四 伊達伊予守ノ上京ニ付朝廷ノ褒詞其他

〔彌生朱書〕  
「癸亥年」

伊達伊予守様

右旧願十九日、從

議奏野々宮様御用人御呼出有之、御逢之上左之通、

伊達伊予守、先年以来国忠丹誠之趣達

叡聞候間、上京有之正論等被

聞召度、去十月

御沙汰付、速上京之由 御満足

思召候、暫滞留有之候様被遊度、被

仰出候事、

右旧願廿三日御留守居より申来候、

〔池田慶徳〕  
松平相模守様

右為御帰国、旧願四日江戸御発駕、同十九日京都御着、

暫御滞留之旨、同廿五日御留守居より申越候、

〔毛利慶親〕  
大膳大夫様御嫡

〔毛利定広〕  
松平長門守様

右は旧願二日、依御逢御登 城被成候処、於御座之間御

目見、御懇之被為蒙

上意

勅諭之趣、御遵奉御周旋御太儀ニ 思召、御刀 御手自

御拝領、同九日江戸御発駕、同廿七日京都御着之趣、同

廿六日御留守居より申越候、

松平相模守様

右正月四日、京都御発駕、翌五日夜御着坂、暫御滞留之

積之段、御留守居より申越候、

右御同人様

右去ル三日御參

内被為拝

龍顔、

天盃御頂戴、格別之被為蒙

勅命、其上御拝領物被成候段、亥正月五日御留守居より

申来候、

小笠原大膳大夫様  
(忠幹)

右は今般為御參府、当正月二日当地御出立、同夜伏見駅

御止宿之所、旧臘廿七日於江戸右之通被仰渡候段、当三

日晝飛札到着、同所より御引返、四日夜御着、暫御滞坂、

小笠原大膳大夫

来二月、御軍艦ニ而

御上洛被遊候旨被

仰出候付、其方儀は陸路御先江籠登、大坂ニ而

御待請仕、二条

御城江被為 入候節、御先御供相勤候様可被致候、

右之通御留守居より申越候、

文書原寸 縦一三・九種 横一三〇・六種

### ハ三 池田筑後守等四十余人出発

(編纂朱書)  
「癸亥十二月」

右番 フランス 式番 イギリス 三番 フロイセン

四番 スユツル 五番 ホルトカル 六番 ヲランダ

七番 オロシヤ 八番 アメリカ

○正使 池田筑後守 (長発、外国奉行)

○副使 河津伊豆守 (給邦、同右)

○準副使 河田濫之助 (實之助、照、目付) ○御徒目付一人

○外国奉行組頭一人

○調役 ○定役 ○同心

○黒緞

右上下都合四十人余

極月廿三日フランス舟ニ而出帆、長崎江立寄、上海江廻り、是ニ而別舟矢張フランス舟ニ乗替、香港ニ而薪水積込、当月十五日池田氏ニ而振舞、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一四八号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・五種 横三八種

八六 松平春嶽公より島津三郎公へ

貞姫の婚儀を祝す

(包紙ウツ書) 「島津三郎様 松平春嶽」

一筆致啓上候、敵寒之候ニ御座候処、愈御清安被成御入、就中、今般は 陽明家御婚姻万端無御滞被為濟、重疊奉

恐悦候、貴君ニも嘸々御安心御満足と奉存候、右御歎申上度印迄ニ愛度鶴并酒呈上仕候、御祝受被下候ハ、不堪栄幸之至候、先々右御祝儀申上度、如此ニ御座候、尚期後喜之時候、恐惶謹言、

松平春嶽

十二月念四日 (廿四日)

島津三郎様



文書原寸 縦二一・五種 包紙原寸 縦三二・六種 横二八・七種 横四七・二種

八七 伊達伊予守より島津大隅守殿へ

朝廷参謀ノ件其他

(封紙ウツ書) 「双松明公 三省舍拜 内用」

昨夕は緩々得拜晤、御同慶之至、尔後愈御清安珍重御義奉南山候、扱昨夕も御話申上候、我輩追々

朝廷御評席へ罷出候様相成可申処、参謀と申二字も十分にも無之、帯刀へも相話懸候而不決濟候、明日ハ何等とハ尹宮へ不申上候而ハ不相濟、何分御賢考御内々相伺度、○主計出し候一小冊子兩通書付、いまた下野方へも御廻方無御座候よし、御調奉希候、恐々頓首、

(十二月廿四日)  
臆念四

文書原寸 縦一六・八種 横五三・四種

### 八六 筑前黒崎宿庄屋古海与次兵衛聞書

綿船焼失事件ト彦山問題

(端裏付箋)  
「亥十二月廿九日

蒸氣船一件」

(端書)  
「筑前博多ニ而肥後之人嘉悦市之進写取居候を、同人より中

村吉左衛門鳥渡借入写取候を写」

黒崎宿より御注進申上候指出之事

一長州御家中下関并檀之浦辺ニ而、兼而千人余出張ニ相

成居申候処、奇兵隊組と相唱、部屋住若輩之面々八百

人程、当月廿二日より廿四日迄ニ下関并檀之浦陣家江入込相成申候事、

一昨廿四日之暮方、上方筋より蒸氣船老艘薩州之御印

を建、同夜檀之浦江相近キ候処、同所台場より大砲・

火矢数多放発、右之船焼失、乗組貳拾七八人即死、右

蒸氣船近く居候長州船之由ニ候商船老艘是又同時ニ焼

失仕候事、

一英彦山座主院今以小倉江御滞、家老坊其外三人御矢倉

江相籠、以下八九人未牢舎、然るニ在山之僧坊混雜筋

指起候趣ニ而、寺社奉行外ニ御兩人足輕被召連、昨廿

五日より彦山江被罷越候由ニ候事、

右風説御注進申上候、以上、

黒崎宿庄屋  
古海与次兵衛

亥十二月廿六日

榎田角右衛門様

御役所

黒崎より御注進申上候事

一薩州様蒸氣船豊前田之浦辺ニ焼失之趣意、昨廿六日御注進申上置通ニ御座候、然るニ越前様より御借請ニ相

成候蒸氣船黒龍丸薩州江御乘下り相成候節、十一月十五日田之浦少シ上ミ手ヘサキと申所ニ錠留候節、長州

より応接及候間、薩州御船印焼灯等御引合ニ相成居候処、此節右挑灯式々張相挑、去ル廿四日夜五ツ過頃長

州檀之浦江相近寄候折節、相凶之大砲三発、右ニ付蒸氣船田之浦之方より青浜近く江乘退、然るニ檀之浦・

杉谷間台場より大砲凡四拾発、折節湯釜之脇江積入有之候線綿ニ釜床之火氣相移、自火ニ而焼失之由ニ候事、

一同夜雪烈敷、右船中出火ニ付乘衆被相働候得共、防寒之手術相尽、各海中江飛入、凡九ツ時より八ツ時迄追

々青浜海岸江游着、人数被相調子候処、惣乗組六拾九人之内四拾人助命、式拾九人死亡、但三人は死骸青浜

江打揚、死骸は相知不申、然るニ翌廿五日小倉様より御尋問旁為御迎、御用人其外青浜江出張、御家老原

私（小倉用人并家老等田之浦江出張、又は衣類、大小等御仕向ニ相成候儀共は無三左衛門殿田之浦江御越、衣類・大小脇差等迄御仕向

形儀ニ而全く間違と相見復候。  
ニ相成、同日薩州用達村上銀右衛門方江引越相成、御饗応等御座候事、

一死亡人数之内待分九人、別而船主宇宿彦右衛門殿被相果候段残念之趣噂有之候事、

一船奉行大原甚左衛門殿外ニ兩人、廿六日晚より為注進大早飛船ニ而京都江被罷登候事、

一此節長州より為炮発、船焼失之風説ニ御座候得共、如何敷御都合ニも有之候欤、右ニ付自火と申立ニ相成候

哉ニ被相察申候、極而深キ趣意可有之儀と被相察候事、一右船乗組福留祐右衛門殿、伽子拾人、都合拾老人帰国

ニ付、今廿人黒崎泊、明廿九日乗組拾八人下り相成候由、小倉江三四人相殘暫く滞在之由ニ候事、

但右口々福留祐右衛門殿より噂ニ及候、一下之関白石廉作儀、近来奇兵隊ニ相加り居候処、先度

但馬生野ニ而被為害候趣ニ而下之関住宅相潜居候事、一長州様先達而鉄・鉛・焰焰（箱カ）・フリキ・銅類御買入被相

成居候処、近来代金御渡方相滞、追々古金式朱、又は

長府札等ニ而漸く渡方ニ相成候事、

一長州様莫大之御出財筋相嵩候ニ付、志有之者共ハ金子

ニ不限、古地金類・草鞋・繩・蠟燭・樗炭類聊たりと

も差上候様関市町江触達ニ相成申候間、小前之者共迄

茂一統銀五匁、八匁より諸品右ニ準、寸志差出候事、

一山口御城普請弥以無怠造営有之候事、

右之風説御注進申上候、以上、

十二月廿九日

榎田角右衛門様  
御役所

黒崎宿庄屋

古海与次兵衛

文書原寸 縦一六糎 横一九七・四糎

八元 近衛忠房卿より島津三郎公へ

朝廷諸官復官任命の件

(包紙ウツ書)

内々

島津三郎殿

几下

忠房

〔付箋〕  
「文久三年」

(封紙ウツ書)

三郎殿

内々

几下

緘

忠房

(墨引)

口述

弥御勇猛珍重ニ存候、抑過日は御入来賑々敷喜悅之事候、

扱今日ハ正親町三条・阿野・久世復役被 仰付、六条議

奏御役被 仰付候事ニ候、就而ハ何か都合モ宜敷、旁勸

修寺之事巨細ニ明朝猪太郎・佐太郎兩人之内ヲ以、内密

正親町三条へ御申入ニ相成候様希入度候、左スレハ大ニ

都合宜敷ト存候事ニ候、仍乍夜中右申入候、乱書御推覽

可給候也、

十二月廿七夜

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第一四七号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五糎 包紙原寸 縦二七・二糎

横五四・八糎

横三九・三糎

三〇 大坂木場伝内ヨリ京都御側役へ

畠山(小豆屋) 助右衛門ヨリ木場伝内へ

金山丸船頭ヨリ小豆屋助右衛門聞取書

綿船焼失一件 五通

(包紙ウツ書)

「京都」 大坂 木場伝内  
御側役衆

「(朱) 癸亥十二月廿八日滞京中」

八二〇ノ一

製鉄所御借船、去ル廿二日朝兵庫出帆、廿四日夜五ツ時  
過長府之辺致通船候処、大炮打掛、乗組人数之内宇宿彦  
右衛門・浜崎太平次、外ニ式拾四五人致上陸、船は火起  
り候由、肥後船大応丸今朝兵庫問屋薩摩屋弥左衛門江咄  
為申由ニ而、只今右同人参り届申出候、尤怪我人茂相応  
為有之哉ニ承り、大変至極御座候、今朝折田要蔵ニ茂右  
之趣聞付、早追ニ而上京之段承候ニ付、要蔵より委敷申  
上候半奉存候、明朝ニ相掛候而は、下之関出張横目又は

村上方より委細申越候而可有之候間、其節猶又可申上候

得共、大頭之形行正三時限町便を以御届申上候間、御披

露可被下候、以上、

亥 十二月廿八日 大坂 木場伝内

戌之刻

京都

御側役衆

追而前文相認仕廻候折柄、別紙之通小豆屋助右衛門

より申来候間、相添差上申候、

文書原寸 縦一五・八糎 横一〇五糎

八二〇ノ二

一筆啓上仕候、然は今日加世田大崎浦之金山丸嘉介船当  
地入津仕、別紙書付之通承知仕、全以製鉄所蒸気船ニ御  
座候、然ル処只今肥後船入津承り候得は、右蒸気船御乗  
付人数凡三十人位も相助、小倉領へサキ江上陸為致候様  
申居候、右之通承知仕候ニ付、今般三時限仕立飛脚を以

不取敢御注進奉申上候、

先は右奉申上度、如斯ニ御座候、恐惶謹言、

亥十二月廿八日

畠山助右衛門

木場伝内様

文書原寸 縦一六・六極 横五六・五極

八二〇ノ三

金山丸船頭

加世田大崎浦之

嘉助

御国許亥十二月二日出帆仕候、

当亥十二月廿四日夜五ツ時、内之浦江入津仕、未船仕舞之間ニ、蒸氣船老艘帆柱毎ニ目印ト相見得、燈爐を掛ケ入津仕、已ニ碇泊之模様ニ相見得申候処、無程陸地より炮発之声三ツ四ツ追々相重、都合拾発位も相及候哉、其間ニ船中よりも炮発之様にも相窺申候、然は右蒸氣船帆柱之燈爐を老本ニ集メ、少々其場を引退キ、又々碇泊之

様子ニ相見得申候間、私共ニも先安心候而、一統打臥、

明早朝出帆之存心ニ而、船仕舞仕候処、右碇泊リ之蒸氣

船、満面燈爐を掛ケ候様相見得申候処、其内夜もほのく

と明渡り、能々一見仕候得は、都而焼失之模様ニ而、頭

艫少々相残、船印・帆印等一円相分り不申、船身ハ已ニ

波漕迄燃付外車相残り、赤地ニ相見得申候、船の長凡廿

六七間位ニ相見得申候、外ニ橋船、又は乗組之人数は一

切相見得不申、尤其近辺ニ橋船之様物も相見掛不申、然

ル処西風吹起り、小船之事ニ御座候間、其場を走り、其

後は相分り不申候、此段奉申上候、以上、

右之通金山丸嘉助より承り申候、此段奉申上候、以上、

小豆屋助右衛門

亥十二月廿八日

木場伝内様

尚々申上候、折田要藏様事、下拙方ニ御逗留被遊候付、右之次第奉申上候処、直様今日四ツ時過、山崎越ニ而京都江大早ニ而御届ケ旁御出立ニ相成申候間、此段御心得

迄奉申上候、以上、

文書原寸 縦一六・六種 横一三七・三種

八二〇ノ四

尚々肥後船より承り候得は、別紙三十人之外十人、淡路船より相助上陸被致候様申居候、左候ハ、都合四十人相助候哉ニ奉存候、此段申上候、

文書原寸 縦一六・六種 横一三・八種

八二〇ノ五

追啓奉申上候、本文之次第ニ付、私共御届旁罷登可申答ニ御座候得共、御承知之通

公方様御事、何時御着船も可有之哉も難計候ニ付、不取敢三時限を以御届奉申上候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三二号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・六種 包紙原寸 縦二三・五種  
横一六・四種 横 三四種

三 松岡十太夫中村新介ヨリ大久保一蔵へ

大錢半朱鑄造高報告

(包紙ウツ書)  
「大久保一蔵殿

中村新介  
松岡十太夫

八二一ノ一

鑄物方鑄錢之儀、当月五日迄之御届は先日申上越置候通ニ而、翌六日より昨廿八日迄之鑄立高別紙考鑄之通申出、且又鑄物方当分之場所江御取立より昨日迄之惣鑄立錢、是又別紙之通申出候付、相添差越候間、達御内聽候儀共宜御取計可給候、以上、

亥  
十二月廿九日

大久保一蔵殿

松岡十太夫  
中村新介

文書原寸 縦一四・四種 横七四・四種

八二ノ二

一 鑄立大錢四万五千貳百五拾七枚

錢ニして五千六百五拾七貫百貳拾四文

金ニして六百貳拾八兩貳部壹朱(ト脱カ、以下同シ)

錢六拾文

一半朱四万四千八百五拾六枚

錢ニして壹万貳千六百拾五貫七百四拾八文

金ニして千四百壹兩三部(分ニ)

合錢壹万八千貳百七拾貳貫八百七拾貳文

合金貳千三拾兩壹部壹朱

合錢六拾文

右は昨六日鑄立高ニ御座候間、此段御届申上候、以上、

亥十二月七日

鑄物方掛

見聞役

一 鑄立大錢六万四千四百拾壹枚

錢ニして七千六百七拾六貫三百七拾貳文

金ニして八百五拾貳兩三部貳朱

錢五百文

一半朱六万七千七百貳拾七枚

錢ニして壹万七千三百六拾貫七百拾八文

金ニして千九百貳拾八兩三部三朱

錢貳百七拾八文

合錢貳万五千三拾七貫九拾文

合金貳千七百八拾壹兩三部壹朱

合錢七百七拾八文

右は昨七日鑄立高ニ御座候間、此段御届申上候、以上

亥十二月八日

鑄物方掛

見聞役

一 鑄立錢六万六千五百七拾四枚

錢ニして八千三百貳拾壹貫七百四拾八文

金ニして九百貳拾四兩貳部貳朱ト

錢百貳拾四文

一 鑄立半朱六万式千六百八拾五枚

錢ニして壹万七千六百三拾貫百五拾四文

金ニして千九百五拾八兩三部式朱ト

錢貳百七拾八文

合錢貳万五千九百五拾壹貫九百六文

合金貳千八百八拾三兩貳部ト

錢四百六文

右は昨日八日鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

亥十二月九日

鑄物方掛  
見聞役

白炭払底ニ付、昨日九日鑄錢相休申候、此段御届申上候、  
以上、

亥十二月十日

鑄物方掛  
見聞役

白炭払底ニ付、昨日十日鑄錢相休申候、此段御届申上候、  
以上、

亥十二月十一日

鑄物方掛  
見聞役

一 鑄立大錢四万七千七百壹枚

錢ニして五千九百六拾貳貫六百貳拾四文

金ニして六百六拾貳兩貳部ト

錢百貳拾四文

一 右同半朱五万三百貳拾五枚

錢ニして壹万四千五百五拾三貫九百六文

金ニして千五百七拾貳兩貳式朱

錢貳百七拾八文

合錢貳万百拾六貫五百三拾文

合金貳千貳百三拾四兩貳部式朱ト

錢四百六文

右は昨日十一日鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

亥十二月十二日

鑄物方掛  
見聞役

一 鑄立大錢五万八千貳百三枚

錢ニして七千貳百七拾五貫三百七拾貳文

金ニして八百八兩壹部貳朱

錢ニして七千八百拾壹貫百貳拾四文

一右は半朱五万九千貳百七枚

金ニして八百六拾七兩三部貳朱

錢ニして壹万六千六百五拾壹貫九百六拾六文

錢貳百四拾八文

金ニして千八百五拾兩三朱

一右同半朱六万五百三拾七枚

錢貳百七拾八文

錢ニして壹万七千貳拾六貫三拾文

合錢貳万三千九百貳拾七貫三百四拾貳文

金ニして千八百九拾壹兩三部

合金貳千六百五拾八兩貳部壹朱と

錢貳百七拾八文

錢貳百七拾八文

合錢貳万四千八百三拾七貫百五拾四文

右は昨十二日鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

合金貳千七百五拾九兩貳部貳朱

亥十二月十三日

鑄物方掛  
見聞役

錢五百三拾文

右は昨十四日鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

一昨十三日御煤払ニ付諸細工相休申候、此段御届申上候、

以上、

亥十二月十五日

鑄物方掛  
見聞役

亥十二月十五日(四九)

鑄物方掛  
見聞役

一鑄立大錢四万九千九百三拾枚

錢ニして六千貳百四拾壹貫貳百四拾八文

一鑄立大錢六万貳千四百八拾九枚

金ニして六百九拾三兩壹部三朱

錢三百拾貳文

一右同半朱五万四千貳百拾五枚

錢ニして壹万五千貳百五拾貫七百七拾八文

金ニして千六百九拾四兩貳部

錢貳百七拾八文

合錢貳万四千四百九拾貳貫三拾文

合金貳千三百八拾七兩三部三朱

錢五百九拾文

右は昨十五日鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

亥十二月十六日

鑄物方掛  
見聞役

一昨十六日金山御祭ニ付、鑄立相休、御場所内取片付、  
諸職人諸道具改方仕候、此段相届申上候、以上、

十二月十八日<sup>(七カ)</sup>

鑄物方掛  
見聞役

一大錢七万千六百八拾三枚

錢ニして八千九百六拾貫三百七拾貳文

金ニして九百九拾五兩貳步壹朱

錢三百拾貳文

一半朱六万九百拾九枚

錢ニして壹万七千四百拾四貫七百拾八文

金ニして千九百三拾四兩三歩三朱卜

錢貳百七拾八文

合錢貳万六千三百七拾五貫九拾文

合金貳千九百三拾兩貳步卜

錢五百九拾文

右は昨十七日之鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以  
上、

亥十二月十八日

鑄物方掛  
見聞役

一大錢七万貳千四百四拾八枚

錢ニして九千五拾六貫文

金ニして千六兩三朱ト

錢三百拾貳文

一半朱七万貳千五百拾五枚

錢ニして貳万貳百九拾三貫五百九拾文

金ニして貳千貳百五拾四兩三步老朱ト

錢貳百七拾八文

合錢貳万九千三百四拾九貫五百九拾文

合金三千貳百六拾老兩

錢五百九拾文

右は昨十八日之鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上

十二月十九日

鑄物方掛  
見聞役

一大錢七万七千三百九拾枚

錢ニして九千六百七拾三貫七百四拾八文

金ニして千七拾四兩三步老朱ト

錢四百三拾六文

一半朱六万六千九百五拾八枚

錢ニして老万八千八百三拾老貫九百三拾六文

金ニして貳千九拾貳兩老步三朱

合錢貳万八千五百五貫六百八拾四文

合金三千百六拾七兩老步

錢四百三拾六文

右は昨十九日之鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

十二月廿日

鑄物方掛  
御徒目付

一鑄立大錢八万六千六百九拾六枚

錢ニして老万貳百拾貳貫文

金ニして千百三拾四兩貳部貳朱

錢三百七拾貳文

一鑄立半朱七万四千三百四拾枚

錢ニして貳万九百八貫百貳拾四文

金ニして貳千三百貳拾三兩貳朱

合錢三万千百貳拾貳百貳拾四文

合金三千四百五拾七兩三部

右は昨廿日鑄立高ニ御座候間、此段御届申上候、以上、

亥十二月廿一日

鑄物方掛  
見聞役

一大錢八万四千六百三拾三枚

錢ニして壹万五百七拾九貫百貳拾四文

金ニして千七百七拾五兩壹步三朱

錢百八拾四文

一半朱七万五千八百四拾貳枚

錢ニして貳万千三百三拾貳貫五百六拾四文

金ニして貳千三百七拾兩壹朱

合錢三万九百九拾六貫六百八拾四文

合金三千五百四拾五兩貳步

錢百八拾四文

右は昨廿一日之鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

十二月廿二日

鑄物方掛  
御徒目付

一鑄立大錢九万三百枚

錢ニして壹万千貳百八拾七貫五百文

金ニして千貳百五拾四兩貳朱

錢三百七拾貳文

一鑄立半朱七万六千三百七拾七枚

錢ニして貳万四千四百八拾壹貫三拾文

金ニして貳千三百八拾六兩三部

錢貳百七拾文

合錢三万貳千七百六拾八貫五百三拾文

合金三千六百四拾兩三部貳朱

合錢六百五拾四文

右は昨廿二日鑄立高ニ御座候間、此段御届申上候、以

上、

亥十二月廿三日

鑄物方掛  
見聞役

一 鑄立大錢九万三百枚

錢ニして壹万千貳百八拾七貫五百文

金ニして千貳百五拾四兩貳朱ト

錢三百七拾貳文

一 右同半朱七万六千三百七拾七枚

錢ニして貳万千四百八拾壹貫三拾文

金ニして貳千三百八拾六兩三步ト

錢貳百七拾文

合錢三万貳千七百六拾八貫五百三拾文

合金三千六百四拾兩三步貳朱ト

錢六百五拾四文

右は昨廿三日鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

亥十二月廿四日

鑄物方掛  
御徒目付

一 鑄立大錢九万五千九百八枚

錢ニして壹万千九百八拾八貫五百文

金ニして千三百三拾貳兩

錢五百文

一 半朱鑄立七万七千貳百八拾三枚

錢ニして貳万千七百三拾五貫八百四拾貳文

金ニして千四百拾五兩壹朱

錢貳百七拾八文

合錢三万三千七百貳拾四貫三百四拾貳文

合金三千七百四拾七兩壹朱

合錢七百七拾八文

右は昨廿四日鑄立高ニ御座候間、此段御届申上候、以

上、

亥十二月廿五日

鑄物方掛  
見聞役

一 鑄立錢九万六千三百七拾貳枚

錢ニして壹万貳千四拾六貫五百文

金ニして千三百三拾八兩貳部

一半朱鑄立錢七万七千九百四拾貳枚

錢ニして貳万九百貳拾壹貫百八拾四文

金ニして貳千四百三拾五兩貳部三朱

合錢三万三千九百六拾七貫六百八拾四文

合金三千七百七拾四兩三朱

右は昨廿五日鑄立高ニ御座候、此段御届申上候、以上、

亥十二月廿六日

鑄物方掛  
御徒目付

一 鑄立大錢七万八千六百五拾七枚

錢ニして九千八百三拾貳貫百貳拾四文

金ニして千九拾貳兩壹部三朱

錢百八拾四文

一半朱鑄立七万三千五百貳拾四枚

錢ニして貳万六百七拾八貫六百貳拾四文

金ニして貳千貳百九拾七兩貳部貳朱

合錢三万五百拾貫七百四拾八文

合金三千三百九拾兩壹朱

合錢百八拾四文

右は昨廿六日鑄立高ニ御座候間、此段御届申上候、以上、

亥十二月廿七日

鑄物方掛  
見聞役

一 鑄立大錢九万四千五百六拾三枚

錢ニして壹万八千八百貳拾貳貫三百七拾貳文

金ニして千三百拾三兩壹部貳朱

一半朱鑄立七万三千四百七拾貳枚

錢ニして貳万六百六拾四貫文

金ニして貳千貳百九拾六兩

合錢三万貳千四百八拾四貫三百七拾貳文

合金三千六百九兩壹部貳朱

右は昨廿七日鑄立高ニ御座候間、此段御届申上候、以上、

亥十二月廿八日

鑄物方掛  
見聞役

一 鑄立大錢六万七千六百拾四枚

錢ニして八千四百五拾壹貫七百四拾八文

金ニして九百三拾九兩壹朱

錢百八拾四文

一 半朱鑄立五万九千四百九拾六枚

錢ニして壹万六千七百三拾三貫貳百四拾八文

金ニして千八百五拾九兩壹部

合錢貳万五千八百八拾五貫文

合金貳千七百九拾八兩壹部壹朱

合錢百八拾四文

右は昨廿八日鑄立高御座候間、此段御届申上候、以上、

亥十二月廿九日

鑄物方掛  
見聞役

一 鑄立大錢五百九拾三万四千三百三拾壹枚

錢ニして七拾四万三千三百三貫八百七拾貳文

金ニして八万貳千三百六拾七兩壹朱ト

錢三百拾貳文

一 鑄立半朱三百四拾七万四千六百拾五枚

錢ニして九拾七万七千貳百三拾五貫四百六拾六文

金ニして拾万八千五百八拾壹兩貳貳步三朱ト

錢貳百七拾八文

合錢百七拾壹万八千五百三拾九貫三百四拾貳文

合金拾九万九百四拾八兩三歩ト

錢五百九拾文

右は鑄物方御再興亥九月八日より鑄立相初メ、同十二月廿八日迄本行之通鑄立相成申候間、此段御届申上候、以上、

亥十二月廿九日

鑄物方掛  
御徒目付

(原寸ノ異ナル文書二十四枚カラナル冊子)

八二ノ三

(朱) 一五月五日

写済

一昨十三日云々

亥十二月十五日 (四九)

一 鑄立大錢六万二千四百八十九枚云々

一 鑄立大錢四万五千弍百五十七枚云々

亥十二月十五日

亥十二月七日 宍通 鑄物方掛

一 鑄立大錢四万九千九百三十枚云々

一 鑄立大錢六万四千四百一十一枚云々

亥十二月八日

一 昨十六日金山云々

一 鑄立大錢六万六千五百七十四枚云々

亥十二月九日

一 大鑄七万六千六百八十三枚云々

一 白炭払底ニ付昨日云々

亥十二月十日

一 大鑄七万二千四百四十八枚云々

一 白炭払底ニ付昨日云々

亥十二月十一日

一 大鑄七万七千三百九十枚云々

一 鑄立大錢四万七千七百壹枚云々

亥十二月十二日

一 鑄立大錢八万九千九百九十六枚云々

一 鑄立大錢五万八千二百三枚云々

亥十二月十二日 (三九)

一 大鑄八万四千六百三十三枚云々

亥十二月廿一日

同

一通 鑄物方掛  
見聞役

亥十二月廿二日

御徒目付

一 鑄物方鑄錢之儀云々

亥十二月廿九日  
大久保宛一通

松田十太夫  
中村新介

一 鑄立大錢九万三百枚云々

亥十二月廿三日

見聞役

文書原寸 縦二七・八糎 包紙原寸 縦二八・一糎

横 四〇糎 横四一・九糎

一 鑄立大錢九万三百枚云々

亥十二月廿四日

御徒目付

〇三 喜入撰津ヨリ京都小松帶刀へ

茂久公暉姫卜御内婚ノ件

〔端裏書〕  
「小松様」

一 鑄立大錢九万五千九百八枚云々

亥十二月廿五日

見聞役

猶々

亥十二月廿六日

御徒目付

未降霜甚敷候得共、愈以御堅米可被為涉恐慶奉存候、於

一 鑄立大錢七万八千六百五十七枚云々

亥十二月廿七日

見聞役

其御許

一 鑄立大錢九万四千五百六十三枚云々

亥十二月廿八日

同

三郎様倍御機嫌克被遊御座候段、追々御左右奉承知、難有奉存候、於此地茂

一 鑄立大錢六万七千六百十四枚云々

亥十二月廿九日

同

御恕方様寒氣之御差障も不被為 在、難有奉存候、然は御内婚之一条、以張紙細々御答之趣、委曲承知仕候間、

則

一 鑄立大錢五百九十三万四百三十一枚云々

亥十二月廿九日

御徒目付

太守公江茂以形行言上仕候処、何も御構不被為在との段承知仕候間、直ニ徳寿院之方小の島等江相達候処、御請

被仕申候、

三郎様江右之趣被仰上被下度候、且御仕合之儀へ、二月

初旬と相達置申候、大奥地震之間、御雪隠出来替位之事

ニ而可相済模様ニ御座候、年明候へ、致見分、直ニ取付

之賦御座候、此節は

御内婚之事御座候間、可成可也ニ而被為済思召ニ而徳寿

院之方等江

太守様より御直御沙汰も有之、私ニも奉承知候付、前件

之趣小の島等相達置申候、岸良七之丞(兼義)昨廿一日発足相成

候付、右江茂申含置申候間、御聞取被下度、其外之儀、

自岸良より申上ニ而可有之存候付、筆略仕候、奈良原(兼)ニ

茂着翌日より病氣ニ而、漸昨廿八日転役之御請仕候次第

にて、彼是事情承知不申、誠以身ニ不応繁雜、御推察可

被下候、不得寸暇候付、乍大略公私取交御答旁申上候間、

可然様御取計被下度御頼申上候、時候御尋飛脚如是御座

候、恐々謹言、

十二月廿九日

喜入撰津(久高)

小松帯刀様(清盛)

副啓、先便より御張紙ニ而御答之趣貴酬申上候条は

追々申上ニ而可有之候、小子ニも無異奉勤仕候間、

乍慮外御放念被下度奉存候、いつれ迎年細事可得御

意候、拝賀時季御自愛御座候様奉希候、可祝、

文書原寸 縦一六・五糎 横一六二・三糎

〆三 松平春嶽公ヨリ島津久光公へ

勸修寺宮其他ノ朝議

一 封筒 双松君 用事 春嶽

一 封筒 ウラ、朱

一 封筒

昨日は折悪敷不得拝顔、残情不少奉存候、春寒之砌益御

清安奉珍重候、陳は俄參 内一橋・肥後 例之勸修寺宮一

件、殿下始より御談し有之候、右ニ付夕刻四ツ時 伊達へ

罷越、用事申聞候間帶刀ニ而も 猪太郎ニ而も一人伊達へ九ツ時半頃迄

ニ被差出候様致度候、且又

朝議御相談之条も取極ニ相成候、百意欣喜之事ニ候、右

之段為可申上、早々、頓首、

大晦日

(松平奉憲)  
鴨適外史

双松君

尚々例文、已上、

文書原寸 縦一四・三糎 封筒原寸 縦一六・八糎

横 八二糎

横 四・五糎

△三 伊達伊予守ヨリ島津三郎公へ

病氣快復ノ件

(封筒)

「三郎様

伊与守

貴酬

(封筒ウラ)  
「

」

拝読仕候、如命春寒之候候処、愈御清安奉大賀候、扱近  
日中僕微恙、如何御座候哉、万般之事件未半途にも不至

久敷引入居候事ハ不都合ニ付、加療可仕旨緩々御緒表之  
趣、深忝奉感銘候、昨今ハ大ニ得快復、浴櫛杯も可仕候

条必乍憚御降心可被下候、明元且より何時奔走可仕奉存

候、尚又為御見舞何寄之御品々御患投被下、千々万々忝

奉多謝候、只今春岳来臨、(高徳)猪太郎も参居候、後刻同人よ

り可申上候、恐惶頓首、

大尽

弄鋏

三島明公

文書原寸 縦一六・八糎 封筒原寸 縦一八・一糎

横 五三・四糎

横 四・七糎

△三 久光公ヨリ朝廷へノ建白書草案

勸修寺宮親王家御取立ノ件

(端裏書ハ朱)

「突亥」

是は不用」

乍恐別紙ヲ以奉申上候、元勸修寺宮之事、先日極内密前  
関白江内談仕置候処、達

天聰候段拜承仕難有奉存候、其後モ追々承合申候処、実以学才優長、當時之公卿ニ超過之義と承及申候、就而親王家御取立、尹宮同様

朝政御相談被為在候ハ、當時勢乍恐

御裨益被為成候御事と奉存候、右之義屹度建白仕候様

御内命承知仕、尚又篤と勘考仕候処、当分万事諸藩引合

之上周旋仕事御座候得は、此義迄小臣一人之献言ニ而は

諸藩之聞得も如何ニ御座候、殊ニ未発ニ手広ク相響候而

は故障付候義も難計奉存候間、何卒真実之

御英断ヲ以被

仰出度御事と奉存候、若両役辺之処評決難仕事も御座候

ハ、其節は下ニ而尽力仕候義は如何様トモ相成可申候、

且又御統料等之義ニ付、御懸念も可被為在奉存候得共、

此義は先日春嶽江極密内話可仕候処、千石二千石位は於

幕府如何様共可相成段返答仕候由も承候間、右之処、乍

恐今一往

御勘考被遊被下度伏而奉願上候、誠惶誠恐頓首敬白、

十二月

久光拜

上

文書原寸 縦一八・八糎 横五五糎

六三 久光公ヨリ近衛家へノ書翰草案

尹宮ニ関スル流言

(端書朱) 「近衛家江差出之書面草案 十二月亥」

尊翰被成下難有拜見仕候、先以御両殿様益御機嫌能被遊

御座、恐悦御儀奉存候、扱先日筑前家老黒田山城より承

候長藩之異説、聞捨ニも難仕、(高橋正風)左太郎ヲ以極内申上置候

処、尹宮様被仰談

天聰ニ御達被遊候処、殊之外 御逆麟被為 在候、衆人

疑惑ヲ抱候而は、不容易事柄と被 思食、宸翰ヲ以被

仰出候通 御拜見、小臣江も拜見被 仰付候旨、御沙

汰之由ニ而、御写 拜見被仰付、別而恐入拜見仕候、

実以不輕流言申唱シ候義、何共言語道断之次第ニ御座候、

此義弥三条之口より出候とも難申、長人之造言欵も難計

候間、其辺之処は猶又 御都合ヲ以 御 奏聞被為在度  
奉希候、且浮浪輩之事ニ付、愚考之趣致承知、御書取密  
見為仕候ニ付、小臣愚案ヲ以添削仕候儀、不放之罪奉恐  
入先度左太郎奉存候、併此義は随分御布告被為在候ハ、  
枝葉之浪士等改<sup>(心之)</sup>端ニも相成候半欵奉存候ニ付、昨日  
浪人ヲ以為入御内見候処、御評義ニも相成<sup>□</sup>仕恐入難  
有奉存候、実ニ 朝儀と申候処ニ而左太郎より<sup>□</sup>第一  
会藩杯之処不都合之事と相考申候間、右之通<sup>□</sup>勘弁被  
成下度再三奉希

文書原寸 縦一八・四纏 横二二纏

△七 長藩使井原主計入京許可ノ請願

此度井原主計儀伏見迄罷越入京仕度段、追々歎願仕候得  
共、御許容不被仰付、一先帰国仕

御指図相待候様被

仰付奉畏候処、此仮帰国仕候而は

輦轂之下江罷出候儀絶果候姿ニ而、藩祖以来未曾有之事

態、<sup>(毛利慶親・定広)</sup>大膳大夫父子実以当惑可仕、且国内人心如何可有之  
哉深懸念仕、使節之詮無之、彼是痛心罷在候付、数度之  
儀奉恐入候得共、猶又執奏家江御願申上置候、尤先頃より  
所勞罷在ニ付快氣次第一日帰ニして入京仕度奉存候間、  
何卒其

思食を以御憐察被為在、入京相叶候様御取計奉願上候事、

十二月

長州留守居<sup>(意)</sup>  
乃美織江

文書原寸 縦一七纏 横五四・七纏

△八 筑後守秀伴ノ朝廷制度改革意見上書

公武一和国是確定ニ付

<sup>(包紙ウツ書)</sup>  
一草稿 一通

愚意之仮相認候得共、忌諱ニ触候辺も有之欵、  
不堪恐懼、先ッ草稿ニ而入御内見候、

筑後守

拜

〔癸亥十二月〕

公武御一和天下之大策御確定可被遊之儀、実ニ

皇国万全之御規律被為建候御機会ト奉恐悅候、就而は

新規御制度ニ付聊存付候儀不願恐、左ニ奉申上候、

一朝廷ニ而ハ紀綱丈ケ御掌握被遊、細目ハ武家へ御為任

之儀御良法ト奉存候、譬ハ攘夷之御主意ハ綱ニ而処置

策略ハ目ニ御座候、綱目サへ御弁別相立候ハ、屢

勅書ヲ被下候ニモ不及、却而 御威光被為耀候御事ト

奉存候、

公卿御無人尋常之御勤務、是迄モ御用多之上国事無

大小御打掛リニ而は、乍恐御永久可有如何哉、万一

往々御用關等被為出来候哉ト奉恐察候、

一朝廷ヨリハ御依頼、幕府ヨリハ御遵奉ハ勿論、惣而外

夷ニ關係之事件ハ綱目ヲ別チ

勅詔幕令始終一之御沙汰奉仰候、

摂海ヲ始、防禦実備御専務之折柄、人心帰向ハ御一

大事ニ奉存候、乍恐幕府之御指揮而已ニテハ居合不  
宜哉ト奉存候、

一議奏所御取建之事、

朝議奉行被 仰付候事、

御先蹤有無ニ不拘、時勢御洞見、新規御制度被定度

奉存候儀、此ニケ条ニ御座候、

一議奏所ニ而御寄合日、議奏・伝奏、朝議奉行御会議被

有之、 殿下モ折々御參被遊候様奉存候、

当春頃記録所之御企被為在候哉ニ而、先ツ寄人抔之

称号モ出来候得共、其実ハ古制ニモ適不申、議奏所

之名目御至当ト奉存候、

一朝議奉行ハ大諸侯之内五人乃至三人

思食ヲ以御挙用被為在度奉存候、

綱ハ議奏ヨリ被達

叡聞、目ハ朝議奉行之所務ニ而、守護職・所司代ト

申談、関東惣裁職・閩老ヘモ往復有之、随分幕權モ

被為立候様之御規定御肝要ト奉存候、

守護職モ朝議奉行ヲ被兼候様有之度奉存候、

奉行・守護職・所司代之家老役掛リ議奏所出入可被許候、

一議奏所雜掌ハ檢非違使官人へ被 仰付可然奉存候、

非藏人并御内役人ハ不宜、檢非違使ハ大体家禄モ有之、自然品等モ宜、年中公役モ稀ニテ議奏所雜仕ハ

相当之職柄ニ御座候、御用暇ニハ明法之家職研究可致被 仰付候ハ、勤番之風儀モ宜哉ニ奉存候、

学寮モ追々御世話被為在度、堂上・地下第一ニ教ヲ被建候事

朝廷之御基本ト奉存候、

一御三家已下国々諸侯 朝參之御定并撰城撰海御守衛之儀等、大樹公御上洛之上御評決被為在候御事ト奉存候、

九門内御警衛番所之儀、追々ハ簡易实用之御定可然

哉ニ奉存候、

一名分不正之筋ハ御上洛之上、速ニ御改正被為在度奉存

候、

臨時祭之御用途、市中町人へ町奉行所ヨリ貸付銀之利息ヲ以、

朝廷之御式被行候之類、折角幕府御遵奉之御趣意被相妨候様奉存候、

一山城・近江之間ニ倉廩ヲ被建、非常御備米被儲置候儀、御遵奉之状顯然、乍恐被為安

宸襟候御一端ト奉存候、

撰海有事時ハ、淀川之運送ハ御手当ニ不相成、兼而近江米ヲ御用意之事御肝要ト奉存候、地理并運送之

巨細愚考仕置候儀御座候、御上洛之上ハ必御評定被為在度奉存候、

右条々不憚 御時宜、魚忽言上深奉恐入候、以上、

筑前守秀伴  
上

文書原寸 縦一九・五極 包紙原寸 三三極

横五二・七極 横四三・五極

△元 二条関白宣下等ノ件

二条様(齊歌)左大臣御転任 関白宣下 御内意御拝賀来廿三日之事、

一 中川宮様賜隨身兵仗聴帶刀、

一 伝奏御役料是迄五百俵之所、五ヶ年之間七拾俵被増行候事、

一 議奏方御役料五ヶ年之間六拾俵被増行候事、

一 正親町三条大納言様(東亮)、六条中納言様(有容)、阿野宰相中將様(公誠)

久世前宰相様(通憲)、国事御勤役中五十石ツ、被下候事、

一 稲葉右京亮様御上京被存候之処滞京之旨被

仰出候事、

文書原寸 縦一六種 横四一・四種

△三 中川宮二条近衛徳大寺卿等ノ罪状ヲ問フ

ノ帳紙

抑陰陽二柱御神此天地を開き、此皇国を生み給ひ、皇統相継ぎ 天照皇大神に至り、国体終始大ニ明に連綿伝授

し給ひ、天地と不朽の皇国なれハ、寸地も外夷に汚され

ては 御歴代之御神祖に被為対、 叡慮不被為安、恐多

くも 今上皇帝 睿敏、古今に超越し給ふ御才徳に被為

渡候故、外夷渡来之始より攘夷之 叡念不被為絶、終始

如一不撓之 御叡断ニ而、上ハ太古より御代々之御神靈

ヘ之大孝、下ハ天下万民を憂し、外夷之為に塗炭に苦む

を愍ミ給ふ、大仁実ニ万国異朝に無比類 聖天子に被為

渡候段、天下蒼生に至るまで感佩奉仰候、往昔天下之職

掌頼朝に御委任相成候後蒙古の夷賊犯し来り候と雖、北

条氏之尽力且は 神州八百万神震怒し給ひ、尺地も不奪

渠を鑿にす、神助と雖も北条氏之成功も亦不偉哉、徳川

氏ニ至り家康公深く外夷を憂ひ、諸夷を拒絶するの遠慮

明智に依而二百年近き太平を被保候、然るに方今徳川家

門譜代之者共、屢違 勅命而已ならず、家康公之諛にも

相背き、水戸景山侯(齊昭)之如き英智卓出之人を擯斥致し、高

貴之御方を落飾幽閉致し、正義之士を戮殺致し候、掃部(井伊直

頭ハ先年於桜田天誅を蒙ると雖も、尚未一族并ニ家門

者共宗家徳川氏をして不忠不義に陥しめ、無智之弱將軍を滅亡に至らしめんとす、故に昊天震怒して天譴頻に至り、江戸城之燒失、大坂之大火は皆天より災害を下し、徳川氏をして正に返さんとなし給ふなり、夫れ自然之至理ハ天地鬼神も所不能違也、況於人哉、君子ハ謹恐て赴吉、小人ハ邪僻にして至凶、(松平森保)会津肥後守ハ五万石の私欲より掃部頭に勝る奸計を相行ひ、其罪実<sub>(松平森保)</sub>に彦根に超たり、中川彈正尹ハ三千石之私欲より会津に与し、仮に兄弟の約を結び隠謀を相工ミ、律僧忍海に命し 皇帝を呪咀し候段 天朝に對し大逆賊禽獸にも劣り申候、其上此頃天子御同様之御冠を職方へ命し調へ候段、潜上之野心明白也、右等之奸計邪謀慥成証拠を止メ置候間、何時ニても一々差出し候節は天罰難遁者也、如此彈正尹の邪行を相助け候(齊敬)二条・近衛(忠愍)・徳大寺等も幕府へ阿諛し開關之天子を忘れ、私欲に溺れ、自然之至理に違ふ凶惡必至り可申候、右ニ付官武之奸徒今日より改過悔先非候て 叡慮を不矯、醇粹無二御誠忠之鷹司殿下之驥尾に付て、赫

々たる 神州之名分を正し、正義を以て 君恩に奉報之赤心不相顧に於而は、有志之徒決死粉骨碎身して可加誅戮者也、此等之儀当職正義之御方々速に被遂奏聞候様奉願上候、恐懼謹上、

亥十二月

有志中

文書原寸 縦三五糎 横八七糎

△三 久光公一橋中納言等ト連署上奏

尹宮ノ冤罪ニ就テ

(端裏朱書)  
「癸亥十二月」

此節

(翁彦親王) 尹宮之御上ニおゐて種々浮説相起候趣承知仕、不堪驚愕之至奉存候、素より

宮之

皇國之御為ニ御心力を被為 竭候御誠義は、一同深奉感服依頼候儀ニ御座候処、右様流言被行候儀は 皇國一層之危殆を添候義ニ而、何共戦兢恐懼之極地と奉

存候、

聖明ニおかせられ夫等之迂策ニ

御動揺可被為

在 御義とも不奉存候得共、姦邪凶愼之正議を妨ケ、骨肉を傷害仕候ニ離間之策を用候は古今同轍之義ニ而、昭然たる事ニは御座候得共、其策之成敗ニよつて天下国家之安危存亡を分チ候義、和漢共其証跡分明之事候得は、

縦令

聖明ニおかせられ

御嫌疑之

叡念不被為

在候共、銷骨鑠金之姦計

朝野を煽惑するニ至候而は以之外なる御大事ニ而

御間柄ニおゐて御罫隙一度相啓候而は

皇国之綱維御挽回之期は絶果候事と相成、臣等乍不及抛身命尽力仕候所詮も無之、誠亦空敷讒間之為ニ挫折仕候而は、実ニ不堪飲泣之至候得は、此時ニ当て

宮之日月を被為真候御高義、御忠誠は臣等社稷ニ換、死を誓て奉

奏上候間、仰冀確乎たる

聖聴愈泰山之不動ニ比せられ、

皇国万安之御鴻基を被為建候様臣等叩頭泣血闕下ニ伏して奉企望懇願候、誠恐誠惶頓首、

一橋中納言

松平春嶽

松平肥後守

伊達伊予守

松平下野守

島津二郎

長岡澄之助

長岡義美之助

文書原寸 縦一六糎 横二六五・九糎

八三 朝廷ヨリ列藩へノ御沙汰

浪士召抱ノ件

〔端裏朱書〕  
「癸亥」

列藩江

先般不容易次第ニ而人心動搖之折柄、出所不正之浮浪は勿論、其余無故京地江罷出居候浪士等は嚴重可相改其筋江被

仰出候、元來浮浪有志之輩

朝家之御為周旋尽力之志は神妙之至候得共、歲月ヲ積ニ從ヒ自然其弊相生シ、既激論暴行之徒も有之、遂妨朝議天下之騒乱ヲ醸成ニ至リ、別而残念至極ニ候、畢竟官家ニ親炙シ、進退自由之弊より却而可至失素懷欵、依之嚴重取調、其旧主江可引渡候、但浮浪有志之徒、無憑方其忠憤ヲ達之道絶果、各国之士氣も是が為ニ致沮喪候而は

皇国恢復之機ニ当り却而命脈ヲ絶シ道理ニ而、何とも御歎惜之御事ニ候、自然無拋訳柄難引取人体は十萬石以

上之諸藩江可召抱候、左候ハ、面々懇望之国柄も可有之候間、任望達忠志候様可致候、尤於各藩無謀過激之業無之様嚴重取縮可申付旨被

仰出候事、

但召抱候節ニは生国・姓名・年輩等相記届可申出事

文書原寸 縦一五・七纏 横六七・七纏

八三 久光公等鷹司閔白へノ演舌手控

堂上等幽閉勅免列藩登京国是決定ノ事

愚昧之小臣等漫々言上深恐入存入候得共、当節天下之形勢且夕ニ迫リ、闕下暴発之程も難計不容易件々、苦心之至、臣等情実難黙止傍觀ニ不堪次第、赤心言上仕度存候得共、巨細難書取、何卒御対面被 仰付、事実御水解被為在候様言上仕度存候、臣等微忠被為 聞召分以格別御憐愍速ニ直奏之程偏へニ奉至願候事、

演舌

一從來之事情言上之事、

一人心粉乱不得止之件々言上之事、

右等ニ付 輦下異乱も難計次第焼眉急ニ付、何卒両宮

国事掛り被免幽閉可被 仰出之事、

一堂上幽閉之輩

勅免之事、

一列藩闕下、御召之事、

一大職辞退以下之事、列藩登京聚国是御決定之事、

文書原寸 縦一三・五糎 横四一・四糎

八言 葛城彦一報告書

彦山一件 綿船一件

(端裏朱書)

「癸亥十二月 葛城彦一 報告書」

賞

豊前小倉寺社町奉行上条八兵衛ニ致面会、彦山一件承

合申候処、左之通ニ御座候、

一当八月より小倉領内之者は一人たりとも長州江渡海之

儀差留ニ付、彦山江茂其趣寺社方より達ニ相成候処、

同山之者共折々長州江渡海之様子相聞得、役々不審ヲ起し(密)蜜々為聞合寺社方下役之者遣しニ相成候処、彦山

麓村之商人ニ出合、兼而知人故暫時断どもいたし候処、

商人申ニハ、此頃彦山坊中諸所ニ而あぢな咄仕申候間、

小倉表江訴出可申存候との事ニ付、如何之次第ニ候哉

と尋候処、先頃より坊中ニ而ちら／＼咄承候ニハ、長

州江合体いたし居候へハ小倉ハ一山之もの、其上当分

勢ひ強キ長州之事ニ候へハ、何ニしてもあしき事ハ有

之間敷、殊ニ金子等も可渡との事なれハ、一山之仕合

抔とさま／＼之咄有之候と申ニ付、詮議方之役人則立

帰り、其趣役筋江申出、夫より及詮議為申由御座候、

一政所坊ハ彦山執当役之者ニ御座候処、(高千穂教育)座主より被申渡

候ニハ、其方事執当役として一山滅亡ニ相及候儀共企

不届ニ付法衣取上、小倉表江相渡との儀ニ付、小倉よ

り役方差越召捕来り、牢舎ニ相成申候、外ニ拾式三人

同断ニ御座候、

一座主院家内共二十一月廿二日より小倉表江出方ニ相成

候処、

村上銀右衛門方江止宿、昼夜不審番付ニ御座候、

一召捕之者共糺明御座候処、当七月十六日石州者之由ニ而彦山江登山いたし、座主院役僧ニ取合、御座主江申上儀有之候付、御目通り相願との事候故、役僧共申談、座主御逢被申候義御断被申旨申候候処、右両人大ニ気色ヲ変し候而、是非共御逢被下様御執成相頼との事ニ付、強而断候ハ、打果も可致勢ひ故、無抛座主逢ニ相成、左候而虎之間と申ニ而役僧とも酒肴差出取持候候、両人之侍共申ニハ、各方ニハ皇朝之尊キ事御存御座候哉と申ニ付、成程

尊王之儀忘却不仕と答候候、然らハ攘夷ヲ被成間敷哉と申ニ付、異国降伏等之御祈禱ハ仕申事ニ御座候得共、長袖之身分ニ御座候へハ、劍鎗砲術等之稽古も不致候へハ、御祈禱之外、攘夷と申儀出来兼之由相答候之処、勤王之志さへ候ハ、只今より練兵等被致候共不遲、必攘夷可被成、是当時之急務ニ候旨相進メ候ニ付、当山近年甚困窮いたし、兵器等相求候儀も出来不致、殊

ニ京都表之御祈禱も仕、御札相納不申候而不叶之処、夫さへ出来兼、于今上京も不仕得程之事ニ御座候由申聞候候、弥勤王之志於有之は、兵器等ハ勿論、金子等も御世話可申、当分金子何程位有之候へ、山中御立行可被成哉との事ニ付、役僧共夫ニハ渴ニ水呑心持ニ相成、申談之上三千兩計候へハ、当難等ハ相凌可申と答候候、夫ハいと御安き事ニ御座候、然らハ可申、我々ハ石州者之由、偽り候得共、実ハ長州藩中ニ而山田幹太郎・椎木熊吉郎と申者ニ御座候間、主人江申聞、早速金子調達いたし御渡可申ニ付、誰そ御越可被下、其上当季三千石相納可申候間、

尊王攘夷御同意可成給、当冬とは不相掛乱ニ相成申ニ付、其上ハ以前之通拾貳万八千石ハ御一山ニ差出可申杯と旁申聞ニ付、其頃ハ長州勢ひ強、小倉領内田之浦等江長州より台場築立、奇兵隊等多人数相渡居候時分之事ニ付、小倉ハ実ニ長州之物ニ可相成存候而、旁致同意連判迄も仕為申由、且兵糧差送之道筋之事より、

大砲等差登せ候談合ニ相成候処、兩人申ニハ大砲等ハ目立候儀ニ付、彦山江勅使仕立、其荷物ニ仕込候而送り候ハ、如何可有之哉との事候処、役僧共申ニハ、御勅使と号候ハ、小倉より役々付添可申ニ付、京都九条殿・醍醐殿等ハ座主院之御親族ニ付、右之諸大夫等より送り荷物之所ニ取計可然との事ニ而、右諸大夫等之名前等書付、兩人江相渡候、尤長州より師範等被遣稽古等いたし候ハ、小倉より察度等ハ入申間敷哉と役僧共懸念候処、兩人申ニハ小倉ハ風前之塵、其儀ハ少シも心配有之間敷とて稽古場所地見分いたし、後ハ陣屋ニ可致とて其見賦手筈等迄もいたし、兵糧ハ小倉表より取寄候ハ、目立へくとて、豊後日田表より取寄る手段ニ相成、金子等ハ引取之上可相渡約束、若相違之儀於有之は兩人之首ヲ可渡、其替り山中約錠違変之儀も有之候ハ、可打潰と堅約定いたし候而兩人引取候ニ付、頃合見合候而、八月下旬彦山より嚴瑤坊・良什坊兩人長州山口ニ差越、約束之金子三千兩之儀、山

田幹太郎・椎木熊吉郎ニ申入候処、折節八月十八日京都騒働(動)之一件申来、右ニ付長州腰ヲ折混雜中、金子出来不致、山田・椎木ニも甚心配ニ而、奇兵隊之世話役人瀧矢太郎(殊)と申者杯ニも兩人より談合いたし候得共、何分出来不致趣ニ付、兩人も是非ニ不及、此上ハ約諾之義ニ付切腹いたし御断申とて、既ニ其場ニ而切腹可致格護ニ付、彦山之兩僧并瀧矢太郎押留候而切腹ニハ不及候由、乍然彦山之兩僧其假帰國も難出来存候処、折柄三田尻江三条公杯御越ニ付、兩僧申合座主院之使僧と号シ三条公江御目見いたし候処、彦山一統勤王攘夷之志有之段格別之至、猶弥志ヲ不変様ニ可有之との趣ヲ三条公より座主江御書被遣候由、然共金子渡し方ニ不相成候ニ付、彦山より追々往返いたし候内ニ及露頭候間、五人欠落いたし、長州江這入込、其内式人ハ長藩之者兩三人家来分として召連上京之処、伏見ニ而小倉より召捕、家来ハ逃去為申由御座候、一彦山ニ而連判変名、左之通、

詮議中

成田坊事

宇都宮貫

出奔

巖瑤坊事

佐竹織衛(江)

詮議中

良什坊事

良野什郎

出奔

祐玉坊事

柏木民部

同断

教観坊事

藤山衛門

同断

中坊事

阿部豪一(逸)

同断

水口坊事

水口寛次

詮議中

本覚坊事

宇都宮堯

同断

橋本坊事

常照主水

以上

右は於小倉是迄糺方いたし候処、形行一通り如此ニ御座候由、此外ニ不容易企も為有之欵御座候得共、八月

十八日後長州腰ヲ折為申ニ付破れ不申、八月中も長州

本通り之儀ニ候へ、彦山江人数三四百人も楯籠、豊

後日田打取并小倉ヲ攻申之賦ニ御座候由、且又年内中

糺方取止ニ而、座主院等へいまた糺も無御座段、是迄

糺之形行一通り幕府迄小倉より御届ニ相成候由御座候

一九州国之旅人取締敷敷御座候ニ付、浪人体之者罷居不

申候、

一長崎製鉄所御借入蒸気船十二月廿二日昼前兵庫出帆、

同廿四日之夜五ツ時頃小倉領内田之浦江着碇泊いたし

目印ニ御挑灯帆柱ニ揚候処、長州台場より数発砲発ニ

付、碇巻揚引戻し、田之浦之土地之方裏手之青浜と申

沖ニ碇泊ニ相成候処、間もなく船表之火焚釜床之下荷

積之綿ニ火燃付、消方手ヲ尽し候得共、手ニ不及、終

ニ及焼失候付、海ニ飛込皆々およき候而青浜浦ニ上り、

乗組六十八人之内四拾人上陸、残り二十八人不知、其

内士官九人有之候由、廿五日之朝大原林左衛門より小

倉詰唐物締横目方ニ掛合来候間、土持平八直ニ出張候、

翌廿六日大原林左衛門初惣人数小倉之様引取来候、土持一人ハ田之浦ニ残り、廿七日晚小倉江罷帰申候、

一長州台場より砲発三十発計之由御座候、

一蒸氣船燃最中頃長州台場ニ声ヲ揚為申由、且夜明頃より酒宴相催候由御座候、

一廿五日下午ノ関ニ触達申ニハ、昨夜異船打沈メ候ニ付、

異人等死体流寄候共取揚申間敷、且右之異船江日本人乗組居候も難計、若日本人流寄候共同断流捨候様申渡候由ニ御座候、

一同日昨夜異船打沈候ニ付いろ／＼風説等いたす間敷旨触達御座候由、

一蒸氣船江三発当り候由下ノ関ニ而之評判、且田之浦之者共も同断ニ御座候、眼前ニ見物いたし居候処、三発目之玉当り候由杯と女共迄申候事、

一廿五日之朝、蒸氣船之橋船一艘田之浦江流寄居候ニ付

浦人より其趣同所番所江届出候処、繋置候而青浜浦江上陸人の方ニ掛合可致とて役人手筈いたし候内、長州

の方より小船三四艘乘来渚漕廻候処、右橋船見当、引行へくいたし申ニ付、浦人其船ハ御番所江も届申出置

申候ニ付、御待被下候へと為申由御座候得共、返答も不致むやみに船式艘ニ而引行申候由、且番所より人遣し候処最早沖ニ引行候跡ニ而御座候由、右橋船之内ニ十文字之紋付候弓張挑灯一張有之候由、浦人共慥ニ見当為申との事ニ御座候、

右之通承合申候間此段申上候、以上、

十二月 葛城彦一

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一三三号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・一糎 横五八六・二糎

八重 攘夷拒絶期限ニ付奉答書云々

但シ別紙奉答書ナシ

攘夷拒絶期限被

聞食度 御沙汰ニ付、別紙之通書付差出候間、内々被為

見候事、

文書原寸 縦一七・五糎 横二〇・五糎

〇三 生野銀山及大和騒動聞書断片

一 一昨晚浪士何かし、老人ハ会津之手ニ而召捕為申由御

座候、此節ニ至而、会津相振ひ居、且土州も同断之体

ニ相聞得申候、

一 平野次郎ハとふく取拔し為申由、

一 大和辺三百計之浪士追討、紀州并和州郡山・勢州之三

藩被仰付候由、右浪士之大將は、かの中山侍従(忠光)と申事

ニ御座候、大和辺ニ而乱妨甚敷様子ニ相聞得、既ニ代

官所江切迫り、三十人程打果、追々刺客相用ひ、追々

切り従へ可申勢ひ之由、是ハ全体大和

御幸御先番と申事ニ御座候、

文書原寸 縦一六・三糎 横六七・五糎

〇三 熊本藩山田十郎懐中書付類

八三七ノ一

〔(表紙) 山田十郎懐中書付類写式通并目錄老通〕

水府

前木英雄

大川 一

梅原登之助

関口八郎

今泉魁助

土州

岡 甫 助

西山平馬

清岡清四郎

辺村左伝次

西村弘蔵

前田要蔵

伊藤軍之助

上杉鉄三郎

黒岩治部之助

南部展衛

楠本文吾

利岡馬治

山本兼馬

弘光明之助

津和野

福羽文三郎

中島九郎

水崎久賀次

吉村專一

三池

吉村土肥助

森泰次郎

塚本源吾

仙石

多田弥太郎

高橋早太郎

筑前

中村円太

藤四郎

長谷澹太郎

秋月

戸原右橋

中興之大業向成之処、奸賊狂妄奉惱

(慶) 震襟候事、不堪憤激、一同西国江籠下挙義兵候、順逆

ハ顯然ニ付、有志之者ハ一旦長州ニ驅集候様可致、仍

而如件、

三条 (実美) 中納言

三条 (季知) 西中納言

東久世 (通禮) 少將

壬生 (基修) 修理太夫

四條侍(隆調) 從

錦小路左馬頭(賴徳)

沢主馬(宣嘉) 正

城内 木村三郎

広島 池尻茂左衛門

城内 早川与一郎

同 西原湊

同 梶村四郎

広島 山田辰三郎

在櫛原 芝山文平

広島 浅田節三郎

松崎井上 樋口平四郎

岡友左一

牧主馬

姉川栄蔵

府中掛  
郡奉行

京の熊小松原 梶村四郎

芋板川原六丁目 飯田瀧次

水間陽三郎

右山田十郎所持書付

一一同取締方之儀、兵議所より可被渡候事、

一諸藩士并浪士之分ハ會議所之指揮可受之、若不都合於

有之而ハ會議所より吟味可遂候事、

但家来之義も此旨相心得、兵儀所之指揮可受候、

一一以後は士分たり共、昼夜共門札持参通行可致、於奥役

所河村(季興)能登守・三宅左近兵儀所詰之分は、昼夜不限何

時無札之事、

但一同門限朝六ツ時より晚五ツ時限り、

一會議所詰名前左之通、

真木和泉守

水野丹後

宮部鼎蔵

轟武兵衛

山田十郎

土方楠左衛門

右承知可致事、

一非常之節ハ於奥役所半鐘打之事、

但失火之節は片撥、非常之變事之節ハ両撥ツ、兵儀

所江馳着差図可受候事、

九月八日長州三田尻江着仕候、然処京都出達之砌、内

膳殿より直ニ内意之趣も有之、三条様御落着御治定見

届奉帰国仕候而、乍恐

太守様御前様江も御安心被遊候様、各様方迄御内々御

達申上候様との義ニ御座候間、当時上滞留御模様探索

仕候処、弥長州江御滞座と申御治定ニも無之、何と欲

其中御転輿之御模様も被為在候ニ付、今暫弥御治定之

処見届罷帰度奉存候、尤右之次第ハ内膳殿極密之内命

ニ御座候ニ付、徒然御達仕義ニ無之候得共、余り滞留

延引仕義甚恐入候義ニ御座候間、右之段御内々密御達

仕置候、以上、

各様未得拜顔候得共、弥御清康賀寿仕候、

覚

各様真木和泉守・山田十郎ヲ以御頼之件々、夫々申談

承知仕候、何時ニても御出張ニ相成候ハ、長州より

御引受御世話可仕候、右之段得貴意置候、以上、

目録

一轟武兵衛懐中書付類写 卷冊

一彦山絵図 卷枚

一山田十郎懐中書付類写 卷冊

一右同人懐中書付 卷通

一半切書付 卷通

一一半切書付

(朱、裏表紙ニテリ)  
「癸亥」

横帳原寸 縦一四・三糎 横四四・二糎 四枚

八三七ノ二

(表紙)  
「山田十郎懷中書付類写」

外ニ老通添」

諸藩名録全ト有之候、横折帳之内

一為今度攘夷御祈願大和国 行幸

神武帝山陵

春日社等 御拜暫 御逗留 御親征軍議被為在、其上

神宮行幸事、

(容紙)  
松平肥後守

此者固陋頑愚云々下文略ス、

尾付右八月廿一日

去六月廿九日攘夷期限等之義、不都次第昨一日ニ付以

(政事)  
小栗長門守御沙汰之処、数日否之御答も不申上候付、

幸七月廿四日(久松定昭)松平式部少輔出府之便伺

天氣登京之砌、前件御催促も本テ、佐時候処、今以因循相過

如何之義ニ思召候、迅速可奏掃攘之成功嚴重

御沙汰之事、

右關東江被仰下候事、

八月十九日

今般行幸暫

御延引被 仰出候得共、於攘夷は早可遂成功累年之鞞

念候、依之勤王之諸藩不待幕府之示命、速可有掃攘之

由、

叡慮被 仰下候事、

八月十九日

京都御用之由ニ而諸士数十人河州五条辺江罷越候付伺

有之候得とも、右用御用被 仰付候義一切無之候間、

早々鎮撫可有之候、一昨日脱走候堂上も有之候間、何

之地罷越候も難計、万一罷越如何体之義申立候共、必

取扱無之様可心得候事、

八月廿日

右之通、仍而為心得可申入旨申付、如此御座候、已上、

兩伝奏雜掌

諸家懸

御靈筋瓦町南江入

大塚屋善助

倉増伊之助

是迄彼是真偽不分明之儀有之候得共、去十八日以後申  
出分は真実之

朕存意候間、此辺諸藩一同心得違無之様之事、

八月廿八日

松平(顯英)左京大夫

時勢之儀、深苦心頃日御趣意伺度旨、神妙ニ被思召候  
攘夷期限等之義、不都合之次第非一候間、去十九日亦  
々敵重被 仰出候、將七月廿四日松平式部太輔出府之  
便伺、

天氣登京之御御催促被 仰遣候処、一昨廿六日同人書

狀到来、去十二日大樹公对面鎖港之応接ニ取掛ニ相成

旨、被申渡候由言上有之様、右無相違、速ニ攘夷之成

功

奏上有之度 思召候間、其心得周旋可有之

御沙汰候事、

江藤新平

武藤某

富海 入本屋伊登七

伏見 錦屋善兵衛

三田尻浪人生

水府人 小鬼一郎

外五人別ニ写有、略ス

土州

十四人  
右同断

津和野

四人  
右同断

三池

別写有、略ス

右三人

府中町懸り

仙石

郡奉行

梶村四郎

右二人

京之熊小松原

筑前

何而日有感

弓取の箭たけこゝろひとすしに

右三人

岩をもとふす誠なりけり

秋月

身はたとひ鼎の中ニ朽ぬとも

右一人

心は君の魁やせむ

水間陽太郎

芋扱川原六丁目

此処ニ

中興之大業向成之文有り、別ニ写有、略ス、

飯田瀧次

三条中納言(実美)

微臣慶徳短才不肖家政向取扱尚不屈ニ而、重大之義奉

以下

言上候段重々奉恐入候得とも、当時之形勢実以不容易

右同

皇国開闢已来内憂外患一時ニ差迫り候義、今日より甚

城内

木村三郎

敷は無御座、至極至厄之際、一事之得失も千戴之行際

以下十二人

ニ関し、一夫之向背も四海之安危ニ係り候義と奉存候、

誠十八日已來變動ニ付而は、乍恐人心適從する処を不知哉ニ而、自然

輩下不寧、人心恟之比姿ニ而は、此余之變動も難計、実ニ臣子之身分ニ於而、一日も傍觀座視するに不忍次第、此節

朝議御更張之折柄、微臣共御尋も無之義を遮而申上候段、恐慎之至ニ御座候得共、過日拜

龍顏候節、於御前拜見仕候、

宸翰之御趣意、十八日前之

勅は真偽不分明、次來之

勅は真之

叡慮之趣ニは被為在候得とも、前後真偽之弁愚昧之徒未得瞭然、却而疑惑之心を生し、下として上を窺候様可相成、且慷慨過甚之衆中処士憤激、疎暴之面々元より其罪も可有御座候得共、大平遊惰之人心偷安苟且之徒多、攘夷之

叡念貫徹仕兼、却而横浜等之交易は追日盛ニ相成候而勅諭は一時之反古と相成候義を憤激仕候間、因循之輩作興鼓舞可致心得ニ而、自然過激ニ涉、背勅意候義可有之候得共、薩州公武ニ周旋して尊王之道振興し、長州奉

勅意攘夷之

背 叡慮初而貫徹仕候義は人心能所知ニ御座候、然は一時

勅意候とも其本意ニ於而は実ニ思

陛下之心ニ出候義ニ有之候、就而は其事件を明細ニ取糺、公明正大之御所置有之候得とも、仮令

山田十郎

其方儀探索御用掛被 仰付候事、

八月九日

浅野伊賀(氏祐)

酒井飛<sup>(忠絶)</sup>彈

水野出<sup>(忠絶、出羽カ)</sup>雲

井上信濃<sup>(濃)</sup>守

小笠原<sup>(長行)</sup>図書頭

ノ

今月七日之夜順動九天保山着船、今日海軍場江入込、  
修行人津輕藩士葛岡儀三郎○神金之丞と申人江参り合  
面会致し、此度順動丸急御用として着船之次第如何之  
趣哉と相尋候処、内々ながら此度小笠原図書頭御免ニ  
相成、再勤と申事哉ニ申聞セ候付、如何様之委細ニ而  
候段申尋候処、何申答不仕候得共、其次第柄至而異成  
願筆ニ而御座候、

七月八日仕出右中井範五郎

ノ

方今不容易御時体伝承仕候間、急速願登り祖先之微志  
を継、聊寸忠ヲ奉尽度存意罷在候得共、無位無縁<sup>(縁)</sup>之身  
分、唐突上京仕候義は重畳恐入候間、何卒右之志御憐

察被成下、出格之筋ヲ以上京被 仰付、身分柄相応之  
御用も御座候ハ、被仰付度、伏而奉願候、右之段可然  
御取成、偏ニ奉願候、

ノ

決別太甚匆々遺憾不少、僕伏水迄陪從致候処、追兵も  
来らず、徐々退去ニ相成、先々安心致し候間、軍費之  
談ニ付難波伝次郎江面会仕度、伏水より取て返し三条  
街頭ニ而卒度対談之処、此節之變動ニは見込付兼候間、  
猶早々引返し、今朝兵庫ニ而追付申候、途中何も相替  
義無御座候、御安意可被下候、京中之形勢如何ニ御座  
候哉、懸想之至ニ御座候、變動之義は急脚ヲ以御報知  
宜奉願候、

一 沢田子一昨日欵途中迄出掛ニ相成、御同道も可有之哉  
之処、外ニ一策有之、しはらく残ニ相成候由、定而御  
面会可有御座、最早京師ニ而少々之せり合、一旦は西  
下鎮西・中国・西国之軍を募り一大挙致候外有御座間  
敷、何卒貴兄ニも早く御決策御同志御伴誘御西下、兎

も角も熟慮密策不可不施、重疊御見切奉仰候、愚弟可  
然御指揮可被下候、家来善平も御面働ながら荷物取調  
御召連被下候様、宜依頼仕候、

一米良主膳義早々御手付られ可被下候、右は悴を薩江遊  
学江遣し置、金子杯も借かゝり居候由ニ付、いつれ薩  
江従随仕候考と相見得候へ共、全体朴質之者共ニ付、  
順逆之道理を説得し、正邪之別を知しめ候へ、我用  
と相成可申候、此義はづしを延し彼薩より出し候へ、  
我藩之害ニ差当相成候間、屹度御周旋宜依頼仕候、僕  
西下之上、国元江茂潜行同志相謀可申相舍居申候、何  
も面上ならでは難尽毫頭、先々急用二条啓呈仕候、草  
々頓首、

八月廿一日八半時  
兵庫駅亭ニ而認

八月十九日より改名  
真灌

山田十郎様

二白、小利ヲ不可見、大功ヲ可立、工夫今日之先務

梅

と相心得申候、如何々々、

写

一白銀

貳拾枚

右は今度姉小路殿江随従有之、下坂仕候者七人江禁中  
より被下之候事、

御奉行御才仇野左衛門

八月廿一日

右状ヲ折掛ニして御添状と有之候、

一第 粍米

一竹皮

一ミソ

一香のもの

一わらし

一こんたひ

一 白木綿

一 かつをふし

一 白豆

一 第一 塩

ノ

右浪士之義、三田尻江集合致し候処ニ而節制を相立候は勿論之義ニ候処、烏合之人数ニ付、主将之權は勿論隊長伍長ニ至迄節刀を給ひ、犯律之者、衆儀之上ニ死候処ニ候様、尤寛々過候得は、決而用ニ相立申間敷候間、敵ニ過し候場ニ有御座度事、

ノ

因備不言、上杉・阿州正論、病氣両伝奏召二条・近衛両家荷物江打付

一説春兵二条城ニ有

三条公古卿

十九日昼半頃

先殿下参内

先殿下参内

発端中川宮・二条殿

近衛左大将

先殿下諸太夫不参知之者

加天誅

先殿下不参知ならば御自害可有之候事、

無抛御同意

会より発大砲、薩よりホラヲ吹出し、中川宮直ニ参

内、

一会藩供廻禁中江詰居候由、村山才助(意)も同様との事ニ候

事、

ノ

越用人

中根鞆負

西六条用人

松井中務

右兩人応接

六条家老

池永某

大会所

右式ヶ所を始千辺江越兵士分百人已下都合五百人入込

飛雲閣

右は春嶽父子と諫営ニ設、在京之越人日々大坂城内江

往復、

越用人

中根鞆負

西六条用人

松井中務

士分百人、足輕其外小者迄都合五百人上京、

六条家老

池永某

大会所

米藩

半田門吉

江頭種八

中垣健太郎

右之人々結城筑後守方江罷越、聞合筑後守弟富金将曹

某西六条家中江養子ニ參居候ものより承候、

水

梅沢孫太郎

長

山口徳之進

肥

戸坂玄瑞

因

山田十郎

備

加屋栄太

米

村松源藏

芸

世山直八

阿

涌山伝次郎

姫路

真子外記

对

涌泉彦太郎

覚

松田重助

西島亀太郎

加屋四郎

萱野加右衛門

村上大助

松原縫之助

下野次郎

松井光之助

西村新助

宮村善平

以上

河山彦兵衛

赤里鉄之助

今枝鉄藏

右西行

五月十九日

此度攘夷之 聖旨を奉東歸仕候者、全

勝算有之訳目ニ而無御座候、論言如行、幕意又不可背

故ニ而、只々関東有志討死可仕心底ニ御座候処、關老

并大小之有司同心仕候者老人も無之、臣之胸中禍心を

包藏仕候由、横議を生し衆心不服ニ而嫌疑ニ相艱ミ、

勅旨貫徹仕候事、中々以不相成候、抑関東有司之情実

并宇内之形勢不相察、短方無智之身ヲ以重大之攘夷奉

命仕候段、不堪恐懼之至、奉対

天朝誠ニ以奉恐入候、且幕意ニ背候段重々不相濟義ニ

御座候、依而謹而罪を闔下ニ奉待候、出格之御垂憐ヲ

以、当職御免ニ相成候様

天違し、御内奏伏而奉願候、誠恐々々頓首々々、

五月十四日

殿下

慶喜

肥後

織田三郎兵衛

右名札八枚上包有之候、

一旅宿賄書出卷通有り

備前藩

池田真内

宇野助太郎

奉納藤崎之宮

久かたの天津朝廷を守れとは

我が産出の神を生ミけむ

源広弟

朝霄ニおもふ藤崎広幡の

神の宮居そわすれかねつる

二重

たとへ身は鼎の中に朽ぬとも

こゝろは君の魁やせん

さつまかたもにすむむしのわれからは

おこさぬ浪にぬるゝ袖かな

或夜の徒然に罪なふして

(真木和泉)  
保田

配所の月を見ると云るを思ひ出して

こゝろにもすめる今宵の月影は

うき世の外の詠めなるらむ

わひつゝも浮世をしのひすみ渡る

雲井の月やおのか友なる

細川様ト小札付ケ有之



長岡殿ト小札付ケ有之



右大切之品之旨十郎より呉々下役江申立候品

横帳原寸 縦一四・三種 横四四・二種 一六枚

八三ノ一  
〇三 熊本藩轟武兵衛手控

外ニ諸大名京都滞在絵図

三冊  
一枚

〔表紙〕  
一 轟武兵衛懷中書付類写

外ニ手扣写一箋

添  
絵図一枚



肥後藩

轟武兵衛

山田十郎

右就用事九州罷越候段承届候、以上、

十月廿九日

川口御番所〇

半切

覚

一具足作之事、

一 刀作之事、

但拵共ニ

一 煙硝作之事、

一 炮器作之事、

一 船作之事、

一 玉張之事、

一 木鉋之事、

一 なまりかひ之事、

武兵衛俸  
轟木九蔵

半切

右は今般

公武より

御沙汰之趣ニ付

禁闕為御守衛用意次第、早々御差出、詰中士領之振合

被

仰付候、此段可相達旨選挙方御奉行中より申来候条、可

被得其意段可有御通達候、以上、

五月十五日

服部弥門

笠理左衛門殿

半切

但馬

妙見山

表養父郡重以・氣多・七味ノ三郡へ跨ル上り五十丁ノ処  
寺一ヶ所・民家七十軒ハカリ、此処水甚多シ、夫より上  
ル十三丁アリ、此山此節之本陣ナリ、

但馬生野十万石代官

川上猪太郎

虚無僧 素行

右京妙安寺取締として十五年前より来候、養父郡藪市場  
出張所、

丹波与佐郡

齋藤六藏

但高之内ニ三万石アリ、

竖紙

大坂天満老松町

二重門南江入

伊予屋

種五郎

右之者予州松山浪人之由ニ而、両三年前より右町ニ住  
居仕、少々武術師南又は町人共縄事・仲人扱等渡世ニ仕  
居候処、当四月將軍様御滞坂之砌、旗本衆之内江取入、  
何之訳か金三拾両、大小一腰貫請候由、尤兼而浪人多出  
入仕候由、然る処、五月廿日頃上京仕、同月廿四日頃下坂  
仕浪人式人計召連、上京帰坂ニも召連、二階ニ差置食事  
扨運候、隣家之者ニ面体見せ不申候由、不仕儀之致方之  
由承り込候、

半切紙

一刀か脇差か拵代銀請取書

老通略ス

半切  
筑州

比喜多源二

小山田三郎

飯永次郎

宿石見屋

彦山

祐玉坊

藤吉

教觀坊

中坊

同

長見八兵衛

小松屋与市

山中嘉太郎

同 杣屋 權七

予州小松藩

飯塚龜五郎

同 花屋 多三郎

越後長岡

長谷川鉄之進

讚州上戸座

太田 二郎

小島友之助

同

藤本屋

武兵衛

伊勢

重村屋 平右衛門

榎林昌建

同松本屋

久米藏

徳田隼人

同五十若

文一郎

祇園太郎

同米屋文吉

元筑州



山田十郎

轟武兵衛

右は御国許江御用有之、今日爰許被差立候、尤添状可相渡候間、只今之内拙者宅江被罷出候様可有御通達候、以上、

八月廿二日

長塩庄兵衛

小坂大八殿

半切  
大里

小倉○徳力○呼野○

採洞所○香春○添田

彦山

御着之上、義俊坊・政所坊と御尋可被下候、

彦山より小石原、久喜宮、吉井、府中

右

ノ

半切

日月燈江海油

堯舜且湯武○

莽操丑惡浄天地間

一大戲場古今來

許多脚色ハシツケ

梅花仙央ニ出、猶可探

伏見

本田弥右衛門

京都

田中忠左衛門

半切

卑賤之身を以不容易事件言上仕候段、誠以奉恐入候得共時勢切迫いかにも黙座仕候ニ堪兼、不願万死申上候、先

般

勅諭を以攘夷之儀被

仰出、於関東御受申上候得共、期限等奏聞無之候ニ付、

天下之人心騷擾罷在、此往如何体之變動出来も難計候間

万一大樹公

御上京御延引ニ相成候得は、後見総裁職を以、速ニ期限

奏聞被仰付度候、実以未曾有之大寇を掃攘シ、

皇威を海外ニ御輝可被 遊候ニ付而は、既ニ非常之

宸断を以御親征をも思召被為立候程之御事体柄ニ候得は

乍恐是迄之如く、深宮ニ被為在 君臣之間隔絶仕候而は

不相叶、第一言路御洞開、壅蔽之患無之、御近習衆ハ勿

論、堂上之御方、時々

御前被召出、胸臆を被為尺候様有之度候、且国事御用掛御多人数被

仰付候処、何分ニも御員数御減少ニ而、御人材御精選被為遊、日々列藩之情実国家之大計等不被聞召而は不相叶、御近来諸大名追々参内仕、

天杯頂戴をも被仰付候程之事ニ候得は、是非非常之御破格を以、御直ニ赤心

御聞届被為遊度、一日安ハ千歳之禍ニ付、片時も早く攘夷之御大業其基本被為立度、此儀御裁断被仰付迄ハ差扣罷在候間、何卒速ニ御評決乍恐奉希上候、以上、

二月十一日

轟武兵衛

久坂玄瑞

寺島忠三郎

半切

此度正親町少将様御下向御使者來、以後外夷致到來候節

之心得振御尋ニ付、(小笠原忠幹)大膳太夫江申聞候処、毎々之

勅詔も有之候ニ付、厚勘考仕り、打払之儀ニ決心仕候段申上候様被申付候、

七月十五日

小笠原内匠

始面会

大池金左衛門

重役

高橋唯之允

助役

原与五兵衛

小倉江は十四日八ツ時着、十五日終日談判、十六日四時分小倉出帆、

ノ

今朝面談内蜜承候ニ付、添書内々入一見候、御用掛一列申限必々他見無之様存候事、

七月廿日

定功

ノ

半切

金子二万両八月十七日学修院江、両かへ店新町六角下ル  
三井より御用立旨、御請申上候、

岡村熊七より

衣棚二条上ル林俊嶺、両替町三条上ル、手代中村文右衛門

ノ

半切

彦岳権僧正内

良什坊

教観坊

ノ

半切

一酒肴代受取 小書

住吉屋菊松 一通略ス

ノ

一西洋記聞 佐分利又兵衛所持本

一職方外記 上野堅吾所持

一二国会盟録 平川駿太所持

一増訳西覽譚(マ) 馬哈黙略伝

一五月抄 与天主教論

一豈好弁 相沢着(巻) 斉藤文三郎所持

一破切支丹 時習館森尚謙着(著)

一海国図誌

一五雜俎 村井同雲所持

一西学風 永島三平所持

ノ

半切

一秋本玄芝

肥後藩 小坂小次郎同人御家来

ノ

議奏

三条中納言(実巻)

伝奏

議奏

野宮宰相中將(定功)

阿野宰相中將(公敏)

橋本宰相中將(実隆)

豊岡大藏卿(隆實)

滋野井中將(実在)

正親町少將(公重)

姉小路少將(公知)

二月十一日夜、右両役并國中御用掛之御方々、一橋江御

行向攘夷之期限御伐促被為在候処、一橋・越前・容堂・(隆喜)・(松平慶永)・(山内)

会津列座ニ而、(松平春保)

將軍帰府後二十日之御有免を蒙り、無相違拒絕為致候段

御受申上候、滞京之儀は十日限り、

朝廷より可被 仰出御都合之事、

大樹公上洛滞在日數十ヶ日之御治定相成候間、二月廿二

日出帆より海上往反、風波之障等無御座候得は、四月中

旬之内、攘夷期限ニ相成申候、尤帰着日より廿日御猶予

被下度儀ニ候、先夜も奉申上候通之儀ニ而、右之日積ニ

相成候事、

二月十四日

松平容堂

松平肥後守

松平春嶽

一橋中納言

↙

忠房卿 近衛大納言 亥二十六

堂々一箇好男子

輔政卿 鷹司中納言 亥十五

黄口之豎子

寺石下

有容卿 六条宰相殿 亥五十

忠直堅固ナレトモ不通変欺レ易シ

重胤卿 庭田中納言 亥四十三

文学ナシト雖一時ノ激論人ヲ動ス

光愛卿 柳原別当殿 亥四十六

輕卒ナレトモ邪曲ナシ、一時激論ヲナス

胤保卿

広橋左大弁宰相殿  
亥四十五

学術才幹アリ、然レトモ世ニ用ヒラレス

武者堂東

行光卿

石井三位殿  
亥四十九

深沈ニシテ好テ自重クス、国事可談

実則卿

徳大寺中納言殿  
亥二十五

名望高シ、砂中ノ采ノ如シ

信篤卿

長谷三位殿  
亥四十六

砂中采

実在朝臣

滋野井左中将殿  
亥三十六

憂国ノ士、砂中ノ采

実潔

押小路  
亥三十七

病人ト雖志ナキニアラス

公述朝臣

温潤ノ君子

実美卿

三条中納言殿  
亥二十七

当今ノ才子、穆如清風

通禧朝臣

東久世左少将殿  
亥三十一

一箇ノ人物、当世ノ才子

博通朝臣

六角大藏大輔殿  
亥二十九

正直楯門ヲ恐レズト雖モ人不知

公知朝臣

姉小路少将殿  
亥二十五

一箇ノ好男子、砂中采

公寿朝臣

滋井侍従殿  
亥二十一

一箇ノ人後世可畏

博房朝臣

万里小路左少将殿  
亥四十

当世一箇ノ好男子

光徳

鳥丸大夫殿  
亥三十一

一箇ノ人物、可滯暴ノ名ヲ取ル

隆諤

四条大夫殿  
亥三十六

丈夫ノ心ナキニ非ス

信成

長谷権介殿  
亥二十三

後生可恐

頼徳

錦小路権介殿  
亥二十七

一箇ノ人

重徳卿 左エ門督殿  
六十三

丹心有トモ欺カレ易シ、無智強胆

言知卿 山科前大納言殿  
七十四

良馬已老テ戦争ノ用ニ当ラス

基正 右兵衛権佐殿  
二十一

丹心アリト雖温室ノ臭アリ

宣嘉 主水正殿  
二十九

無才ナレトモ丹心人ニ譲ラス

ノ

此手本皮ニ似寄候、こふとふ向之鹿皮一枚

外ニ

白鹿皮杓枚奉願候、以上、



手本

一当用懐中 一冊

別ニ有リ

一書付類 廿一通

ノ

右轟武兵衛所持之品

横帳原寸 縦一四・五種 横四一・四種 一〇枚

八三八ノ二

私入京之儀再応奉歎願候処、御許容不被

仰付、去十一日御雑掌衆被差出候御沙汰之趣奉畏、取調

書其外御渡申上候、然処先日來奉歎願候通宰相父子申合

候趣も有之、父子積年之微衷、右書付等ニ而は難相尽、

万一行違共出来仕候而は不相叶、私儀入京被

仰付候而篤と

御聞取被成下候様御詮議之程奉願上候、藩祖以來格別奉

蒙

天朝之御寵遇、殊ニ宰相父子之寸忠兼々

叡感をも被為 垂候御儀、大江家之面目無此上奉感激候  
折柄、入京之道絶果候姿ニ相成候而は、父子始如何ニも  
痛心之程想像被仕、実以不堪恋

闕之至情、流涕泣血之外何共申上様無之候、右書付御渡  
仕候節、申合候纏々之旨趣は何卒私入京被

仰付候上ニ而言上仕度段、御雜掌衆江も申上置候儀ニ付  
再三之儀憚多候得共、可然御執成偏ニ奉願上候事、

十二月

長門宰相内(親忠)  
井原主計

右十二月十六日勸修寺家迄差出候由、武家江評議被 命候処、御取揚無  
之、御下ケ相成候方可然之旨、十八日評決ニ而候、

前文略

真本和泉書状  
扱は年来天下之勢一変、当度上京仕候付、殿下儀(実美)三条公  
等御懇命被下、依而都裏吐露、速ニ大権御収攬、五畿

御直隸相成候様、

御親征之 御手始として

行幸所々被為入候様五件建白仕候処、御取用相成、既ニ

期ニ相進候処、中川公会津之賊ト被申合、八月十八日之  
大变ニ及申候、右邪正曲直之儀は御聞ニも入可申、今更  
不申述候、其後案之通幕威又々熾ニ相成、攘夷之事も日

々薄、 皇宮之衰弱前日より甚敷、行末如何ニ相成候  
哉、当冬中ニも興亡相決可申候、憤愧之至奉存候、幸ニ

三条公奉始、七卿御下向ニ相成居候間、西国ニ而急度大  
業恢復相計申度、 京師ニは殿下儀烏丸(光徳)・万里小路(博厚)・徳

大寺(実忠)・豊岡卿等御残ニ相成、東西申合如何様ニも出  
来候事故、御見込之事も御座候ハ、此節機会ニ付奮然

人意表之御取計被有度奉存候、  
微文也 中興之大業向成之処、奸賊狂妄奉惱

宸襟候事、不堪憤激、一日西国江罷下拳義兵候、順逆は

顯然ニ付、有志之者一旦長州江馳集候様可致候、仍如件、

文久三年八月

三条 中納言(実美)

三条 西中納言(季知)

東久世 少将(通禮)

壬生修理太夫(基修)

四条侍從(隆壽)

錦小路右馬頭(顯徳)

沢主水正(宣憲)

国々  
有志之者江

以内書啓上仕候、向寒之砌御座候処益御勇健被為成御座、  
恭悦奉存候、然毎々御懇命被成下、殊ニ時々頂戴物も仕、  
万々難有仕合奉存候、尊藩御義申上候迄も無御座候得  
共、

神祖已来之御恩沢を深被思召、公儀を被为重候御忠誠之  
御事、小平常拝承、乍憚奉感佩居候義ニ御座候、方今世  
上人氣騷擾何程御配慮多々可被為在と奉拝察候、就而一  
事申上候、私支配所天草島樋島村某方江兼而知己之由、  
久留米儒臣、名前苗字不相知、悴茂次郎と申者罷越、長  
藩之勤静并勤王之議論を発し、品々弁論及ひ同志ニ可引  
入存慮と相見候付、程克論答いたし候処、懷中より別封

二通取出、一通は長州三田尻ニ罷在候元三条家外六人之  
檄文、一通は久留米水天宮祠官楨和泉守・加々美清助よ(真木)  
り同志之者江遣候書状之由、且当節右七人事諸浪人を集  
め、農民をも申語ひ、人々一万ニ相成候ハ、上京可致、  
其砌長藩は後詰可致と之計策等専ら評議中ニ而、茂次郎  
舍弟ハ和泉門人故、付随供ニ三田尻ニ罷在候趣も茂次郎  
申聞候由、樋島村より右天草島富岡陣屋江致内訴候旨、  
右陣屋元ノ手付より申越候、真贋虚実ハ難計候得共、巷説  
ニ符合之処も有之、何れとも不容易事件ニ御座候、万一  
右檄文并清助書状之通隠謀相企候儀事実ニも候得は、九  
州筋江間者等入込、人氣を扇動為致間敷ニも無之哉と被  
存候間、御心得之為不取敢別封差上申候、右ハ最早入御  
聴候哉も難計候へ共、極内々自書印封を以申上候、恐惶  
謹言、

十一月廿日

屋代増之助

忠良

五

御名

再謹啓、追々寒威相募、別而時下御保護被為在候様、乍憚  
奉存候、且茂次郎罷越候、樋島村某名前之儀不願内訴致、  
右ハ茂次郎と知合之事等相聞、後難難計旨ニ而、右名前  
を申立候儀ハ有免受度旨申立、又々已後内事を為聞探便  
利ニも相成候故、姑其意ニ任セ強而名前を不相糺段、富  
岡陣屋より申聞候儀ニ御座候、此段も為念申上置候、已  
上、

横帳原寸 縦一四・三糎 横四一・一糎 五枚

八三八ノ三

(表紙)

「轟武兵衛手扣写」

轟武兵衛所持

手帳

当用懐中

今度小栗長門守を以關東江被 仰進候

御沙汰書

大樹式百年來之廢典を興し上洛有之、万事恭順  
君臣名義改正之儀は、深

叡威之處、去九日賜暇下坂有之候、以前

奉聞其余之始末不明分、殊蒸氣船之向速ニ歸府、且第一  
期限等之儀ニ於而不都合之次第非一候付、屹度御糺可有  
之候得共、深 思召被為 在候間、追々御沙汰之儀も可  
有之事、

六月廿五日

松平肥後守江

大樹東下已後關東之形勢如何と 御不安心被

思召候付、事情熟察曲々可有言上、且攘夷之儀

叡慮貫徹候様、可然周施御沙汰候事、

六月廿五日

一橋中納言江

攘夷之儀、周旋不行届ニ付、後見職再応辞表言上之趣達

叡聞、無余義筋ニ被

思召候へ共、攘夷之儀は先年来

皇国焦土ニ相成候共、聊不被為

厭醜夷と麤戦、祖家江之御申訳被遊度 御赤心より被

思召立候事候間、

今日五已来日夜被廢

(廢)  
震襟、天地江神明と

御祈誓之上と仰出候儀ニ有之、武臣之職掌速ニ膺懲之奇

策を施し、可奉安

震憂筋ニ候所、於幕府度々御受を被申立候得共、兎角更

正如何と被 思召候儀有之、期限を以被 仰出候次第候

へは、今更内役不相整、人心一和無之旨、今以彼是猶予

ニ及候様ニ向、折角徳川家御扶助之御盛意ニ相背、畢竟

天下動乱之端を開、不容易形勢之至可申候間、一時嫌疑

之場合、

御垂憐被遊候へ共

皇国之為尺粉骨、大勢致挽回候様被乱丹誠、依之再度之

辞表被

召止候旨被 仰出候事、

七月五日

鷹司様諸大夫

牧 式部少輔

種田刑部少輔

青木 右京亮

御用掛被  
仰付候

牧 主 水

高橋 兵庫頭

永井主水正組同心

喜多尾平次

森 儀左衛門

瀧川播磨守組同心

岩本 孫四郎

山田 正作

蛤薬師通大宮西へ入

下御吟味処

浄 円 寺

正義与刀隠居之処

式百俵ニ而被召出

平塚 兵 斉

砂川 賢次郎

阿州

天野嘉左衛門

椽先又者之上ニ候へハ、敷居を隔候而尋問方

一其元は仁礼しニ候哉、

一數日御留置ニ相成、暑氣之砌発病等は無之哉、

一扨今日当所江御呼申候は、今般一許之儀は拙者共江取

調被 仰付、

朝廷之御命を以御尋申候得は詞を改申候、左様御心得

可有之候、

一何才ニ被成候哉、国元ニおひて何役被相勤、知行何程

被申受候哉、

一兩親存命歟、家内何人被暮居候哉、

一同藩田中雄平(新兵衛)儀は兼々懇意ニ被相交候事哉、

一右雄平とはいつ頃より同宿被致候哉、

一今般雄平御不審之筋有之、御召寄ニ相成候付而は、其

元始同居人をも不残同様御引寄、町奉行所江被遣候処

同所ニ而雄平自害いたし候次第は、いか様之事候哉、

様子有假可被申聞候、

一本人傍ニ被居候ハ、差留方可有之候処、何故自殺と

存見取押不被申哉、

一是迄拙宿ニ而雄平よく咄合等も可有之、一体同人性役

は振舞も事知と存候、殺伐之事も被見受候哉、

一何月何日之夜云々、

一同人佩刀を被取候趣相聞候得は被存候哉、包隠不被致

見聞及候候、有体承度候、

其外右ニ準し尋問之ヶ条可有之、

一いつれとも雄平之儀紛敷様ニ相聞候へは、其元ニも尚

又御尋之儀可有之、是迄之通紀伊守殿より御預被成相

慎被居可被申候、

一松平紀伊守殿御家来誰々仁礼し之儀、是迄之通御預被

成候間、途中氣を付御召連移可被成候、

右之件々、兵齊より内分ニ而咄聞事、

七月十日

今日より御吟味初事、

大垣十人

久留米廿一人

福山十人

淀 十人

中津十人

薩州六十人

郡山十五人

雲州十八人

筑前五十人

彦根廿人

水戸三十五人

肥後五十四人

備前三十一人

因州三十一人

長州

佐々木男也

守島忠三郎

肥後名代内膳  
水戸余四郎丸

仙台名代吉内

土佐兵之助

長州吉川監物

芸州家来

上杉

奥平

一柳

市橋

相良

京極

阿州蜂須賀信太郎

雲州人数少し

藤堂人数少し

久留米人数少し

筑前八

南部八

佐竹人数少し

中川八

御守衛人数

秋田廿二人

盛岡廿人

津三拾五人

米沢十五人

松山十五人

芸州四十二人

姫路十五人

津山十人

宇和島十人

水戸(マツ)  
梶清次右衛門

姫路  
河合惣兵衛

伊丹城弥一郎

因州  
中野治平

佐膳修蔵

阿州

楠木半平

大津伊之助

久留米

湊上幾太郎

山田辰三郎

肥後

宮部斉蔵

轟武兵衛

本勢州彦廬山寺内二居

棚橋周之助

御守衛高割人撰隊伍御定御差出し

分、左之通

(徳川茂承)  
和伊中納言

(鎌須賀齊裕)  
阿波中將

(井伊直憲)  
彦根前中將

(藤堂高猷)  
津中將

(上杉齊憲)  
米沢少將

(有馬慶徳)  
久留米少將

(伊達宗徳)  
宇和島侍従

(昌服)  
奥平大膳太夫

肥後

(幸教)  
真田信濃守

(島津茂久)  
薩摩少將

(定敬)  
松平越中守

(氏彬)  
戸田采女正

(志氏)  
酒井若狭守

(正邦)  
稲葉長門守

(正善)  
阿部播摩守

(巻礼)  
大久保加賀守

(柳沢保申)  
松平甲斐守

(正方)  
阿部主計頭

(忠誠)  
松平左膳

(正倫)  
堀田鴻之丞

上杉弾正太弼

同断不取敢御差出有之候分左之通

佐竹右京大夫(義興)

南部美濃守(利剛)

松平備前守(池田茂政)

松平出羽守(定安)

松平隱岐守(久松勝成)

松平安芸守(淺野長訓)

松平相模守(池田慶徳)

酒井雅楽頭(忠實)

松平三河守(慶倫)

水戸中納言(慶篤)

右七月十日頃迄

以上

瀧川(善力)伯瞻守組与力

本田只一郎

野村朝之進

同 同心

太田岩之助

木村力三郎

太田直次郎

大橋源吾

近藤金助

北村幸三郎

永井主水正組与力

神沢虎之助

石島四郎次郎

栗山庄藏

森 義左衛門

早津庄次郎

寺田代藏

右六月廿二日本能寺江參兩人受取

候事、

瀧川—組与力

熊倉市太夫

下田軒助

三浦錦次郎

本田上一郎

同—同心

只本孫四郎

山田正作

松本三郎

芝嘉一郎

右於町奉行所応対

長門藩下関へ役ニ而詰

林悦之助

下ノ関新地

岡本作兵衛

右同

菅野吉太郎

小倉

吉田屋善六

一辰刻より申刻

一昼夜交代之事、

一当分衣体羽織袴之事、

一鍵随従之事、

但休所江差置候事、

一廿人之内三分一ツ、不寝番可相勤事、

一已下略ス御親兵勤方  
頭書故

八月十八日變

因州不言 上杉・阿州正論

病氣引 両伝奏古

二条・近衛両家荷物取片付十七日之事也、

一説、春嶽兵二条城へ在、

三条公召帰

十九日昼半頃

先殿下参内

今度発端中川宮・二条殿・近衛先殿下・諸太夫、不承知之者加天誅、先殿下不承知ならば御自害可有之事、

此義御内意

会より発大砲、薩よりホラを吹出し、中川宮直ニ参内

長州藩

岩崎清之丞

攘夷

御親征之義、兼々之

叡慮も為在候へ共、疎暴之所置有之段御取調被為 在候、

攘夷之儀は何角迄も

叡慮確乎被為 在候事故、於長州勳力朝家候ニ付、人心

も振興之事、向後依頼之

思召候間忠節可被尽候、藩中多人數之内故、呉々疎暴無

之様加鎮撫、決而心得違無之様益勳

王可竭忠力と被

仰出候事、

夷狄御親征之儀、未其御機会も無之

叡慮之処〔彌〕

〔宸〕宸衷御沙汰之趣施行ニ相成候段、全

思召不被為 在候、何れ

御親征ハ可被為 在候得共、先此旨更被 仰候、尤於夷

叡慮は少も不被為 替候、 行辛暫御延引被仰出候事、

壬生官務

押小路大外記

出納内蔵権頭平 田権介外記

山科出雲守 三崎大舎人

右家来か

右平唐御門より往来其外宮様たりとも下り不相成

御親兵御取放役  
山田首五郎

三條西中納言 橋本少将〔実業〕

自今被止国事御用掛〔季恕〕

豊丘大藏卿 東久世少将〔通禮〕 右中弁万里 烏丸侍従〔光徳〕

自今被止国事参政

東園中將 滋野舟中將 修理太夫〔壬生基修〕 四条侍従〔隆綱〕

右馬頭錦 主水正従〔錦小路頼徳〕  
〔沢宣嘉〕

自今被止寄入

右各被止参内候事ハ、自今参政・国事・寄入等被止称呼事、

八条中納言 三室戸新三位〔隆光〕

自今誠奏加勢被 仰出候、左大弁宰相江申渡、  
〔廣橋胤保〕

八月廿日

江州より  
伺略ス元之候也

京都御用之由ニ而、諸士數十人河州狭山辺へ相越候付、  
伺有之候へ共、右様御用被 仰付候、依而一切無之候間、  
早々鎮撫可有之、一昨日脱走候堂上も有之候間、他地江  
相越候も難計、万一打越候事件之義申立候共、必取散無  
之様可心得候事、

八月廿日

右之通、仍而為心得可申入旨申、如此御座候、已上、

両伝奏雅書

諸家衆

去六月廿九日攘夷期限等之義、不都合次第非一候付、北  
条長門守御沙汰之處、数日否之御答不申上候付、幸七月  
廿四日松平式部大輔出府之便、伺

(久松定昭)

天氣、登京之砌前許御催も依時候処、今以因循打過、如

何之儀

思召候、迺可奏、抑攘之成功嚴重 御沙汰之事、

右関東江被仰付候事、

八月十九日

今般行幸暫御延引被 仰出候得共、於攘夷は早々可逐成  
功累年之 献

王之諸藩不待幕府之示命、速可有掃攘之旨  
叡慮被 仰付候事、

右諸藩江被仰付候事、

八月十九日

湊橋西ニ入最上屋敷佐登

長州役人

倉橋伊之助

山口吉敷

服部良助

同 鉄次郎

徳山北山村百姓

角左衛門

此者処ニ大島権四郎滞留

車塚妙見宮下

和泉屋

峯五郎

地下官人所ノ主ノ頭

出納出雲守

仁木兵部

右嵯峨二尊院江稿紙面書方富田織部ニ託してふ、

一条通大宮辺

智恵光院

淨福寺

兩替町御地下

烏丸押小路

朱座

姉小路烏丸東へ入

芸州四条通東洞院西へ入

船越八左衛門

島津左衛門

有馬新七叔父

右兩人薩中之正義

夷川車屋上江西側

島屋佐十郎

右之者関東御沙汰書ニも多分ニ所持いたす

膳所藩

儒

高橋作也

森喜右衛門

門人

柳原專藏

沢島信三郎

新町通三条下江岡村熊七同衆

粟屋良之助

以上正義下因循

家老

村松猪左衛門

本多頼母

柴田某

松本忠太夫

釜野通出水上ル下網町水戸生

江藤新平

武藤某

右兩人肥前生也、此国之儀懸合人物之由、

筑前周旋役

帆足弥次兵衛

石井仙次郎

同用人上立雲平孫隠居所居  
久野一学

外山藩

堂藤三平

因州家老

和田邦之助

荒尾千葉之助

山辺隼人

和田家来

松田正人

肥後長屋中ノ島  
。淀屋 清之助

春來彼是違

叡慮候上攘夷

御親征之期未及到來候得共、何れ 御親征可被為 在候

付、為御祈願大和国

行幸可被為 在

叡慮ニ候処、 御親征機會今日不可被過、旁行幸大和国

軍議可被為 在旨、屢遮而及言上、矯

叡旨候段、不容易次第ニハ

思召候、仍而 御取調可被為 在候付、被止參

内候へ共、押而參上、紛測且暴論徒引卒推參有之候而は

及紛乱候故、九門御固被仰付候、尚又長藩も征儀壯烈ニ

過候より疎暴論之輩可有之哉難計、不被為得止、境町御

固無免之事ニ候、然処長藩追々引退之節、三条中納言已

下堂上七人同伴及他国候段、不憚

朝威甚如何ニ被

思召候間、下行堂上早速帰京之様、長門宰相父子江被

仰付候事、

八月廿一日

正親町三条中納言 (実愛)

中山大納言 (忠能)

柳原中納言 (光愛)

為今度攘夷

御祈願大和国行幸、

神武帝山陵

春日社等

御拜、暫御滞留、

御親征軍議被為 在候、其上

神宮行幸事、

是迄彼是真偽不分明之儀有之候得共、去ル十八日以後申

出分は、真実之

朕存意候間、此辺諸藩一同心得違無之様之事、

八月廿六日

松平(頼英)左京大夫

時勢之儀深苦心、頃日 御趣意を伺度旨、神妙 思召候

攘夷期限等之儀不都合之次第非一候間、去十九日亦々敵

重被

仰出候、将去七月廿四日松平式部大輔出府之便、伺天氣

登京之砌、御催促被 仰遣候処、一昨廿六日同人上状到

来、去十二日 大樹公対面、鎖港之応接ニ取掛相成候旨

被申渡之由言上有之候、弥右無相違速攘夷之成功奏 上

有之度 思召候間、其心得周旋有之御沙汰候事、

八月

八月卅日伏見ニ而州用達錢屋善兵衛宅江、夜九ツ時過着

長生食増今少し跡ニ而待居候由、先江下坂直ニ届追罷下

候、朝五ツ時頃坂着、益田太夫ニ逢、夫より長用達柳屋

利兵衛宅へ着乗船、此夜直ニ明石迄下候、二夜泊、四日

朝発、昼後二日見ニ着、夕刻発帆、五日夕輦ニ着、此処

ニ而二夜泊、八日之昼頃長州富海着岸、入本屋儀七宅、

彦山権僧正内

良什坊

教観坊

ノ

阿州

松平縫殿介

同

松井光之助

大和

西村甚左衛門

矢筈山事

赤星彦太郎

藤之越事  
下雲 治郎  
今枝 泰造

丹州  
津和野

牧村三番之進  
桑木才次郎

右大坂江戸堀大目橋津和野可然見敷居、

中興之大業而成之処、以下別紙通ニ付略ス、



米良雄八重  
米良 要八

行兎原  
甲斐 右膳

大坂玉作御城与力  
石井良之助

号溪琴紀州栖原村住  
菊地海莊  
(池カ)

同州広村  
浜口儀兵衛

軍鑑  
牧野権六

右備前有志

右因州

大小性頭  
伊藤作兵衛

物頭  
安藤四郎太夫

物頭  
小堀衛門兵衛

同  
吉崎正兵衛

徒目付  
森下辰太郎

軍鑑  
山路治部衛門

安達積一郎

勝辺静男

土井鎌蔵

景山良蔵

天野加右衛門

伊沢

留居方役人  
後藤鉄之助

方今形勢逐同切迫、被惱

叡慮候段不堪忽觀候、天下有志之士憤発可有此秋候、弥

励

尊攘之志、速可安

(疾)  
震襟者也、

右十月廿二日

国友左一

姉川栄蔵

田城主

猪方隼太

三条西 季知卿トモ

三条 実美卿トミ

東久世 通禧朝臣トミ

壬生 基修朝臣オサ

四条 降調朝臣

錦小路 頼徳朝臣ノリ

沢 宣嘉ヨシ

森寺大和守

辻 讓次郎

丹羽出雲守

馬淵 肇

村上右兵衛大尉

坂田修助

木村三郎

池尻(茂カ)戦左衛門

早川与一郎

西原 湊

梶村四郎

山田辰三郎

芝山文平

浅田節三郎

樋口半次郎

松崎井上

河村能登守

古川延太郎

倉橋様御内、元水州浪人、年五拾計

市村衛門

大坂天満老松町二重門南入口

伊予屋

種五郎

大坂町与力

森山十次兵衛

此者より種五郎様子申遣候由

大原様御内

北川大膳

此人種々疑敷義有之趣、仙台藩市橋十郎存居候由候間、

四条様ニ罷出委細之事共中条右京(基好)より申聞候間、御聞可

然と申而国ニ帰り候由、畢而右京ニ尋候得は、右京は更

ニ何ニ茂承知不仕趣、

徳大寺様内

室町今出川下ル所

溝賢右馬亮

一条様内上鴨本

岡田甲斐守

右同岡新村

伊地知豊前介

二条様内室町

上立売上ル処

北小路撰津守

俣村上大進

田中権平召捕ニ参候節、権平を捕戸口より出、軒へ暫待

呉候様申出、引返し刀を指替出掛来候との趣、会藩外島

喜兵衛(機カ)より丹羽出雲守江咄候由、出雲守より承ル、

中筋今出川上ル

西側

解毒齋

右は御所御泉水江怪敷流物有之を取揚置候趣、

田宮弥太郎弟

浅井将監

本高松様へ三石三動

二条後胤と唱

孝光

紫野大官司石殿之下ニ住居、表ニ日本心之人間と云額を

掛、

夷川下ル処

清水付居処

竹屋町烏丸西ニ入、刀小道具商売、近来若州表より引越

候者、

若狭屋

宗兵衛

九条家ニ来二条新地住居

片岡主膳

本島田左近随従姦謀相助くる事露顯之節亡命致、近日ニ

帰京仕居候事、

今大路

山田大路陸奥

右は兼々一橋様へ立入致し、且板倉江も度々参居、其故

を以当三月末之頃水野和泉守方江咄之内、一ト間江へ立、

前後之次第不相分性を承り聞候、攘夷之儀は迎茂叶ぬと

申、堂上方ニ暴論之方十人計有之候ニ付、此方加誅戮不

申候而は不相成と云々、六月十八日之夜山田勘解由安ニ

無之、或ハ老人之家門外より声仕卒、夫より同道祗園社

江参詣、帰り道、其誘引同所町奈良富と云妓楼ニ立寄、

酒宴之内勘解由召連来、宮之内、仲藩三人富列江止別之

風ニ而咄之様左之通、

拙者事、近日編笠を衣、浪人致候、是迄段々永世話ニ相

成別而彼富之事ハ我等常々苦勞を掛候付、大切ニ致具様

申聞候事、奈良とみニ参る人之名前志々目賢吉・中村文

吾此時粟田宮江付居候面々惣而此様也、

一刀ト云処ニ向ならとみ

豊岡家御内

右文銭銅銭近来多分完集、横滨等江相廻候よし、慥ニ探索仕候、

三枝鎌助

今大路中川

二条家内性不分  
何之弾正

柳原家雜掌

山田右門

新町魚棚上ル

かんとふや

伏見街道五丁目

松屋

書生医兼

小江善吉

一橋付用人

平岡円四郎

水野知太郎弟

徒士頭

諏訪正右衛門

外国奉行

竹本甲斐守

歩兵頭

藤沢備前守

此行幕正議家

外記様

羽倉幸三郎

竹垣丈太郎

此兩人講武所頭取

溝口家来

大村鎌次郎

浅井友三郎

御目付

松浦庄一郎

勢州

山田造酒太郎

長州

志木熊吉郎

右八月十三日より彦山説客登る、十七日下ル、

長州医師

長野昌栄

三田尻住

多賀谷勇

宮市より四里  
小郡岐波

倉増宅

徳山 信田作太夫

岩崎謙円

宇治小幡 松本惣太郎

膳所家中 粟屋彦右衛門

岡村熊七事

立野熊太郎

平野次郎

北垣新太郎

横田友太郎

旭建

津田要人

本多素行

中島太郎兵衛

太田六右衛門

太田恰一郎

北村平蔵

進藤俊三郎

太田新左衛門

野津左伝右衛門

西村鉄次郎

太野友右衛門

右但馬土着人数

関口泰二郎

前木銀次郎

新家糸太郎

太川藤蔵

川俣左一郎

今泉真太郎

小島新七郎

梅原介五郎

右水府勢

横張原寸 縦一四・三種 横四一・三種 二三枚



